

終 章

1. 混乱の積極的意味

以上の考察から言えることは、江戸および明治期の日本の洋語学の素晴らしさである。そのレベルは高く、文法の理解は極めて正確である。我々現代人は、無意識的に現代文法の知識を当然の前提として昔の文法を考えるため、当時の素晴らしい文法研究を、往々にして時代的限界や関係当事者の未熟故の誤解だと「誤解」しがちである。しかし、これまでの考察を通じて、江戸および明治期の人々の誤解と考えられていたものが実は誤解ではなかった、ということが明らかになったと思う。

《原形》について言えば、動詞の《原形》という術語は専ら独逸語の分野で使用され、英語のものではなかった。新文法に基づく <grondvorm> が和蘭語原典に現れた時、日本の蘭語学は旧文法の ^{マートシカッペイ}Maatschappij が全盛であり、旧文法下の蘭語学では名詞・形容詞・冠詞の基本形という概念は知られていたが、動詞の《原形》は必ずしも明確ではなかったのである。よって、蘭語学者が《原形》の理解を誤ったと言うのは不当である。

《過去》と《半過去》に関しては、現代文法の視点で見ると、和蘭語と旧文法系の明治の英・独語学における《過去》^(Perf) は現代文法の「現在完了」で、当時の《過去ノ現在》^(I n d e r f f) 《半過去》^(I n p e r f) は現代文法の「過去」にあたる。それは、旧文法下にあった当時のこの2時制が現代文法のそれと概念的に逆転しているからで、同様に江戸～明治期においても、和蘭語の旧文法の《過去》^(Perf) は英語の新文法の《半過去》^(P r e s , P e r f) に、同じ英語内でも旧文法の《過去》^(Perf) は新文法の《半過去》^(P r e s , P e r f) になった。また、独逸語では新文法への転換が英語より十数年遅れたため、英・独間でも用語の逆転が生じた。それゆえ一時期、英語の新文法の《過去》^(P a s t) は、独逸語では旧文法の《半過去》^(I n p e r f) に、英語の新文法の《半過去》^(P r e s , P e r f) は、独逸語では旧文法の《過去》^(Perf) にならざるを得なかったのである。

これらの現象を単なる混乱、無理解と捉えるのは簡単である。しかし、この混乱の背後には <historisch> と <organisch> を支柱に据えて 19 世紀の欧羅巴を席卷し、息子の Heyse をして “gewaltig” (劇的) と言わしめた、あの言語学の新潮流があった。明治期の文法用語の混乱は、第二章で述べたとおり、ここから始まった欧羅巴語の新文法と伝統的な羅典文法との葛藤の反映だと言することができる。この混乱は、誤解の結果ではなく、江戸および明治期の語学研究者が、それぞれの時代のそれぞれの文法を正しく理解したからこそ生じたものである。用語の分裂逆転は語学教育的には確かにマイナスであるが、視

点を変えれば、このようにプラスに評価することが可能であろう。

今後の課題としては、まず、今回手が付けられなかったリーダーと辞書類の用語調査を行うことである。

また、今回の考察の過程で、和蘭語に関して、何故高野長英の蘭文法のみが当時の一般的な文法と異なって時代から飛び抜けた先進性を示しているのかという疑問と、藤林普山が著した『和蘭語法解』(文化12)の原典は英文典ではないかという仮説が生じた。

高野長英の文法は、a)「語根」に相当する考え方が見られる、b) Inf.が Modus に含まれていない、c) <de man is gestorven> (=Perf.) が現在時制である、d) 形容詞が一品詞として独立している、e) 分詞の代わりに数詞が一品詞になっている、という点において新要素を持っている。これらはいずれも現代文法では当然であるが、本書が成立したと考えられている文政11~12年当時(『蘭語学』II、1051-1052頁)においては、日本の蘭語学においても、欧州においてさえも当然ではない。独逸を中心とした歴史比較言語学の興隆によって旧文法から新文法への変化と混乱のただなかにあった欧州においてさえ、この5点は1830年当時の最先端の動きなのである。これが何故、この時期の日本の蘭語学者の著作に見られるのか、疑問が残る。

一方、藤林普山『和蘭語法解』に関しては、本論の巻末に「付録」として若干の考察を附したが、要点は、本書の文法には和蘭語にはないはずのものが存在するということである。同じヨーロッパ語であっても、英語の文法と和蘭語の文法は同じではない。『和蘭語法解』は《許可法》と《缺助言》を持つが、この二者はいずれも英文法の要素であって、和蘭語には存在しないのである。何故、ここに英文法の要素が紛れ込んでいるのか。この疑問には、ぜひとも答えが与えられなければならないであろう。何故なら、もしこれが英文典の翻訳なら、「日本における最初の英文典の翻訳」という栄誉を、本書が『英文鑑』から奪うことになるからである。

更に、《許可法》の関連から言えば、『助字要訣』(文化11)も英文典を底本にしている可能性を持つ。何故なら、『和蘭語法解』の一年前に三代目江馬春齡(元弘)によって筆写されたこの書は、《威法》の名のもとに <vermagende wijze> = <Potential mood> を持っているからである。『和蘭語法解』の著者である藤林普山は江間家と関係があり、江間家の周辺で蘭訳された英文典のようなものが読まれた可能性がある。『和蘭語法解』に関しては原本が不明なのであるが、V. J. Peyton が1776年に London で出版した、英仏対訳の英文典ではないかと考えている。Peyton の文法書を調査してこれらの問題点に一定の結論を与える必要が、今後の課題として、まだ残されているのである。

2. 洋語学習と日本語

しかし、そのハイレベルな文法研究の一方で、ひとつの問題点もまた明治期に生ずることとなった。この論考の途中で、文法用語の時代的・言語的相違と並んで注意を引かれた

のは、洋語文典著訳者の日本語に対する見解である。

江戸期と明治期の訳語の相違点は、創出ないしは意識術語の数にある。これは、序章2. (3頁)で言及したように、通史的視点を採った場合によりはっきり把握される現象である。明治期の文法用語は訳語としてのバラエティーと面白さに極めて乏しい。それに対し蘭語学には、《死語法》《分註法》など、その意味を突き止めること自体が楽しくなるようなユニークな創出術語が少なくない。《過去ノ現在》《半過去》《大未来》《大過去》《未来過去》《過去未来》等の時制に関するものも皆、江戸時代の蘭語学より生まれた意識の術語である。

Conj./Subj.の分野では、蘭語学における13種類の術語のうち創出・意識されたものは8種、英語学も同じく13種のうち8種であり、半分以上を占めている。独語学に関しては、Konj.に関する11種[大正・昭和期を除く]のうち4種が、Kond.では9種のうち《条件法》と《希望法》を除いた7種までが、いずれも何らかの意味において意識と言える要素を含んでいる。

また、この論考では取り上げなかったが、蘭語学における前置詞(接頭辞も含む)の名称には《蓋言》《冠辞》[蓋や冠のように単語の上に被さる語]のようなユニークな創出術語が集中しており、これについては別に小論にまとめた^{註1}。

これら創出・意識術語の時代は明治期前半まで続く。ところが、時代が進み、明治30年代以降になると、専ら直訳術語の方が普通になる。現代文法の6時制の用語はすべて原語からの直訳である。現代のドイツ語文法の《接続法》もそうであるが、それに対して、(1839)明治39年に登場し、英文法において今なお用いられている《假定法》は、意識術語の最後の砦である。しかし、その他の創出・意識術語は明治20年代でほとんど姿を消す。江戸の蘭語学は明治維新で終わったのではない。この創出・意識術語の消滅を以て、江戸期から続いた洋語学は真に終焉したのである。

蘭語学における多彩な創出・意識を可能にするほどに洋語文法の内容を咀嚼し得たのは、日本人が長く培ってきた漢学と国文法の知識の賜物であったように思う。<全然未知のもの、あるいは新しいものに触れた場合、それを以前からよく知っている似通ったものを土台として、その概念でもって処理しようとするのは当然であり、文化受容の形式においても、それは同様である>という古田東朔の言のとおりである^{註2}。

しかし、それには受容する側に受容できるだけの内容が充実していなければならない。いわばアイデンティティーの充実が必要なのである。ところが、洋語を担う世代は、和漢学の教養を自在に活用して術語を創出した人々から、それを欠いた、第二章第二節2. (194頁)で触れたような人々——極端な場合には幼い頃から洋行して日本語に不自由するようになった人々に代替わりする。洋文の翻訳には不自然極まる「直訳」が横行する^{註3}。日本語の側は、文法用語の創出・意識の材料を提供する積極的な基盤を失ったのである。洋語と日本語の立場の逆転である。そして、和漢文法の知識の援用から始まった洋語文法の利用は、明治期になると、逆に、国文法に術語を提供するようになるのである。原語直訳の

典型である「変化する定動詞」や、条件を付けていない部分を以て条件法と呼ぶような矛盾も、創出・意識の精神に満ちていた時代ならば、「原典では斯斯であるが…」と断り書きを付しつつ、日本人と日本語の感覚に自然になるような工夫が、あるいは施されたかも知れない。

東京大学初代総理・加藤弘之上申書や、あるいは、あの有名な中村正直の「漢字不可廃論」に限らず⁴、序章（3頁）、第二章注 68（281頁）、第三章第三節 3.（348頁）に引用した嵯山元吉、第二章注 69（281頁）の物見高見等、当時の文法書にはこのような日本語をないがしろにする洋語学習のあり方を危惧する言が頻出する。明治 30 年代に入ると、英文典の書評にさえ、

従来邦語を以て英作文の法を解釈せるもの無きにあらずと雖も多くは是陋劣蕪雜のものゝみ是他なし英文に精なるもの邦文を解せず邦文を解するもの英文に精ならず故に往々訥鑿相容れざるの解釈を為す是を以て徒に読者の脳を悩ましむるのみにして其得る所幾何もなし是れ夙に講学の士の遺憾とする所なり 本店こゝに見るあり日英の語学に精通せる諸先生に謀て本書の編纂に従事したる所以なり庶幾くは英作文の蘊奥を闡發するに於て遺憾なけん

〔中原貞七訳『新編中等英文典』（明治 31）の巻末に出版書店が書いた『英作文活法』に対する書評〕

という言葉が見られるようになる。福井久蔵は、明治 30 年代初頭における和洋間の乖離の現状を、<國文法を授くるもの外国語の文法に通ぜず、外国語の文法を授くるもの國文法を知らず。各自己が壘により共通して説かるべき法則をも別事の如く授け来たりしは確かに教授上の弊なり>と見ている（『日本文法史』311頁）。

事実、当時の方がこの「直訳」にどれほど困らされたかを示す興味深い書き込みが、ある英文典には残されている。明治 21 年に出された田中達三郎訳述の『須因頓氏大文典解釈』は、例えば Inf. と Gerund のことを、

動詞上ノ不定及ヒ分詞法

註解 動詞ノ文法上ノ形作りヲ考フル可ク先立ツ処デ動詞ノ如キ言葉或ハ動詞上ノ夫レハ英動詞ノ形作りニ於テ多く用ヒラルル処ノ二ツノ種類ヲ注意スル可ク便利デアルデアロウ

不定ガ時々法トシテ話サルル併シナガラ不定ガ充分ナル意味ニ於テ動詞夫レハ夫レガアラヌ処ノ動詞デアル事ノコレガ含ム可クアル 如何トナレバ夫レガ動詞ノ種別ナル點即チ儘メラレタルコトヲ勤メテ事欽クガ故ナリ

のように和訳する、典型的「直訳」である。この直訳文典の第 1 頁の余白に、誰かが鉛筆

で、次のような書き込みをしている。

田中達三郎善ク承レヨ 貴様ハ此ノ道ヲ学ブモノハ必ズ此書ヲ左右ニ置クベシトハ何
等ノ事ゾ 斯力カ^(ママ)ル直訳的劣文ヲ次テ自分ニ未ダ解セザルニ世ニ公ニ出ストハ貴様ノ
心底耻カシカラズや 前詠アル大漫序ヲ吐キタルハ悪アリシト世人ニ大ニ謝セヨ

更に、奥附の裏では、英語で <I Don^(ママ)'t like this book because this is very bad to read and this is very very cheep books^(ママ)> と言っており、この<直訳的劣文>に対する書き手の憤懣は納まる気配が無い。しかし、この本を紐解いて<動詞夫レハ夫レガアラヌ処ノ動詞デアル事ノ…>という訳文を読むと、この人物の怒りも分かつというものである。これが日本語であろうか。いかに言文一致の口語文が未だ行われていない時期の文典とはいえ、日常の日本語と甚だしく乖離したこのような「直訳」から外国語文法の提要を会得させようというのは無理というべきであろう。江戸期の蘭語学者の雅文による解説の方がよほどわかり易い。この<直訳的劣文>に、上述の書評の<英文に精なるもの邦文を解せず邦文を解するもの英文に精ならず>という状況が加わって、明治期の洋語学習者を苦しめることになったのである。

洋語文典に現れたこのような意識と当時の「直訳」のあり方については、すでに小論で若干考察してみたが^{註5}、今後も更に稿を新たに考えてみたい問題である。豊かな国語力を伴わずして外国語力の向上はあり得るか——<英文に精なるもの邦文を解せず邦文を解するもの英文に精ならず>というこの明治31年の言の意味する所は、ある意味で現代にも通ずる状況であり、対する蘭語学のあり方は、日本の外国語教育のみならず、例えば、今日の外国人に対する日本語教育などの分野に関しても、参考にすべきものを少なからず含んでいると思われるからである。Goethe は <Wer fremde Sprachen nicht kennt, weiß nichts von seiner eigenen.> (外国語を解せざる者母国語を知る能わず) と語ったが、今、我々が必要としているのはこの逆のテーゼであろう。即ち、母国語を知らざる者外国語を解す能わずということであり、今、我々が学ぶべきは、豊かな和漢の教養に洋語学を融合させ、《分註法》という術語を創出した中野柳圃の精神なのではないだろうか。

この<分註>に関しては、「和漢の教養と洋語学との融合」の見事な実例が、実は明治期になってから現れる。それは、二葉亭四迷の「割注」である。江戸期の和漢文表記を知る者の眼には、二葉亭の「割注」は、あの<文註>という表記スタイルに見える。そして、彼の用いた句読点もまた、江戸期の和蘭語文典の中で盛んに用いられていたものである。

句読点は、和蘭語との接触によって、初めて日本語に導入せられたものである。明治という時代が、上述のような語学書における和洋間の乖離を生ぜしめた一方で、文章語における原文一致体を生み出したことは周知の事実である。しかし、この文体の創始者の栄を担う二葉亭四迷の、あの有名な《白抜き点》は、実は、二葉亭の創作ではない。1800年代中盤に早くもその使用例があり、明治初年の独逸語と仏蘭西語の文法書にもまた、《白抜き

点》は見出されるのである^{注6}。

江戸期の和漢文を見慣れた者の眼には、二葉亭の「割注」は<文註>という表記スタイルの応用であり、一方、《白抜き点》は、蘭語学からの、まさしく引継ぎのように映る。このように、江戸期と明治期を断絶させないという態度を取った場合、それは、明治期の語学のみならず、文学関連の研究に対してさえも、新たな視座を与えるであろう。この立場からみると、明治期の新たな文学運動は、江戸期の洋語学習の延長線上に置かれるのである。明治期の新文体運動の担い手は江戸の末期に生まれ、最後の漢文教育と最新の洋語学習を、同時にその身に受けた人々だったからである。

江戸～明治期の洋語学習者は、和漢文と異なる文字・文法・各種の句読点を用いた文章表記に至るまで強い関心を抱き、これらを我が物にせんとひたむきに努力を重ねた人々である。現代の語学は、このような人々の手によって、遣隋使の時代から外国文明に対して抱き続けてきた溢れるような向学心に支えられ、<a b c>が版木に彫られただけで処罰されたような時代を越えて、種々の語学的・教育的問題をはらみつつなお、ひたむきに、営々と続けられてきた、このような輝かしい洋語研究の歴史の上に築かれているのだということ、我々は決して忘れてはならない。当該文法事項の内容を僅か数文字の漢字に凝縮した文法用語は、この先人の努力の軌跡を、未知なる文明に挑んだその精神を、時代の彼方から現代という岸边にまで伝え来る“海潮音”である。それが、文法不要論と用語自体の難解性を理由に敬遠されるのは、余りにも残念である。

現在の問題点を知るためには、何故その問題が生じたのか、その経緯を知らねばならない。過去の歩みを探らねばならない。未来は過去にある。過去は未来を語る。この論考が、隘路に陥った現代の外国語教育について、また、国際化・グローバル化と言われる時代を迎えた日本と日本語のアイデンティティーについて改めて考える一助となり得れば、望外の喜びである。

注

1) 拙論「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷 (VI) : 分離・非分離動詞について」『外国語教育論集』25 筑波大学外国語センター、2003 参照。接頭辞も《冠辞》とされた江戸期には、英語にも<inseparable preposition>がある。

2) 「品詞分類概念の移入とその受容過程」蘭学資料研究会『研究報告』第 130 号、1963、174 頁。

3) 崙山元吉と同じ陸軍教授の國吉直蔵もまた、明治⁽¹⁸⁷¹⁾34年の『簡明獨逸文典』「緒言」で述べている。

…応用問題ノ和文ハ、従来多クハ直譯体ニ流ルヽヲ以テ活用ノオヲ養成スルコト能ハズ 生徒ハ同一ノ文題ニテモ之ヲ直譯体ニ課スレバ譯スルコトヲ得ルモ否ラザレバ茫然成ス所ヲ知ラザルヲ通弊トス 生徒ガ作文ニ進歩セザルハ此不完全ナル教授

法ノ結果ニ非ザルナキカ 編者ハ此見地ヨリ本書ニハ勉メテ直譯体ノ問題ヲ避ケ俗語又ハ新聞体ノ和文ニテ課題シ以テ活用ノオヲ養成センコトヲ期セリ…

4) 明治⁽¹⁸⁷⁷⁾10年、加藤弘之はその上申書に、このままではく自ラ日本学士ト称スル者唯リ英文ニノミ通シテ国文ニ茫乎タル>心配があると書いている。

このような洋語一辺倒な風潮の中で、当時の洋語に通じた者から、その外国語上達の理由として漢文学習を挙げる声があるのもまた事実である。「漢字不可廢論」(明治⁽¹⁸⁷⁷⁾20年 5月 8日)はその代表で、敬宇・中村正直はく今日洋学生徒ノ森然トシテ頭角ヲ挺ンデ前程万里ト望ヲ属セラル者ヲ觀ルニ皆漢学ノ下地アル者ナリ 漢学ニ長ジ詩文ヲモ能クスル者ハ英学ニ於イテモマタ非常ニ長進シ英文ヲ能シ同儕ヲ压倒セリ……予是ニ於テ漢学ヲ廢セシメタルヲ悔ユ 曰ク恨ムラクハ漢学ニ従事セシメ少ナリトモノソノ魂魄ヲ強カラシメザリシコトヲ…>と主張している。

5) 拙論「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷 (V): 助動詞の和譯法と教授法」『外国語教育論集』22 筑波大学外国語センター、2000 参照。

6) 嘉永⁽¹⁸⁵²⁾5年『海岸砲術備要』に、《白抜き点》を用いた大槻玄沢の<凡例>があり、杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』IV (79~83頁)に紹介されている。訳年は刊年より半世紀近くも早く、訳者は本木正栄、文政⁽¹⁸²²⁾5年に病没、大槻玄沢は宝暦⁽¹⁷⁵⁷⁾7年に生まれ、文政⁽¹⁸²⁷⁾10年の死没であるから、この《白抜き点》は1800年代初期の用例ということになるが、この《白抜き点》が訳出時のものか、刊年時に付されたものか判然としない。同氏の『外国語と日本語』(28頁)では、あの有名な蘭文典『和蘭文語凡例』(安政⁽¹⁸⁵⁵⁾2)における、「まる」、「てん」、および《白抜き点》の混交表記文を見ることができる。

明治⁽¹⁸⁷¹⁾4年の用例を提供するのは、まず、『獨逸單語篇和解』(中村順一郎訳)の<自序>である。漢文のレ点等の句読点と同時に《白抜き点》が打たれている。また、同年出版の『洋学指針佛学部』(戸沢光徳著)の<序>にも、《白抜き点》が使われている。

さらに、国会図書館所蔵の明治⁽¹⁸⁸⁷⁾20年版『和解纂註英文規範』には、坪内逍遙が本名「雄蔵」の名で<はしがき>を書きおき、これに誰かが鉛筆で書き込んだ句読点と筆跡もあせぬままに残っている。その中に、たったひとつではあるが《白抜き点》がある。明治20年という、言文一致運動が起こった時期のこの書き込みは、あたかも誰かが句読点の実験をしたかのようなものである。

句読点に関する詳細は、拙論「二葉亭四迷の『めぐりあひ』とロシア語原文における句読点の比較——明治時代の洋語学習と《白抜き点》」(『文学研究論集』12 筑波大学比較理論学会 1994)、および「明治時代の洋語文典における日本語——蘭訳英文典『和蘭^{オランダ}語法解』と洋語文典の系譜」(『文学研究論集』13 1996)を参照されたい。

東京
書館
印

中村順一郎譯
獨逸單語篇和解
東京書肆 萬發閣發行

應需 和霞六月興書

譯者識

明治四年未歲仲冬初五日

書以為識洋語之一助云爾

壽梨來欲使寒鄉僻邑之童蒙觀此

單語和角序

余常憂之因乘間隙今著此篇命

篇盛行于世只獨逸譯書未有之也

字亦不可不讀也然而英佛之譯

國之事情不可不識也各國之文

方今開化之盛也八紘如一家各

獨逸單語篇和解自序

單語和角序

余常憂之因乘間隙今著此篇命

篇盛行于世只獨逸譯書未有之也

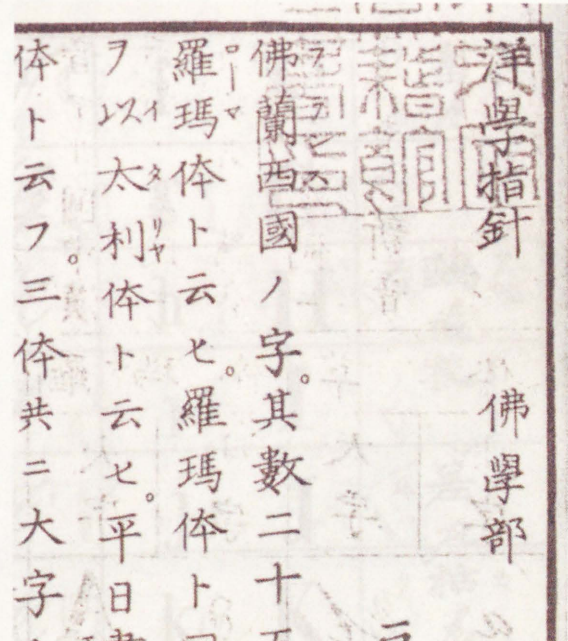
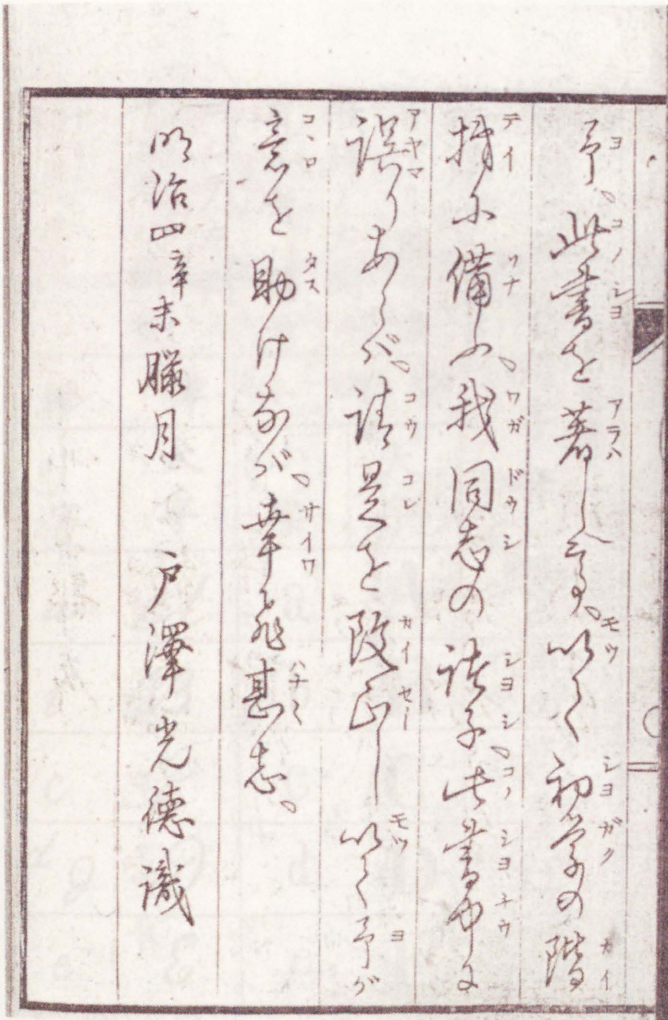
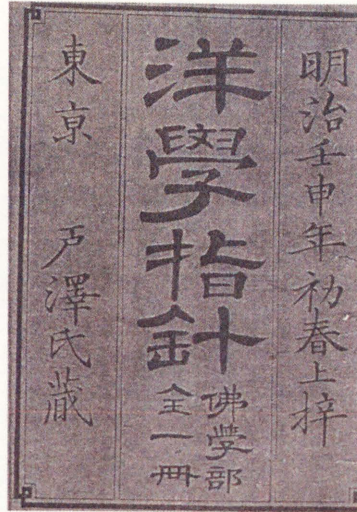
字亦不可不讀也然而英佛之譯

國之事情不可不識也各國之文

方今開化之盛也八紘如一家各

獨逸單語篇和解自序

資料 99.
(1871)
明治 4 年『獨逸單語篇和解』
(中村順一郎訳)の<自序>
この自序は左から右に読む。
下段はその拡大写真。漢文の
句読に混じる《白抜き点》が
はっきりと分かる。
国会図書館所蔵。



資料 100.

(1871) 明治4年『洋学指針佛学部』（戸澤光徳著）の〈序〉

これは右から左に読む。

下段右は本書の本文。《白抜き点》のみの序文と異なり、すべて「まる」を用いている。国会図書館所蔵。



資料 101.

(1887)
明治 20 年版『和解纂註英文規範』の坪内逍遙のくはしがき>

右から左に読む。

ここに見られる細長い読点と《白抜き点》は、鉛筆による書き込みである。

国会図書館所蔵。

著述なるかな、又讀む二三葉曰く至良の
手引草なるかな、又讀む二三葉發音精確
譯訓妥當、又讀む一二葉此書一たび市に
出て他の獨修書は顔色無からん、又讀む
六七葉おそらくは空前、又讀む八九葉絶
類なるかな、予豈序せざるを得んや、以て
序訖、

明治二十年二月上浣
坪内雄蔵 識

和解纂註英文軌範はしがき
予近おろ繁机に苦しみ、寸暇だも尚惜し
きを覺ゆ、偶々相識れる書肆の主人、異疑
島田君の著作に係る英文軌範といふ新
版をもたらし、之にはしがきをものして
よと乞ふ、予辭するに知る人の著書にあ
らざる限りは、以来序せざらん、と自誓し
たる由を以てす、書肆おしかへして曰く
兎も角も一閱せよ、即ち受て之を讀む、一
葉更に一葉覺仁を稱賛して曰く至要の

附録：『和蘭語法解』はオランダ語の文法書か

本論は、『和蘭語法解』は、実は英文典であって蘭文典ではないのではないか——即ち、その原本はオランダ語に翻訳された「英語」の文法書なのではないか、という立場に立っている。この考えを初めて抱いたのは1996年であったが^{注1}、その理由をここに述べておきたい。故に、これは今後の課題の萌芽とでも言うべきものであって、今ここで結論が出せるようなものではないことをお断りしておく。

1. 問題の所在

この『和蘭語法解』という文法書は、藤林普山によって訳出された蘭文典であると、一般に理解されている。このことに疑いを抱いた人は、いまだいないようである。わずかに岩崎克己と斎藤信が、原著者 Peyton<百乙東>を英文法家かと疑っているが、しかし、内容そのものを蘭文典だとすることには異議を唱えてはいない。ところが、これまでの考察結果から判断するに、『和蘭語法解』の文法には和蘭語にはないはずのものが存在する。この文法書は《許可法》と《缺助言》を持つが、この二者はいずれも英文法の要素なのである。

『和蘭語法解』は、中野柳圃や吉雄権之助などが書いたようなオリジナルな著述文典ではない。明治期前半にはヨーロッパで出版された文法書の輸入翻訳が盛んに行なわれたが、『和蘭語法解』は、そのような文法書翻訳のルーツと見なされ得る翻訳文典である。しかし、純粋な翻訳ではなく、訳者である普山の見解が、各所に挿入されている。

本邦における本格的な邦訳蘭文典は、文化⁽¹⁸¹¹⁾8年頃、馬場佐十郎貞由によって訳出された『和蘭文学問答(西文規範)』である。

此編ハ和蘭ノ kornelis van der palm ト云エル人ノ著述ニシテ 題号ヲ

nederduitsche Spraak konst voor de jungd ト云フ 此ヲ訳ヌレハ幼学須知文家必用
ト云ハンカ如キ義也 訳成テ後暫ク此ヲ西文規範ト仮題ス 原本板行ノ年ハ彼曆数一千
七百七十四年也 安永三年甲午ニ当ル (凡例 一) ^{注2}

しかるに、馬場のこの書はくいかなる事情によるのか、ついに刊行が実現しなかった>のである^{注3}。これに代わるものとして同年頃訳出されたのが、藤林普山の『和蘭語法解』(瑤玉堂蔵板)であり、文化⁽¹⁸¹⁵⁾十二乙亥十一月、京都・天王寺屋市郎兵衛、江戸・須原屋伊八、大坂・河内屋喜兵衛の各書肆から世に送り出された。従って、出版されて広く巷間に流布

した翻訳文典としては、この『和蘭語法解』こそ、その最初のものと考えられる。

ところが、同時期・同言語の翻訳文典であるというのに、両者の文法内容には大きな相違が見られるのである。例えば、Modus に関してであるが、表 1 (31 頁) を見ればわかるように、馬場の『和蘭文学問答』における Modus は、和蘭文法の定石通り 1.直説・2.使令・3.文註/希説・4.普通/終説 の四法である。一方、普山のそれは九法であり、その中の《許可法》は、当時の文法では和蘭語ではなく、英語に属するものである。また、『和蘭語法解』には《缺助言》という助動詞の分類があり、これも、実は和蘭語にはない文法事項である。

何故、普山の Modus はこのように数が多いのか。何故、英文法の要素が紛れ込んでいるのか。この疑問に対する回答が、『和蘭語法解』は英文典なのではないかという仮説である⁴。以下、この《許可法》と《缺助言》に、品詞の配列順序および原著者<百乙東>に関するものを加えた問題点 4 点について考察し、この仮説成立の是非を問うてみようと思う。『和蘭語法解』の原本は国会図書館所蔵の和綴本 3 冊を使用する。

2. 4つの問題点

2.1. 《許可法》と《第二附説法》について

2.1.1. 《説話法》と「作文法」

和蘭語・英語・独逸語における Modus の数は、和蘭語では 4 法、英語では 5 法、独逸語では 3 法であり、その構成は以下のようなのが普通であった。

蘭：	Inf.	Ind.	Imp.	----	Conj.	
英：		Ind.	Imp.	Potential	Subj.	Inf.
獨：		Ind.	Imp.	---	Konj.	---

問題は、英語の<Potential mood>である。すでに見たように、これは英語特有の《話法》であって、和蘭語・独逸語には存在しない。ところが、和蘭語の文法書であるはずの『和蘭語法解』にはこの《許可法》があるのである。しかも、『和蘭語法解』の Modus は全部で 9 法もある。その突出ぶりは表 1 (31 頁) と表 26 (334 頁) でも例外的に際立っている。

普山の挙げる 9 法とは、次のようなものである。

○活言法「ウェイセン。デル。ウェルクウワールデン」

1. 直説法「アーントーネンデ。ウェイセ」

2. 許可法「フルモーゲンデ。ウェイセ」

3. 附説法「アーンフーゲンデ。ウェイセ」「ヨンデルフーグレイケ。ウェイセ」「ウェ

ンセンデ。ウェイセ」「エールステ ^{第一} フルビンデンデ。ウェイセ」

4. 第二附説法「テウェーデ。フルビンデンデ。ウェイセ」

5. 使令法「ゲビーデンデ。ウェイセ」

6. 不定法「ランベパールデ。ウェイセ」

7. 疑問法「フラーゲンデ。ウェイセ」 : a. 疑問不無法 b. 疑問不有法

8. 不無法「ベヘスチゲンデ。ウェイセ」

9. 不有法「ラントケンネンデ。ウェイセ」

和蘭語の Modus は、普通 1. 3. 5. 6. の四法である。4. の《第二附説法》とは、例文を見る限りでは「条件」「反実仮想」を表わす Conditionalis のように思われる^{註5}。独逸語では、Konditionalis は一時《接続法》——普山の《附説法》——から分離した時期があり (Becker, 1864 ; Schäfer, 1882)、それが明治期の日本の独語学において《約束法》と訳され、明治期を通じて昭和に至るまで存続したが、英語にこれが現れるのは珍しく、江戸幕府旧蔵洋書中の蘭文典にも 1 例しかない (Hamelberg, 1845. 81 頁)。

最後の 3 者はそれぞれ、7.a. 普通の疑問文、b. 否定疑問文、8. 肯定文、9. 否定文、を作る法のこと、当時の文法書ではしばしば、Modus とは別の「四法」として Conjugation ——普山の用語では《転変図》を構成している。この Modus 以外の《法》の構成を表 27 (342 頁) にまとめてみたが、これによると、【肯定】【否定】【肯定疑問】【否定疑問】の「四法」を示すことは当時の文法書では一般的であり、『和蘭語法解』にのみ特有なものではないことが分かる。Modus が <manner of assertion> (新説) または <manner of action> (旧説) を表わす《説話法》であるならば、【肯定】【否定】【肯定疑問】【否定疑問】の四法は、これは文の作り方——いわゆる「作文法」であろう。

表 25 (305 頁) を見ると、この「作文法」にも 1800 年代の文法変動の影響を見てとることができる。まず、1845 年の Hamelberg の英文典において受動態 <lijdend> が加わる。受動態は、旧文法では動詞の種類の一つとして分類されてきたものである。P. Weiland の蘭文典 *Beginnselen der Nederduitsche Spraakkunst* (Amsterdam, 1806) における動詞の種類は、

- | | | | |
|------------------|-------|----------------|------|
| 1. bedrijvend | [能動] | 2. lijdend | [受動] |
| 3. onzijdig | [中性] | 4. wederkeerig | [再帰] |
| 5. onpersoonlijk | [非人称] | | |

の五種であり、2 番目が【受動動詞】である。馬場の『和蘭文学問答』(文化¹8) では 1. 《動他》2. 《被動》3. 《自動》4. 《動複》[5. 訳語なし]、野呂天然『九品詞略』(文化 8) では、1~3 は馬場に同じ、4. がなく、5 番目が《非人類動詞》《物類動詞》と書き入れされている^{註6}。『英文鑑』(天保¹¹11) では 1. 《能動辞》2. 《所動辞》3. 《中動辞》4. 《反己

動辞》5.《自動辞》、『和蘭語法解』(文化¹12⁵)では 1.《能活言》2.《所活言》3.《中活言》5.《物活言》で、4.がない^{注7}。

van der Pyl の蘭文典 *A practical grammar of Dutch language* (Rotterdam, 1819^{文政²})では、助動詞がこれに加わって、

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1.Auxiliary: Helpwerkwoord | 2.Activ: Bedrijvend |
| 3.Passiv: Lijgend | 4.Neuter: Onzijdig |
| 5.Reciprocal: Wederkeerig | 6.Impersonal: Onpersoonlijk |

の六種になるが、【受動動詞】の所属自体は変わっていない。この【受動動詞】が、Hamelberg の 10 年後、Lloyd(1855^{文政²}) の英文典において動詞の種類に属したまま (183 頁)「作文法」の <vorm> としても扱われ (291 頁)^{注8}、明治の直訳文典の時代になると、更に《進行形》と <do> を用いた強調形とが加えられるようになる。羅典語のように動詞自身で受動態を形成できないからには、これを動詞の種類でなくするのは合理的な考え方であろう。

この「作文法」は、英語では《説話法》と同じく mood と言われることもあるが、一般には、Lloyd が <vorm> と呼んでいたように <form> (あるいは <manner> と) と呼ばれる。一方、和蘭語では Modus と同じ <wijze> となる。『和蘭語法解』における <manner> <form> の意の <wijze> は、年代的に旧法に属するので、【肯定】【否定】【肯定疑問】【否定疑問】に相当する《不無》《不有》《疑問不無》《疑問不有》である。『和蘭語法解』の《活言法》は、本来の <wijze> である四法に、この <manner> <form> の <wijze> である「作文法」4 種を併せたものと考えられる。

van der Pyl の文法書は、

Verb are conjugated in four different manners, viz : affirmatively, negatively, interrogatively and with an interrogation negative. (115 頁)

と言って、Inf., Part., Ind., Imp., Sub. の次に続けて、<manner> としてのこの「四法」の活用形を挙げている。明治期に直訳された Brown の英文典でも、Mood 《法》と Form 《体》の Conjugation 《配合》は一括して取り扱われている。当時の文法書は動詞の活用一覧表を持つのが普通であるが、藤林普山が原本とした <百乙東> の文法書は、このようなく <form> の活用をも伴っていたのではないだろうか。

2.1.2. Potential mood (英)・Vermogende wijze (蘭)

しかし、これでもまだ 8 法である。では、最後にひとつ残った 2. の《許可法》とは何か。原語は <Vermogende wijze> (=Potential mood) であるが、これは、実は蘭文法にはないのである。

表 2 (37 頁) において江戸幕府旧蔵洋書中の蘭・英・仏文典における Modus の構成

を見ると、5箇所に＜Potential mood＞が現れるが、いずれも英文典に限られている。更に表 26 (334 頁)において英文典のみの mood の構成を見てみると、＜Potential mood＞の初出は 1549 年の Lily-Colet の羅英文典であり、1621 年の Gill の英文典以降、ラテン文法の Optativus (祈願法) に代わって＜Potential mood＞が英文法において行なわれるようになったことが分かる。

＜Potential mood＞とは、形態的には can, may, must 等の助動詞を用いるのがその特徴である。天保 11 年の『英文鑑』⁽¹⁸⁴⁰⁾では《許可様》と訳された^{注9}。藤林普山も、

本語「フルモーゲンデ。ウェイセ」ト云。即チ許可法ノ義ナリ。此レモヤハリ直説法ナリト雖モ。唯心ニ許ス意アル助言ヲ用ヒタルヲ殊ナリトスルノミ。故ニ此法ニ在リテハ konnen, moogen, moeten, zouden, behooren, wilden, wouden 等ノ助言アルヲ標的トスルナリ。 (廿九葉・表～裏)

のように、《助言》の存在を、《許可法》を直説法から見分ける＜標的＞にしている。この説明方法は、明治期の翻訳文典でも同様で、長野一枝先生講義『ブロン氏英吉利文典講義 前編』⁽¹⁸⁸⁶⁾(明治 19)は、Potential の訳語は《成就法》、その例文について＜can と must の二語が成就法を示すなり＞と言い(234 頁)、斎藤秀三郎訳『スウキントン氏英語学新式直譯』⁽¹⁸⁸⁴⁾(明治 17)は、普山と同じく《許可法》の訳語を持ち、＜現在許可ハ根ト共ニ may, can, 又ハ must ナル助動詞ヲ結附ルコトニ依テ形チ造ラルト＞と言っている(241 頁)。結局この mood は、明治 30 年代に流行した Nesfield の英文典で否定されるまで、《可成法》《可能法》などとも呼ばれて続くことになる。

『英文鑑』^{かがみ}の底本の著者である有名な英文法家 L. Murray は、^(文久1)1861 年版の *English Grammar* において、

That the Potential Mood should be separated from the subjunctive, is evident, from the complexness and confusion which are produced by their being blended together, and from the distinct nature of the two moods.... (78 頁)

と述べており、《許可法》は、Subjunctive 《附説法》から分離した、英文法特有の Mood 《活言法》なのである。

『和蘭語法解』^{オランダごほうげ}にこの英語にのみ特有の Mood が存在し、しかも「フルモーゲンデ。ウェイセ」という和蘭語の＜本語＞を持っているということは、やはり、その原本が和蘭語に訳された英文典だからではなからうか。

例えば、P. Marin <ピーテル・マーリン>の『言語書』^{實録}(1790) は仏・蘭対訳の仏文典で、1 ページを左右に等分して左側が仏語、右側が和蘭語になっている。従って、例のあの仏蘭西語の二つの過去時制 <Le I .Prétérit> (J' étois) と <Le II .Prétérit> (Je fus) は、それぞれ <De eerste voorlede Tyd> <De tweede voorlede Tyd> ——しかしその活用形は共に “Ik was” ——と対訳され、和蘭語の部分だけを見ると、本来和蘭語にはないはずの時

制が存在するかのように見えるであろう。しかも、“Ik was” というひとつの語形が二様の使われ方をされるかのように見えるはずである。

上述の van der Pyl の『エゲレス語稽古書』(A practical grammar of the Dutch language. 1819) も、

De aanvoegende wijs	The subjunctive mood	
De tegenwoordige tijd	The present tense	
<i>Dat ik hebbe</i>	<i>That I have</i>	
<i>Dat gij hebbest</i>	<i>That thou have</i>	
<i>Dat hij hebbe</i>	<i>That he have</i>	
De onvolmaakte verledene tijd	The Imperfect tense	
<i>Dat ik hadde</i>	<i>That I had</i>	(108 頁)

式の、蘭英対訳本である。墨書された和名を見ると英語の文法書として用いられたのであろうが、元来これは、英語で書かれた和蘭語の文法書であるから、当然のことながら、本書には<Potential mood>はない。

逆に、ペリー来航一年前に F. M. Cowan によって蘭訳された L. Murray の英文典『エンゲルセ スプラークキュンスト』(Endelsche Spraakkunst. 1852) には<Potential mood>=<Vermogende wijs>がある。

Potential mood	Vermogende wijs
Present tense,	Tegenwoordige tijd
<i>I may or can love,</i>	<i>Ik mag of kan beminnen.</i>
Impefect tense.	Onvolmaakt verl. tijd.
<i>I might, could, would or should love,</i>	<i>Ik mogt, kon, wilde of zou beminnen.</i>
Perfect tense.	Volmaakt verl. tijd.
<i>I may or can have loved,</i>	<i>Ik mag of kan bemind hebben.</i>
Pluperfect tense.	Meer dan volm. verl. tijd.
<i>I might, could, would or should have loved,</i>	<i>Ik mogt, kon, wilde of zou bemind hebben.</i>

(59 頁)

このように、<Potential>を持つ『和蘭語法解』の原本は、恐らく、この L. Murray と同じ形の対訳本、即ち、和蘭語に翻訳された英語の文法書だったのではないかと考えられるのである。

更に《許可法》に関して言えば、これが英文法のものであるならば、『助字要訣』(文化11)も英文典を底本にしている可能性を持つ。何故なら、『和蘭語法解』の一年前に三代目江馬春齡(元弘)によって筆写されたこの書は、《威法》の名のもとに<vermagende wijse>=<Potential mood>を持っているからである^{注10}。

2.2. 《缺助言》について

そして、この《許可法》に用いられる *can, may, must* 等の、現代で言う助動詞が、当時の英文法で <Defective verb> 《缺助言》として分類されるものである。

藤林普山は《助言》を《缺助言》と《完助言》の二つに分け、前者の動詞として、

- | | | |
|---|---------------------------|-------------------------|
| 1.doen[英 to do ; 独 tun] | 2.zullen[shall ; sollen] | 3.willen[will ; wollen] |
| 4.moogen[may ; mögen] | 5.konnen[can ; können] | 6.moeten[must ; müssen] |
| 7.behooren[(to be proper ; should: 応 マサニ…スベシ) ¹¹ | | |
| 8.laaten[to let ; lassen] | 9.hebben[to have ; haben] | |
| 10.worden[(to become) ; werden] | | [英・独語は筆者] |

を挙げている。その定義は <是其一句ニ全ク満ザル意アル言> であるが、これは、いわゆる不完全自動詞の説明であって、《缺助言》のそれではない。《缺助言》とは、過去分詞・不定詞・完了時制など、ある種の法・時制等を持たないため Conjugation の一部が欠けている動詞のことである。明治の英文典においても、《不具動詞》を始め、《^{かけ}缺動詞》《欠損動詞》《不足助動詞》等の訳語で以てその名が見える¹²。

ところが、これらの《缺助言》のうちのほとんどが、当時の蘭文法では《助言》でないのである。江戸幕府旧蔵洋書中の蘭文典で見ると、和蘭語の助動詞は、完了形を作る <hebben>(to have) と <zijn>(to be)、未来を作る <zullen>(shall, will) の三者か、あるいは、これに受身の助動詞である <worden>(独 werden) を加えた四者かであり、*can, may, must* 等に相当する動詞は立派な本動詞である。従って、普山の挙げる《缺助言》は皆、和蘭語では完全な Conjugation 《転変》を有する《完助言》なのである¹³。

しかも 1. の <doen> の場合、これは和蘭語では《助言》ですらない。<doen>、即ち <do> を <Auxiliary=helping verb> 《助言》とするのは、英語である。当時の文法書では、「疑問」と「否定」よりも、専ら “I did write.” のような「強意」の助動詞として説明されている¹⁴。要するに、普山はここで、《完助言》を《缺助言》とする、《助言》でないものを《助言》とするという二重の混乱を起こしていることになる。

英語の《缺助言》がオランダ語では本動詞である証拠として、W. Sewel は、上述の蘭英辞書所収の蘭文典 [英語で書かれている] で、和蘭語の <Auxiliary verb> に関して、わざわざ次のように注釈している。

Note. This Verb [zullen のこと] hath also an Infinitive Mood which it wants in the English Yet it is to be noted, that they are not so Defective in Dutch as in English : for since they have not only the Participles of the Present Tense, as *konnende, moetende, moogende*, but also those of the Preter-Perfekt Tense, as *Gekonnen, gemoeten, gemoogen*....

(*A Brief And Compendious Dutch Grammar*. 1708. 61 頁)

確かに和蘭語の *zullen* に単語的に対応する英語は *shall* である。しかし、和蘭語の *zullen* は *shall* のような <Defective verb> 《缺助言》ではない。もし下線部の註がなければ、外国語としては英語の知識しか持たない者や、あるいは英語を母国語とする者が和蘭語の <Auxiliary verb> を考える場合、英語の *shall* 同様 *zullen* も《缺助言》であると、無意識のうちに思い込んでしまうであろう。

<do> についての矛盾は、この逆のパターンではないかと考えられる。つまり、原典の英文法書にこれが《助言》として記載されていて、それが、対応する和蘭語に翻訳されて <doen> となったところの、いわゆる「蘭訳英文典」を、普山は『和蘭語法解』の底本として使用したのではあるまいか。それ故、和蘭語では《助言》、しかも <Defective verb> ではないはずの <doen> が、『和蘭語法解』では《缺助言》として表れているのではないだろうか。

そもそも何故、普山はこの <百乙東> 著すところの <ス普羅加公斯多> を翻訳しようと思いついたのであろう。それは、これまでとは違う新しい項目がこの本にあったからではないか。『和蘭語法解』に寄せられた序文のひとつに、<普山藤先生。最嗜此学。訳書数十部。殫思精煉遂究其蘊奥。乃本彼邦百乙東氏及。数家之斯普羅加公斯多。此譯曰引類举例加自得之説。著一書題曰和蘭語法解…> と述べた箇所があるが、普山が『和蘭語法解』中で名を挙げ説を紹介している P. Marin や W. Sewel という、これまでに知られている <数家之斯普羅加公斯多> にはない項目が <百乙東> にあり、それが《許可法》であり、「作文法」四法であり、《缺助言》だったのではないだろうか。

2.3. 品詞の配列について

杉本つとむは、普山が <1.性言><2.名言> のように冠詞を名詞より先に説明記述していることについて <初期のオランダ語の原書では一般的な形式ではないようで> あると述べている^{注15}。

そこで江戸幕府旧蔵洋書を調べてみると、P. Weiland(1806)^{文化3} の仏蘭対訳蘭文典では、8 品詞は 1.名詞 (実名詞と形容詞)・2.動詞・3.冠詞・4.数詞・5.前置詞・6.副詞・7.接続詞・8.間投詞 の順に示され、van der Pyl(1819)^{文政2}, Maatschappij の *Grammatica*(1822)^{文政5} [ともに形容詞が独立し、冠詞を加えた 10 品詞]、及び 1854 年の Weiland [Pyl, Maatschappij から間投詞を除いた 9 品詞]^{文政1} 等の蘭文典の品詞も、ほとんどいずれも 1.名詞・2.冠詞・3.形容詞… のような、名詞から始まる配置順を持つ。

これに対し、Locke(1801)^{享和1} の英文典では、1.冠詞・2.実名詞・3.形容詞・4.代名詞・5.動詞・6.分詞・7.副詞・8.前置詞・9.接続詞・10.間投詞 の順に配置され、冠詞が筆頭に來ている。Bilderdijk(1826)^{文政9} [冠詞と分詞を加えた 9 品詞。数詞がなく、形容詞が未分離]、Hamelberg

(1845)^{弘化²} [分詞の代わりに数詞を加えた 10 品詞]、van der Pijl / H. L. Schuld^{安政¹} [Locke から前置詞を省き、代わりに数詞を入れた 10 品詞] 等の英文典でも、1.冠詞・2.名詞・3.形容詞…のように配置されており、これは L. Murray^{寛政⁷} [分詞を除く 9 品詞] も同様である。

『和蘭語法解』の品詞は、1.性言[冠詞]・2.名言（自立名言[実名詞]と附属名言[形容詞]）・3.代言[代名詞]・4.活言[動詞]・5.分言[分詞]・6.添言[副詞]・7.接言[接続詞]・8.上言[前置詞]・9.感言[間投詞] の 9 品であるが、《性言》から始まる点、確かに英文法的であって蘭文法的でない。しかも、《附属名言》が品詞として独立せず、《分言》を一品詞とするのは、明らかに旧文法の特徴を備えた英文法である。

ところが、普山が<百乙東>の他に参照した P. Marin と W. Sewel の文典を見ると、品詞はこのようには並んでいないのである。P. Marin^{寛政²} の仏文典『ピーテル・マーリン言語書』は、わずか三種の品詞しか持っていない。即ち Naamen[名詞]、Werkwoorden[動詞]、Bywoorden[=De woorden die nooyt veranderen 不変化詞、つまり前二者以外の品詞全部](50 頁) の三分法である。この三品詞分類については O. Funke の *Die Frühzeit der Englischen Grammatik* (1914, 74 頁) に言及がある。

Sewel の辞書収載文典では、<Particle>の活用と用法が品詞論の筆頭で説明されているのは、英文典ではなく、蘭文典の方である。*Groot woordenboek* (1708 ; 1749) と *Volkomen Woordenboek* (1766) の蘭・英文典の内容は、次に述べる<Heer PEYTON>による改訂部分を除いてはほとんど全く変わるところがない。品詞は、英・蘭両語ともに 1.Noun ; Naamwoord 名詞 (Substantive ; Zelfstandige Naamwoord 実名詞、並びに Adjective ; Byvoegelyke Naamwoord 形容詞・2.Pronoun ; Voornaam 代名詞・3.Verb ; Werkwoord 動詞・4.Participle ; Deelwoord 分詞・5.Adverb ; Bywoord 副詞・6.Conjunktion ; Koppelwoord 接続詞・7.Preposition ; Voorzetsel 前置詞・8.Interjektion ; Tusschenwerpsel 間投詞 の 8 種で、「冠詞」は、この後に<Hierby komen nog de Particles of Ledekens, als A of an(1708, 8 頁)><Whereunto may be added the Particles, De, het, in English the(41 頁)>のように付け足されているに過ぎない。しかも英文典には、蘭文典のように冠詞の活用を扱った項目がないのである。

従って、この考察結果もまた、普山が 1.《性言》・2.《名言（自立名言と付属名言）》・3.《代言》…のように品詞を並べたのは<百乙東>の英文法書に従ったからではないかという仮説を補強する一要素となり得るかと思われる。

2.4. 原著者について

そして、この<百乙東>であるが、『和蘭語法解』の最大の謎は、他の<数家之斯普羅加公斯多>は判っているのに、肝心の原著者<百乙東>の正体がわからないことである。この原本が英文典ではないかという疑いを抱いた 1996 年以降、筆者は、この<百乙東>は Sewel の辞書中蘭文典に登場する<Heer PEYTON>ではないかと推測していた。以後こ

れに言及した研究になかなか出会えずにいたが、平成10年、松田 清著『洋学書誌の研究』（臨川書店）に、〈V.J.Peyton, *Nieuwe Engelsche spraakkunst*. 2de dr. Amsterdam, Pieter Meijer, 1779.（アムステルダム大学図書館所蔵）から若干の引用がある〉との記述を見出した時（296頁）、Peytonの英文典の関与のあることが確認されたわけであるから、少なくとも〈百乙東^{ペートン}〉とは誰かという長年の疑問は解消されたことになる¹⁶。

しかし、その引用がごく僅かであり、その箇所が上述の問題の箇所ではないようなので、この点をぜひ確認してみたく思う。《許可法》・「作文法」四法・《缺助言》のことを鑑みるに、この『和蘭語法解^{オランダごほうげ}』は〈百乙東^{ペートン}〉の英文法を骨格とし、それに既知の和蘭文法家〈数家〉の内容を接合・挿入したものではないか、そう考えるからである。

3. 若干の検証——Peytonの英文典について

この〈百乙東^{ペートン}〉であるが、18世紀中盤に、フランス語で英文法書を書いたスコットランド人の文法家 V. J. Peyton という人物がいる。渡部昇一に拠ると、彼には

Les vrais principes de la angloise etc.(London, 1756 ; 第2版 (1758))

Les éléments de la langue angloise.(London, 第2版 (1765))

という著作があり、特に前者は〈元来ロンドンに住むようになった外国人向けのもので…約350ページ〉の書物である。〈1ページ3欄であり、英語にはアクセントや音標記号があり更に仏訳が付され〉、その英訳 *Elements of the English Language* (London, 1758 etc.) は〈その後約半世紀間、数多くの版を重ねて標準書としての評価を得ていた〉(英語学体系 第13巻『英語学史』大修館書店、1975、479頁)という。

ところで、ここに東京学芸大学所蔵の V. J. Peyton の文法書がある。上述の2書中後者と同名の書名を持つ、英蘭ならぬ英仏対訳文典である。1776年に London で出版された英文典で、書名を *Les Elemens de la Langue Angloise. The Elements of the English Language*. (2.edition) といい、一頁を縦に三分割して、左側が英文、中央がその英文の発音記号、右側が仏文の説明になっている。1776年は安永5年で、長崎では、若き中野柳圃が通詞の職を辞して学究生活に入る直前の頃である。この Peyton の蘭訳版が、普山が『和蘭語法解』を書く際の底本になったとしたら、その内容は上記の問題点とどれほどの整合性があるであろうか。以下、その概略を述べるが、今回は概略のみに留め、詳しい考察は後日稿を改めて記したい。

3. 1. 〈Potential Mood〉について

Peyton の Mood は5個で、その中に〈The Potential mood〉の名が見える。英文典であるから、当時はあるのが普通である。Diologue IX. が〈Des Verbes〉の項目で、以下のような説明が Mood に関してなされている。

・ The word *mood* signifies a certain *manner* of expressing the *aktion* denoted by

the verb. (p.103)

- A. In how many moods or manners can one vary the verb ? (p.103)
- B. In five, viz. the Indicative, the Imperative, the Potential, the Conjunktive or Optative, and the Infinitive. (p.104)
- The *Potential* expresses the aktion of the verb by *power* ; as I *can* or *may* go (p.105)
- The *Optative* expresses the aktion of the verb by *wish* or *desire* ; as, I *wish* I *had* ; I *would* willingly have. (p.105)
- And it is called Conjunktive, by reason of the conjunktion that is put before it.
- ... and now I will explain to you the Infinitive. It has two tenses, the present and preter-perfect. The present is known by the sign (to), and the preter-perfekt by the sign (to have) before the preter-participles, and three gerunds. (p.126)

3.2. <Optative>について

Peyton では第四の Mood が<the Conjunktive or Optative>のように二重の名称になっているが、“love”の活用一覧表では明確に二種に分かれ、< I. Conjunktive : I. Conjonktif>が “if/si” から始まる仮定法、< II. Conjunktive : II. Conjonktif>が “that/que” という従属接続詞を用いた名詞節になっている。121~123 頁では、<Potential>の “I might / could / would/ ought + Inf.” が<Optative>にもなるとしており、Peyton は明らかに、Conj.内部を仮定推量と単なる従属接続詞句とに区別している。

この< I. Conjunktive>と< II. Conjunktive>を蘭訳すると、確かに「エールステフルビンデンデ。ウェイセ」と「テウェーデ。フルビンデンデ。ウェイセ」になる。ところが、『和蘭語法解』の区別がこのまま Peyton の<第一>と<第二>に対応するかというと、必ずしもそうではない。普山の《附説法》と《第二附説法》は Peyton の<第一><第二>と内容的に逆の傾向があり、第一の《附説法》は “dat” 節が主で、《第二附説法》の方には認容・仮定表現が多いのである。

しかも、両《附説法》の区別がはっきりしない所も若干ある。“hebben”の《転変》では両附説法の例がどちらも<dat>節になっており、また、初めて《附説法》を説明する箇所では関係代名詞の文章までが含まれている。場合によっては《第一附説法》の方が Peyton とは逆に<Optative>のように思われることもある。よって、《附説法》が二分される形式は一致するが、内容的に一致するとは言い難い。Peyton と『和蘭語法解』との間に例文の共通性がほとんどないことも、この対応関係を分かりにくくしている。

3.3. <作文四法>について

結論を言えば、Peyton にはこの活用表はない。ただ Diologe XIV に、<affirmative>

<negative><interrogative><interrogative phrases with a negative>の作り方が出ている。しかもこれだけでは終わらず、関係代名詞と従属接続詞を用いた文章を作文する際の語順の説明が続いている。

『和蘭語法解』には堂々たる<作文四法>の《転変》表があるから、この点は普山の独創か、参照した別の文典に活用表があったということなろう。<作文四法>は Sewel の簡便な文典には見られないが、第三章第一節の資料に示したように P. Marin の仏蘭文典にはこの種の活用が示されている。Peyton の動詞活用表に普山がこれを併せたことも考えられる。

3.4. <defective verb>について

《缺助言》たる<defective verb>について明確に注意書きをしているのは、上述のように Sewel である。当然のことながら仏文典である Marin にはない。Peyton に<defective verb>という言葉は出てこない。その代わり<helping verb>と呼ばれるものがあり、その筆頭が、問題の“do”である。“do”の用法は、疑問文、否定文及び強調の肯定文を作ることで、Peyton は、この強調形を<Compound tense>と呼んで、彼の動詞活用表に載せている。<Simple Present Tense>は“I love”、<Compound Present Tense>は“I did love”、<Simple Preterimperfekt>は“I loved”、<Compound Preterimperfekt>は“I did love”の如くである。ただし、この“do”は英語特有の助動詞であるから、英仏対訳文典である本書において、対訳される仏蘭西語にはこの区別はなく、<Simple>も<Compound>も共に、Present tense は“j'aime”、Preterimperfekt tense は“j'aimais”という半過去形になっている。

Peyton はここから続いて時制の説明に移り、肝心の《缺助言》であるはずの“will”と“shall”は、未来時制の所でわずかに言及するに過ぎない。しかも“will”と“shall”の意味的相違を説明しながら、これらが《転変》の一部を欠く《缺助言》であるとは遂に言わないのである。

3.5. 品詞の配列について

Peyton の品詞は9種類である。Articles《冠詞》から始まり、実名詞・形容詞（この二つが分離している）・代名詞・動詞・副詞・前置詞・接続詞・間投詞の順に9品詞が並んでいる（p.40）。

A. Of how many parts does Grammar consist ?

B. It consists of nine parts, which are called, *the nine parts of speech*, viz.

1. Noun, 2. Article, 3. Pronoun, 4. Verb, 5. Participle, 6. Adverb, 7. Preposition,
8. Conjunction, 9. Interjektion.

ただし、<What do you mean by Grammar?><It is the art of speaking and writing according to the particular use of every language.>と言って、実際に問答形式によるレクチャーが始まると、Peyton の九品詞は《名詞》から始まり、《冠詞》は名詞の注意事項5項目 (Article, Gender, Number, Case, Declension) の中に組み入れられている。

一方、Sewel の英文典は《冠詞》の説明を欠いている。8品詞の紹介の後に<Hierby komen nog de Particles of Ledekens>(1707, p.8)と言ってはいるのだが、独立した《冠詞》の項目を立てているわけではない。

蘭文典の方は、《冠詞》は勿論あるのだが、それは付け足しに過ぎず、8品詞は《名詞》の説明から始まる。A Compendious Dutch Grammar.(p.40)で、Sewel は Noun, Pronoun, Verb, Participle, Adverb, Preposition, Conjunktion, Interjektion という<eight parts of speech>を挙げ、そのあとに<Whereunto may be added the Particles.>と言っている。

よって、《性言》が九品詞の最初にきている『和蘭語法解』は、現段階では Peyton の品詞配列を参考にしたと考えられる。

4. Sewel の辞書中蘭文典に現れる<Heer PEYTON>の引用箇所について

Willem Sewel(1654~1720)はイギリスから移住してきた祖父を持つオランダの言語学者であるが^{注18}、彼の文典には、実は<Heer PEYTON>の名前が出てくる。国会図書館には彼の名で

○ *Groot Woordenboek der Nederduytsche en Engelsche taalen, / A large dictionary, English and Dutch...verrykt met eene spraakkonst voor beyde de taalen, door W. Sewel. t' Amsterdam, 1708 (Voorlede [前書き] の隣に<千七百七年>の墨書有り) ; De Vierde Druk, 1749. [以下 *Groot Woordenboek* と呼ぶ]*

○ *Volkomen Woordenboek de Nederduitsche en Engelsche Taalen. / A compleat Dictionary Dutch and English, To which is added a GRAMMAR, for both Languages.... Te Amsterdam, 1766. [以下 *Volkomen Woordenboek* と呼ぶ]^{注19}*

という2種類の蘭英・英蘭辞書が存在し、これらには短い蘭・英文典が付されている。そのうち後者所収の英文典 *Vertoog wegens de Engelsche Spraakkonst* の序文2箇所、本文5箇所に<Heer PEYTON>の名前が見える。

Sewel の著したこの2種の文典の記述内容は、実はほとんど全く同じものである。ところが、後者の英文典にだけしか<Heer PEYTON>の名は出てこない。後者の辞書 *Volkomen Woordenboek* は、その出版年が示すとおり、Sewel の死(1720)後46年目に刊行されたものであるが、その際、Egbert Buys により Sewel のオリジナルな英文典に

対して大幅な増補改訂が行なわれ、この時 Buys が〈Heer PEYTON〉の文法書を参照したからである²⁰。これは、今回考察の対象となった V. J. Peyton の記した文法書ではないだろうか。2 種類ある Peyton の文典のうちどちらを参照したのか（あるいは両方か）を決めることは、現段階では不可能であるが、しかし、Buys が増補改訂したと言う箇所と、今回用いた Peyton の文典を比較すると、極めて良く類似していることがわかるのである。

この増補改訂による変化は、文典冒頭の英語の発音部分に関して特に著しく、前者の文典にない項目が加筆され、すでに在る項目も、その分量が数倍になっている箇所がある。まず、*Groot Woordenboek* (1708)の文字と発音であるが、*Volkomen Woordenboek* (1766)では斜体の太字の部分が、監修者の Buys によって大きく改訂・付加されている。〈〉のあるものは *Groot Woordenboek* にあるものの改訂増補、ないものは *Volkomen Woordenboek* で新たに加えられたものである。

A. ~~Æ~~. AI. AU. AW. AY. B. C. CH. CL. <D> <E> EA. EE. EI. EW. F. G. GH. *GL. GM.* GN. *GU.* I.
J. K. L. M. N. O. OA. OE. OI. OO. OU. OW. OY. P. *PH.* Q. R. S. SH. T. *TE. TU.* TH. <U>
UI. *V.* W. WH. X. Y. Z. (3-8 頁)

<D> <E> には〈Heer PEYTON〉の名が現れ、その説明部分の分量は <D> が 1 行から 6 行に、<E> が 19 行から 67 行に増えている。<U> も 5 行から 42 行へと大幅増であるが、〈Heer PEYTON〉の名は見られない。しかし *Volkomen Woordenboek* の序文から〈Heer PEYTON〉に拠るものであることがわかる²¹。

<D> <E> における〈Heer PEYTON〉の引用箇所は、以下のとおりである。

改定①：1708 年版では、<D>の発音に関する記述はわずかに一行であるが、1766 年版では 6 行に増え、そこに〈無音の D〉に関して次の記述がある。

De Heer PEYTON telt, in zyne Spraakkonst, onder deeze Woorden meede op :
Almond, Handmaid (3 頁)

ペイトン氏は彼の文法書において Almond、Handmaid もこれらの言葉の中に加えている。

1708 年 : D. Wordt uytgesproken als by de Hollanders. (p.3)

1766 年 : (p.3) [下線は筆者]

in een Leetgreep uytgesproken, als; *Ancient, Gracious*, lees *angjant, gratsjout*.
D. Wordt uytgesproken *Di*, behalven in deeze Woorden, daer ze stom is; *Handfem, vriendfijp, ribband,*
wednesday, lees *Hersem, frinsjip, ribben, cornid*. De Heer PEYTON telt, in zyne Spraakkonst, onder
deeze Woorden meede op: *Almond, Handmaid*, en *Werdly* (welk laatste Woord in plaats van waardiglyk,
waerdiglyk is vertaald) noch dat is mis, also in die Woorden de *d* duidelyk genoege gehoord word. Als
het Woord dat op *and* volgt met een Medeklinker begint, word 'er de *d*, niet in uytgesproken, by Voer-
beeld *come and see*, lees *kom en zie*.

A 1

E. De

1776 年の Peyton : (p.26) [下線は筆者]

D.

(D) se prononce ordinairement comme en François:
 Exemp, I dō, Je suis; I dāre, J'ose: Lisez āi dou, āi
 dāire, &c. Mais (d) dans āmond, amande; hāndsōme,
 beau; frīendship, amitié; ribband, ruban; wōrldly, mon-
 dain; hāndmaid, servante; wēdnesday, mécredi, ne se
 prononce pas, ni dans and, et, quand le mot suivant com-
 mence par une Voyelle: Ainsi lisez ā-mēnn, hānn-sōmm,
 frēnn-chīp, rīb-bīnn, wōr-ly, hānn māid, ouēnnz-dāi: Cōme
 ānd sē, venez voir, cōmme ānn sī.

改定②: <D>の発音に関して、<d><t><te>で終わる動詞の情報が、Peyton から採ら
 れている。

De Heer PEYTON zegt, dat men het Woord wanted moet uitspreken I wanted

ペイトン氏は wanted という単語は [Iwanted] と発音しなければならないと言っている。

(4 頁)

1708 年: 19 行 (実例省略)

1766 年: 67 行 (pp.4-5)

- 35 byna Greflefs godnefs: als méde de eenledige Woordtjes Her, yet, lees Her, jet. Hiet van zyn de
 vōlgende Woorden in er uitgaande, uitgezonderd, waar in de laatste e als in 't Neerduitsch word uitge-
 sprooken. To deter, aver, defer, prefer, lees Ditē, avēr, differ, prefer. Men lette wel, dat ik aan de
 gestipte e de klank hēgte, als dezelve heeft in de Neerduitsche Woorden el, kapel, tēr, flēr, enz. en
 aan de gestipte d het geluid dat dezelve heeft in de woorden, Dāik, drol, bāl, kāl, lāl, bōrd, enz.
 40 Ten tweeden, is de e dof, en wordt maar sjaauw geboord in de Deelwoorden, van de Werkwoorden, die
 met d, t of te eindigen en in welken men de e schryven en uitspreken moet, als; Commanded, wanted,
bated; lees kommandē, wanted, bated. (De Heer PEYTON zegt, dat men het Woord wanted moet uit-
 spreken Iwanted: maar dit bekē ik een galm te zyn, daar ik, myn Mond niet na zetten kan, en ik
 geloof zeer weinig Menschen: de naaste Uitspraak zou naar myn gedagten zyn awanted, zeer schieyk ge-
 sprooken zynde, trouwens ik ben het omtrend de Klank der Letteren, met dien Heer, in veelen opzigten
 45 niet eens, en daarom zal ik die zonder hem vērder aantehalen, opgeeven, zo als het my na eene lang-

1776 年の Peyton (p.4) [下線は筆者]

3°. Il se prononce comme e féminin, & avec grande
 rapidité, étant suivi de l, r, t, & ss, à la fin des mots de
 plusieurs syllabes: Comme Lārrel, barrique; māker, fai-
 teur; clōjet, cabinet; grāclefs, sans grace, &c. Et dans
 les participes des Verbes finissans en d, t & te: Comme
commāded, commandé; wānted, manqué; bated, haï.
 Ce son est comme celui d' (e féminin): Prononcez bār-rēl,
māi-quēr, clā-zēt, cā-bī-nēt, grāice-lēfs, cōm-mānn-dēd,
ouānn-iēd, hāi-tēd.

以下実例は省くが、最も大きな改変は、“Van de MAATKLANK” [アクセント等の規則について] の項目の付加である。*Groot Woordenboek* では、この文字の説明の後すぐに“Van de SPRAAKDEELEN” [品詞について] が始まるが、*Volkomen Woordenboek* では、その前に“Van de MAATKLANK” 10 則が 4 ページ半にわたって挿入されている。

改定③ : Duts de Uitspraak van ieder Letter afgehandeld hebbende, moeten wy overgaan tot de Maatklank der Woorden, waar in ik het met de Heer PEYTON volkomen eens zynde, om niet eigzinnig te schynen, hem ten eenemaal zal volgen(*), alleen met dit Verschil, dat ik tot meerder Onderscheiding voor het zwaare klanktéken een ▼ en voor het schërpe ●● zal stellen, gelyk ik in het Néderduitsch gedaan heb. (9 頁)

こうして、各アルファベットの発音を手早くかたづけただので、次に我々は、単語のアクセントについて見なければならぬ。これについては、私はペイトン氏に賛成である。ひとりよがりだと思われぬよう、徹底して彼のやり方に従うつもりである。ただし、異なる点もある。より大きな相違は、私が、オランダ語におけると同様、英語においても抑音には<▼>、揚音には<●●> という音標記号を付したことであろう。

この後、更に 2 箇所、“Van de VOORNAAMEN” [代名詞] と“Van de WERKWOORDEN” [動詞] に<Heer PEYTON>を参照した改訂がなされているので、<Heer PEYTON>の英文法書を用いて Buys が行なった改訂増補は 5 箇所となる。

改定④ : In de Verhandeling derzelven, zal ik wederom den Heer PEYTON volgen, dien ik in deezen niet kan verbéteren. (20 頁)

ここの説明は、再びペイトン氏に従うことにしよう。私には彼以上にうまくできないので。

[代名詞について]

改定⑤ : Tot welken einde ik daarvan eenige Voorbeelden zal ter neerstellen ; en een Begin maken met het Helpwoord, *to have*, hebben. Die 'er omstandiger bericht van begeert, kan by den Heer PEYTON en anderen zyn Weetluft voldoen. (24 頁)

そのために、その中から具体例を幾つか次に示す。まずは、助動詞 *have* からである。もっと詳しく知りたいときは、ペイトン氏およびその他の文法書で、その知識欲を満たすことができよう。 [動詞の Conjugation について]

Buys の示す Peyton へのこのような信頼が、上述の渡部昇一の言う、<英語にはアクセ

ントや音標記号があり更に仏訳が付された>Peyton の仏語英文典 Elements of the English Language (London, 1758 etc.) が、その後約半世紀間、数多くの版を重ねて標準書としての評価を得ていた>ものという評価を実証している。<百乙東>の<ス普羅加公斯多>を基にしたという藤林普山の言葉は、このような評価の高い英文典が和蘭語に訳されてからさほど時間の立たぬうちに日本にもたらされ、それが日本の蘭語学者の手に渡っていた事実を物語るものである。

5. 結語

以上のことをまとめると、4つの疑問点のうち《許可法》《第二附説法》及び“do”の部分はPeytonの英文典に負い、<作文四法>はMarinの仏文典に(多少はPytonにも)、《缺助言》はSewelの英文典、品詞配列はPeytonの英文典に負っているという結果になった。これら4つの文法要素のすべてが、和蘭語のものではないということである。そうすると、藤林普山は、従来の蘭文法にはない新要素を、Marinの仏文典とPeytonの英文典から取り出し、更に、《中分言》のような彼独自の工夫をも加えて、『和蘭語法解』という書物を編んだことになる。

ただし<作文四法>に関して言えば、MarinではなくPeytonから取られたということも考えられる。何故ならPeytonが蘭訳されたとき、<作文四法>がその蘭訳文典に付け加えられた可能性があるからである。実際、CowanによるL. Murrayの蘭訳文典は、Murrayにはない<作文四法>を備えている^{註17}。が、蘭訳文典を実見していないため(アムステルダム大学にコピーを依頼したところ不可能との事であった)、今はこれ以上のことは言えない。今回は今までに抱いた疑問点の整理と若干の考察にのみとどめ、最も重要なPeytonの時制にはほとんど触れていないので、今後、更なる研究考察が必要である。

Peytonと『和蘭語法解』間の引用文の一致がほとんど見られないことも考え合わせると、普山は、『和蘭文学問答』を訳出した同時期の馬場佐十郎のように、<百乙東>の<ス普羅加公斯多>をそのまま翻訳したわけではないのである。<普山先生。最嗜此学。訳書数十部。殫思精煉遂究其蘊奥。乃本彼邦百乙東氏及。数家乃斯普羅加公斯多。書引類举例加得之説。著一書題曰和蘭語法解…>という堤礫桂樹の序に言われた<百乙東>が、このV. J. Peytonであるならば、『和蘭語法解』の底本は英語の文法書ということになる。このことは、当時の欧州で評価の高い英文典が早々に和蘭語に訳されて日本に舶載され、それが日本の蘭語学者に学ばれて、図らずも彼らによって、本邦初の英文典の翻訳がなされた可能性を示しているのである。

注

- 1) 岡田和子「明治時代の洋語文典における日本語——蘭訳英文典『和蘭語法解』と洋

語文典の系譜』『文学研究論集』第13号、筑波大学比較・理論文学会 1996。13-44 頁。

2) 『蘭語学』I、618 頁。

3) 『蘭語学』I、658 頁。

4) 豊田実『日本英学史の研究』(208-209 頁)に言われるとおり、英文典の本邦初訳は『英文鑑』(天保 11)とするのが通説である。桜井役『日本英語教育史考』(敝文館、昭和 11)でも、<単行の英文典としては天保十二年(1841)上下二編を完成(渋川六蔵譯藤井三郎訂補)の「英文鑑」が最も夙いものである>(39 頁)と言っている。永山勇「西洋文典と国文法」(日本文法講座 2; 明治書院、昭和 32、23 頁)等、諸家いずれもこれを否定する者はいない。

5) 普山の挙げる《附説法》《第二附説法》の例は次のようなものである。

○《附説法》の例文：

het paard 「*dat* ik onlangs gekogt heb.」

吾カ近頃買タル馬 [関係代名詞]

Hij miend haar te trouwen 「*hoewel* al zijne vrinden 'er tegen zijn.」...

縦ヒ朋友ガ口トユルトモ [従属接続詞]

Toen hij dat hoorde

彼ガソレヲ聞シトキ [従属接続詞]

○《第二附説法》の例文：

Ofschoon ik beminnen kan.

吾ガ愛スルコトヲ為シ得ルトモ [従属接続詞+can] (巻之中、三十葉表・裏)

以下、<hebben><worden><zijn>等の《轉變》一覧が続くが、《附説法》は専ら *dat*(=that) [他に *toen* (=when; as)、*als* (=when; if)、*ofschoon*(=although) が数例] による「接続法」であるのに対し、《第二附説法》は *ofschoon* [これが最も多い]、*zoo*(=if)、*indien*(=if) 等の仮定の接続詞が *mag* (=may)、*mogt*(=might)、*kan*(=can)、*kon* または *konde*(=could)を伴って、条件・反実仮想・認容表現——すなわち *Conditionalis* となっている。

その典型が<*zijn*>で、《附説法》6時制の活用はすべて *dat* から始まり、《第二附説法》4時制を導く接続詞は *zoo* と *indien* である。

<i>Dat</i> ik waare	たりし。へりし。...	[第一附説法未成過去]
<i>zoo</i> ik zijn mag/kan	らるなら。たるなら。...	[第二附説法現在]
<i>zoo</i> ik zijn mogd/kon	られたら。たりたら。...	[同 未成過去]
<i>zoo</i> ik zijn geweest {mogd/kon} zijn	られたら。たりたら。...	[同 全成過去]
<i>indien</i> ik zal {moogen/konnen} zijn	られうなら。たらうなら。...	[同 未来]

(巻之中、五十～五十一葉)

Sewel(1708)の英文典をみると、この二者は<De Wenschende of Ondervoegelyke Wyse>[希求法または従属接続法]の中で未分離のままである(第三章第一節 2.[298 頁])。し

かし、その活用をよく見ると、その《過去過去》 [=過去完了]には必ず “If” = “Zo” が用いられていることがわかる。

If I had been = Zo ik geweest waare of hadde. (20 頁)

If I had loved = Zo ik bemind had. (25 頁)

つまり、これによって、この時制が専ら反実仮想を表わすのだということが、項目を立てて下位区分することなく、解説もなく、ただ活用形をあげることによってのみ示されているのである。

更には、《未成過去》 (=単独の過去形) の仮定用法も忘れられてはいない。 <be> も <love> も、《未成過去》はいずれも dat 節になっているが (dat I were ; dat I loved)、後者の場合は <Tho I might love> という別形が示され、《未成過去》が一種の仮定用法を持つことが暗示されている。

この仮定的用法は「接続法」の中で次第に特別に扱われるようになり、1800年代に入ると、第三章 (341 頁) の独逸語で見たように Conditionalis というひとつの Modus として独立する時期を経験するが、普山の《第二附説法》は、謂わば、その独立の前段階にあるものである。

6) 『蘭語学』 I, 641 頁。

7) Hamelberg の動詞の種類は能動動詞と中性動詞のふたつだけで、108 頁では、英語には正しい再帰動詞はないと言っている。

8) Lloyd は動詞の種類を、能動・中性・受動のグループと、助動詞・人称・非人称・欠如のグループに分けている。前者には受動動詞がまだ残り、その一方で欠如動詞、即ち普山の《欽助言》が現れているのが興味深い。《欽助言》は、後述のように、can, may, must 等の現代の助動詞で、一方当時の《助動詞》というのは、英語の場合は have, be, do である。

9) 『英文鑑』における <動辞五様> の第三位《許可様》の定義は次のようである。

許可様ハ may, can, would, should ヲ以テ之ヲ書ス may ハ然ルコトヲ得或ハ許可ヲ得ルノ意ナリ can ハ事ヲ能クシ或ハ敢テスルノ意ナリ would ハ事ヲ欲スルノ意ナリ should ハ須ク為ヘキノ意ナリ (上編巻之六)

10) 『助字要訣』(文化 11)については、斎藤信『日本におけるオランダ語研究の歴史』(117-126 頁) にその内容の紹介がある。その <活語ノ法> は <一頓法・二令法・三威法・四及五結法・六不限法> で、これらの用語は表 1 (31 頁) において全く類似のものを持たずに孤立している (第五番目の《不限法》のみは先例を持つ)。第三の《威法》が <vermagine wijse>、即ち、普山の《許可法》である (120 頁)。<四及五> という表記から推すに、《結法》、即ち《附説法》もふたつに分かれるようで、これも普山の《[第一]附説法》・《第二附説法》を思わせる (ただし <form> の四法は欠如している)。

更に 9 品詞も、冠詞 geslacht woorden [《性言》の意。この語は『和蘭語法解』にも見える] を筆頭にした配列順序で、蘭文法的でない。

斎藤は、『助字要訣』を成立年代の近い馬場貞由の『西文軌範』『和蘭文学問答』の別名(文化¹⁸¹¹8)および『訂正蘭語九品集』(文化¹¹11)と比較し、《威法》に相当するものは馬場のこの二書にはないと述べているが(123頁)、『助字要訣』が英文典であるならば、馬場における《威法》の欠落は、むしろ当然であると言える。しかも、『和蘭語法解』の出版年より一年早い書写年を持つ『助字要訣』は、『英文鑑』『和蘭語法解』を飛び越えて、英文法書の本邦初訳ということにもなり得る。

『助字要訣』と藤林普山の接点は、今のところ江馬家と関係があるということだけである。

11) これは中野柳圃『柳圃和蘭助辞考』に見える訳語である(『蘭語学』I、384頁)。

12) これらの用語の出典は、

《不具動詞》 田原 栄著『文典和解英文指針』梅原蔵版、明治⁽¹⁸⁸⁴⁾17

《缺動詞》 青木輔清編述『無類捷徑英学童子解』同盟社、明治⁽¹⁸⁸⁵⁾18他

《欠損動詞》 喜内芳樹『ねすふいーるど英文典第三卷講義』金刺氏発刊、明治⁽¹⁸⁰⁰⁾33

《不足助動詞》 渡辺五一郎直訳『ピネヲ氏原著英文典 獨案内』東生氏蔵、明治⁽¹⁸⁸³⁾16

である。この他に《不完全働詞》《不完働詞》《缺乏働詞》《欠点動辞》《不十分働詞》《缺式働詞》《缺略動詞》等、種々の訳語がある。

13) 現代のドイツ語においても *wollen(will)*, *können(can)* 等の、いわゆる話法の助動詞は、不定詞及び完了形を作ることが可能であり、本動詞としての性質を強く保持している。

<worden> については、<按スルニ此言ハ完助言ノ属ナリ誤テ此ニ出ダス看官缺助言トスルコト勿レ>という普山自身の注釈がある(四十五葉・裏)。

これらの助動詞のうち<hebben>と<zijn>は、明治⁽¹⁸⁸⁰⁾13年・多賀貫一郎訳『セーフエル氏文典直譯』では《書キマハス処ノ助動辞》、明治⁽¹⁸⁸⁵⁾18年・平塚定二郎口訳『シェーフエル氏獨逸文法獨学』では《書替ノ助動詞》と呼ばれている。原語は<die umschreibende Hülfsörter>(pl.)で、J.Grimm も *Deutsche Grammatik* で用いている<umschriebnes Präteritum> [書き替えの過去]——すなわち完了形を形成するための助動詞<haben>と<sein>を意味する術語である。これと全く同意の和蘭語<de omschrijvende werkwoorden>が、1845年の Hamelberg(102頁)に見える。普山ではこれらが《完助言》に属するわけである。

14) <助動詞 do の用法は、英語に特有な語法であって、他のいかなる現代語にも、これに相当するものは認められない。歴史的見地からすれば、……ある時期には類似の発達を見たものもあるが、それらも結局、英語の do のように確立した用法となら> (松波有「助動詞 Do の起源」;『英語史研究』松柏社、昭和49、99頁) なかったのであるから、<do>を《助言》とする『和蘭語法解』は、やはり英文法書ではないかと考えざるを得ない。

中村不二夫によると、<否定平叙文と疑問文における do 用法の最初の言及は、Mieg

(1685) にみられる。強調の do 用法の言及は、Gil(1619) が最初である> (「助動詞 Do の発達：伝統的史的研究の本流」；『助動詞 Do 起源・発達・機能』1994、英潮社、27 頁)。

15) 『蘭語学』Ⅱ、949 頁

16) この原著者については長い懷疑の歴史があった。岩崎克己は、The elements of the English language…explained…by way of dialogue. という英文典の著者 V. Peyton ではないかと疑い (「徳川時代舶載の和蘭語学書(語法書編)」『学燈』46-6, 昭和 17、11 頁)、斎藤信は、1779 年に「英文法」(第 2 版、アムステルダム大学所蔵)を出した V. J. Peyton が蘭文典を書いたのではないかと推測している(斎藤 信『日本におけるオランダ語研究の歴史』大学書林、昭和 40、114 頁及び 145 頁)。

一方、池田哲郎は、Peyton ではなく Ypey という別人だとし、上述の『和蘭語法解』の序文<彼邦百乙東氏及。数家之斯普羅加公斯多。…>の<百乙東>の部分をも、<百乙(Ypey)>に直して引用している(池田哲郎「オランダ語研究史序説」『福島大学学芸学部論集』第 12 集の 2, 1961-3、92 頁)。同様に、山本四郎も Ypey(イペイ・百乙東)とする立場をとっている(「海上随鷗とその一門」(1)——京都蘭学史研究[『文化史学』第 14 号、昭和 33、58 頁])。Ypey とは、Adolf Ypey(1749~1820) というオランダの化学者のことである。普山は、この Ypey の著書を、『和蘭薬性弁』として文政 8 年に翻訳している⁽¹⁸²⁵⁾ので、Peyton が Ypey になったと考えられたのは、このことからの類推であろうかと思う(『蘭語学』Ⅲ、72 頁及び 1111 頁[注 718+15])。

また杉本つとむは、<馬場や大槻のものに書名が見えてもよさそうであるが、まったく見えない>ことを不審に思い(『蘭語学』Ⅳ、1011 頁[949-7])、当時の著名な蘭文法家 P. Weiland の名前 Petrus を姓のペートンと誤解したのではないかと述べている(『蘭語学』Ⅱ、949 頁。また『蘭学に命をかけ申し候』皓星社、1999、227 頁)。

結局、岩崎、斎藤二人の推測は的を得ていたが、蘭文典であるという思い込みに惑わされたことになる。

17) 1852 年版の 61 頁から 66 頁には、<肯定文>も含めた<作文四法>の活用表が、“do”を用いて、6 時制すべてにおいて展開されている。しかし、1795 年の Murray の *English Grammar* にはこれは見られない。

18) 日蘭学会編『洋学史辞典』雄松堂、昭和 59、395 頁。

19) 初版は 1691 年である(『洋学史辞典』395 頁)。

20) *Volkomen Woordenboek* (1766) の表紙には、表題に続いて次のように書かれている。

Originally compiled by WILLIAM SEWEL; But now, not only reviewed, and more than the half part augmented, yet according to the modern spelling, entirely improved; by EGBERT BUYS, Counsellor of their Polish and Prussian Majesties, &c. [蘭文表記省略]

21) この辞書中英文典 *Engelsche Spraakkunst* の前書き “Aan den LEEZER” [読者に]で、EGBERT BUYS は Peyton を用いたことについて以下のように言っている。

Ik schaame my niet te zeggen, dat ik de Verbétering in de Spraakkonst van dien nyvren Schryver voor een groot gedeelte, uit die van den Heere PEYTON [wiens Werk sédert ook in het Néderduitsch in 't Licht gekomen is] heb ontleend : byzonder ten opzigte der Klankletteren Een U, en der Maatklank ; nadien, het geene zeer goed is, geen Verbétering behoeft. Echter, ben ik het omtrent de Uitspraak van veele Engelsche Woorden, zo min met hem als met Vader SEWEL ééns.... (1 頁)

この勤勉な著者 [=セーウェル] の文法書を改訂するにあたり、改訂部の大半をペイトン氏の文法書 [その後氏の著書はオランダ語でも刊行された] から借用したと言うことを、私は恥ずかしいとは思わない。特に、アルファベットの<E><U>と、アクセントの部分がそうである。それは非常に優れたものなので、それ以後、改訂の必要がない。しかし、多くの英単語の発音に関しては、私はセーウェル先生ともペイトン氏とも見解がそれほど一致しない。

Dutch Grammar.

Note. *Hun* is of the *Masculine* and *Neuter*, and *haar* properly of the *Feminine*; yet *haar*, *baare*, &c. are in Common speech and vulgar writing also used as *Masculine*. Some will use *Hear* for the *Feminine*, which is declined after the same manner.

The Declension of *Zelf* Self.

Sing.	Plur.
Nom. <i>Ik zelf</i> or <i>zelve</i> I my self.	Nom. <i>Ons zelve</i> , Our selves.
Gen. <i>Myns zelfs</i> Of my self.	Gen. <i>Ons zelve</i> , <i>van ons zelven</i> , Of our
Dat. <i>Aan my zelven</i> To my self.	Dat. <i>Ons zelven</i> , or <i>aan ons zelven</i> , To our
Acc. <i>My zelven</i> My self.	Acc. <i>Ons zelven</i> , Our selves.
Abl. <i>Van my zelven</i> From my self.	Abl. <i>Van ons zelven</i> , From our selves.
	<i>Zichzelven</i> Himself, ones self.

There are also *Indefinite Pronouns* that are declined as the *Adjectives*; and are as followeth.

<i>All</i> , all All.	<i>Ander</i> Another.
<i>Eenige</i> Any, some.	<i>Sommige</i> Some.
<i>Een iegelyk</i> Every one.	<i>Zodaanig</i> Such.
<i>Iemand</i> Any one, any body, some body.	<i>Zulk</i> Such.
<i>Niemand</i> No body, none.	<i>Zeker</i> Certain.

OF V E R B S.

A *Verb* is a Part of speech signifying to *Be*, to *do*, or to *suffer*, as *Ik ben* I am, *Ik bemin* I love; *Ik word gehaat* I am hated. They are divided into *Actives*, *Passives*, and *Neutrals*. *Actives* betoken the doing of a thing, as *Onderwyzen* to Teach, *Hooren* to hear, *Leezen* to read.

Passives are such whereby a person or thing is moved or some way affected, as *Onderweezen worden* to be taught, *veracht worden* to be despised.

Neutrals signify properly neither action nor passion, as *Vaaren* to be conveyed, *branden* to burn, *schynen* to shine, *ziek zyn* to be sick.

Verbs are *Personal* and *Impersonal*: *Personal*, as *Ik hoor* I hear, *gy hoort* thou hearest, *by hoort* he heareth, *wy hooren* we hear, &c. *Impersonal*, as *Men hoort* One hears, *het regent* it rains.

Verbs are also *Conjugated* by several *Moods* and *Tenses*. But since I do not pretend to write a Grammar at large, I don't intend to give a particular description of those *Moods* and *Tenses*; because some Examples of *Conjugation* will sufficiently shew the use of them, and what they are. And since no *Dutch* word can be *Conjugated* without the help of some *Auxiliary Verbs*, I will make a beginning with the *defective Verb* *Ik zal* I shall.

The INDICATIVE MOOD.

The Present Tense.

The Preter-Imperfect Tense.

Sing.	Plur.	Sing.	Plur.
<i>Ik zal</i> I shall.	<i>Wy zullen</i> We shall.	<i>Ik zou</i> or <i>zoude</i> I should.	<i>Wy zouden</i> We should.
<i>Gy zult</i> Thou shalt.	<i>Gylieden zult</i> Ye shall.	<i>Gy zoudt</i> Thou shouldest.	<i>Gylieden zoudt</i> Ye should.
<i>Hy zal</i> He shall.	<i>Zy zullen</i> They shall.	<i>Hy zou</i> or <i>zoude</i> He should.	<i>Zy zouden</i> They should.

Note. This *Verb* hath also an *Infinitive Mood* which it wants in the English, as *Ik heb beloofd* *het te zullen doen*, I have promised that I'll do it. The like can be said of the *Verbs* *konnen*, *moeten* and *moegen*, which may be Englished, *To be able*, *to be forced*; and *to have leave*

H 3

文政庚辰正月
 求己堂藏
 蘭語文法解
 千七百七十七年
 一月十九日

Sewel, W. YDA-2998
 Groot woordenboek der Nederduytsche en Engelsche taalen, waarin de rykdom derzelver in 't breede wordt voorgedraagen, de verscheydene betekenissen aangewezen, en de geslachten van alle Nederduytsche naamwoorden naauwkeuriglyk aangetoond; met byvoeginge van zeer veele uytleezene spreekwyzen, en een goed getal van spreekwoorden, verrykt met eene spraakkonst voor beyde de taalen, door W. Sewel. Het tweede deel. Amsterdam, by de Weduwe van Steven Swart, by de Beurs, 1708. 20.5 x 16 cm. [タイトルページ破損, 上は第二巻蘭英部分のタイトル]
 1st deel: E-N. 468p.
 2de: deel: N-E. 3, 680p.
 3de deel. Beknopte vertoog wegens de Engelsche spraakkonst. Aan den Leezer. 90p.
 <書目録所> <求己文庫>
 「文政庚辰正月 求己堂藏」
 「一番内 辞之十九 蘭語文法解 千七百七十七年 一月十九日」
 (75)

資料 103.

Sewel (1708) の英語蘭文典

ここで Sewel は「和蘭語の Auxiliary verb の説明を <Defektive Verbs> の“zullen”で以て始めよう」と言う。“zullen”は英語の“shall”である。ところが、この <Defektive Verbs> に関する重要な注が、次頁にて述べられる。

A Brief and compendious

leave or to be permitted. But in the Indicative they agree with the English, as *Ik kan* I can, *Ik moet* I must, *Ik mag* I may.

The Conjugations of these *Auxiliar Verbs* may be seen in my *English Grammar*: Yet is to be noted, that they are not so Defective in Dutch as in English: for since they have not only the *Participles* of the *Present Tense*, as *Konnende, moettende, moogende*, but also those of the *Preter-perfect tense*, as *Gekonnen, gemoeten, gemoogen*, they take to them the *Auxiliar Verb hebben*, as *Ik heb gekonnen*, I have been able; *Ik heb gemoeten*, I was or have been forced; *Ik heb gemoogen*, I had leave, or I have been permitted.

The next *Auxiliar Verb* is *Hebben* to Have; which is Conjugated thus.

The INDICATIVE MOOD.

The Present Tense.

Sing.	Plur.
<i>Ik heb</i> I have.	<i>Wy hebben</i> We have.
<i>Gy hebt</i> Thou hast.	<i>Gylieden hebt</i> Ye have.
<i>Hy heeft</i> He hath.	<i>Zy hebben</i> They have.

The Preter-Imperfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik had</i> I had.	<i>Wy hadden</i> We had.
<i>Gy hadt</i> Thou hadst.	<i>Gylieden hadt</i> Ye had.
<i>Hy had</i> He had.	<i>Zy hadden</i> They had.

The Preter-perfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik heb gehad</i> I have had.	<i>Wy hebben gehad</i> We have had.
<i>Gy hebt gehad</i> Thou hast had.	<i>Gylieden hebt gehad</i> Ye have had.
<i>Hy heeft gehad</i> He hath had.	<i>Zy hebben gehad</i> They have had.

The Preter pluperfect.

Sing.	Plur.
<i>Ik had gehad</i> I had had.	<i>Wy hadden gehad</i> We had had.
<i>Gy hadt gehad</i> Thou hast had.	<i>Gylieden hadt gehad</i> Ye had had.
<i>Hy had gehad</i> He had had.	<i>Zy hadden gehad</i> They had had.

The Future.

Sing.	Plur.
<i>Ik zal hebben</i> I shall have.	<i>Wy zullen hebben</i> We shall have.
<i>Gy zult hebben</i> Thou shalt have.	<i>Gylieden zult hebben</i> Ye shall have.
<i>Hy zal hebben</i> He shall have.	<i>Zy zullen hebben</i> They shall have.

The Indefinite Tense.

Sing.	Plur.
<i>Ik zou hebben</i> I should have.	<i>Wy zouden hebben</i> We should have.
<i>Gy zoudt hebben</i> Thou shouldst have.	<i>Gylieden zoudt hebben</i> Ye should have.
<i>Hy zou hebben</i> He should have.	<i>Zy zouden hebben</i> They should have.

The

(拡大)

A Brief and compendious

leave or to be permitted. But in the Indicative they agree with the English, as *Ik kan* I can, *Ik moet* I must, *Ik mag* I may.

The Conjugations of these *Auxiliar Verbs* may be seen in my *English Grammar*: Yet is to be noted, that they are not so Defective in Dutch as in English: for since they have not only the *Participles* of the *Present Tense*, as *Konnende, moettende, moogende*, but also those of the *Preter-perfect tense*, as *Gekonnen, gemoeten, gemoogen*, they take to them the *Auxiliar Verb hebben*, as *Ik heb gekonnen*, I have been able; *Ik heb gemoeten*, I was or have been forced; *Ik heb gemoogen*, I had leave, or I have been permitted.

The next *Auxiliar Verb* is *Hebben* to Have; which is Conjugated thus.

The INDICATIVE MOOD

資料 104. Sewel (1708) の英語蘭文典 (続)

和蘭語のいわゆる「話法の助動詞」は<Defektive Verbs>ではない、ということを述べた部分。

A LONDRES

Chez J. Nouris & Puy

in the Strand, 1776.

東京大学文学部蔵

THE
ELEMENTS
OF THE
ENGLISH LANGUAGE,
EXPLAINED
In a New, Easy, and Concise Manner,
By Way of **DIALOGUE.**
In which the **PRONUNCIATION** is taught by
an Union of Letters that produces similar
Sounds in **FRENCH**, and the true Quantity
of each Syllable is determined.

WITH
A **VOCABULARY**, and **FAMILIAR PHRASES**, and
DIALOGUES, very useful for those who desire to
speak **ENGLISH** correctly in a short Time.

A New Edition revised, corrected and enriched with
many new Rules and Remarks, very proper to remove those
Difficulties that **retard** the Progress of Foreigners.

By **V. J. PEYTON.**

*Linguarum diversitas alienat hominem ab homine, &
propter solam linguarum diversitatem, nihil prodest ad
con sociandos homines tanta similitudo naturæ.*
ST. AUGUST. DE CIVIT. DEI.

LONDON:
Printed for **J. Nourse** and **Paul Vaillant**,
in the **STRAND**, 1776.

LES
ELEMENS
DE LA
LANGUE ANGLOISE,
DÉVELOPÉS.
D'une Manière nouvelle, facile & très concise,
En Forme de **DIALOGUES.**
Où la **PRONONCIATION** est enseignée par un
Assemblage de Lettres qui forme des Sons
similaires en **FRANÇOIS**, & où la juste Mesure
de chaque Syllabe est déterminée.

AVEC
Un **VOCABULAIRE**, des **PHRASES FAMILIÈRES**, &
des **DIALOGUES**, très intéressans pour ceux qui
souhaitent parler **ANGLAIS** correctement, & en peu
de Temps.

Nouvelle Edition revue, corrigée & enrichie de plusieurs
nouvelles Regles & Remarques, servant à écarter les Dif-
ficultés qui retardent le Progrès des Etrangers.

Par **V. J. PEYTON.**

*Linguarum diversitas alienat hominem ab homine, &
propter solam linguarum diversitatem, nihil prodest ad
con sociandos homines tanta similitudo naturæ.*
ST. AUGUST. DE CIVIT. DEI.

A LONDRES:
Chez **J. Nourse & Paul Vaillant**,
de Strand, 1776.

TO
HER EXCELLENCE
The Right Honourable
Countess of **GUERCHY.**

MADAM,

THE Honour your Excellence did
me in calling me to instruct you and
your illustrious Children in our
Tongue, and the many Advantages I enjoy
on that Account, are Motives, that oblige
me to give to the Public the most so-
lemn Acknowledgment of my Obligations to
you. As I could not fulfil that Duty in
a more becoming Manner than by conse-
crating this Second Edition of my Elements
to you, which contains many useful Rules
and Remarks, not in the former, I humbly
hope you will be pleased to take it un-
der your Protection, as the most sensible
Mark I can give of my Esteem and Gra-
titude.

資料 105. Peyton の仏語対訳英文典

出版は

LONDON:

Printed for J. Nourse & Paul Vaillant,
In the Strand, 1776.

A LONDRES:

Chez J. Nourse & Paul Vaillant, dans
le Strand, 1776.

東京学芸大学所蔵

titude. It is a Debt due to your Merit, who possess those brilliant Qualities that adorn your Sex: Qualities that really characterise the Great and Good. Please, therefore, M^DA^M, to accept my good Intentions, and persuade yourself that I shall remain with the greatest Attachment all my Life-time.

M^DA^M,

Your Excellence's

Most humble,

Most obedient,

and most respectful Servant,

W. J. Peyton

P R E F A C E

DE LA SECONDE EDITION

Occupé depuis plusieurs Années à enseigner la LANGUE ANGLOISE à beaucoup de Seigneurs & Dames de Distinction & autres Etrangers venus dans ce pais, j'ai cru qu'il étoit de mon devoir de donner au public les ELEMENS de notre langue rendus plus faciles par cette nouvelle Méthode qu'ils ne l'ont jamais été auparavant, & je me suis imaginé que des DIALOGUES FAMILIERS sur toutes les parties de la Grammaire dans lesquels les REGLES pourroient servir d'EXEMPLES, & où la PRONONCIATION est marquée par un assemblage de Lettres, qui forme des Sons similaires, en François, et où la Mesure de chaque syllabe est précisément déterminée seroient un moyen plus facile à ceux qui étudient l'Anglois, que des Regles seches & ennuiantes.

Je me flatte même que mes Compatriotes trouveront dans les Elemens de la Langue Angloise tels que je les donne aujourd'hui plusieurs choses qui ne sont pas dans les autres Grammaires & qui pourront leur être utile dans l'Etude de notre langue.

Je

(viii)

Je ne doute pas que plusieurs fautes ne me soient échappées surtout dans un livre, où tant de caractères différens ont été nécessaires pour assurer la vraie Prononciation qui est le grand Ecueil des Etrangers, & je serai très reconnoissant envers ceux qui voudront bien me les faire connoître.

Le prompt debit de la premiere édition de ce livre m'a fait juger qu'il étoit approuvé de ceux qui s'en sont servis, cela m'a encouragé à y faire pour cette seconde Edition des Corrections & des Augmentations très considérables comme on pourra le voir en comparant les deux éditions.

L E S

E L E M E N S

D E L A

LANGUE ANGLOISE.

De la Prononciation.

LES Anglois employent vingt quatre Lettres pour exprimer leurs idées, savoir,

A, b, c, d, e, f, g, h, i, k, l, m, n, o, p, q, r, s, t, u, w, x, y, z.

Qui se prononcent,

* ai, bi, ci, di, i, éf, dg, aitch, ai, quai, ell, émm, énn, ô, pi, quioü, érr, éfs, ti, ioü, döble ioü, écs, ouai, zed.

On distingue ces lettres en Voyelles & Consonnes.

Les Voyelles sont fix, savoir,

a, e, i, o, u, y.

Dont (i) & (a) deviennent Consonnes, quand une autre Voyelle les suit dans la même syllabe; & dans ce cas il faut leur donner cette figure, (j) & (w).

Les autres lettres sont Consonnes, c'est à dire, lettres qu'on ne peut pas sonner sans Voyelles.

* La Ligne (-) tirée sur une Voyelle marque qu'il faut la trainer, & ont autre caractère (˘) marque un son court.

B

De

資料 106. Peyton (1776) の英文典 (続)

この文典には目次がない。ここから文法の部が始まるが、対話形式のため各章は Dialogue と呼ばれている。

文法編の Dialogue は全部で 14 章。39～264 頁が文法論で、265 頁から本の終わりの 433 頁までがフレーズ集と会話集である。

Dialogues Familiars.

ly iouzd äs änn
äd-verb ; äs nō,
äi cānt cōmme.

DIALOGUE IX.

Des Verbes.

B. **T**Hé verb is
äs thé sōul
ōf spēch, and sig-
nifies thé *action*,
passion, or bëing of
its *Nominative case*,
with thé circum-
stances of time,
présent, *pâst*, and
fütur; äs *I löve*,
I löved, *I will löve*;
I äm bëaten, *I wäs*
bëaten; *I shall bë*
bëaten; *I äm*, *I*
wäs, *I shall bë*.

Tbī verb iz-äs
tbī sōle äff spīch,
änn sīgue-nī-faize
tbī äc-chiënn, *päf-*
chiënn, *är bī-*
innng äff its Nâ-
mī-nē-tive Cäice,
ouith tbī cīr-cōmm-
stëun-ciz äff tåime,
prë-zënt, *pâst*, *än*
fiou-tiër; *äs äi*
löve, *äi lövd*, *äi*
ouill löve; *I äm*
bī'n, *I wäs bī'n*;
äi chäll bī bī'n;
äi ämm, *äi ouâz*,
äi chäll bī.

Le verbe est
comme l'ame du
discours, & signi-
fie, l'*action*, la *pas-*
sion, ou l'*être* de
son *Cas Nominatif*,
avec les circon-
stances du tems,
présent, *passé*, &
futur; comme
j'aime, *j'aimois*,
j'aimerai; *je suis*
batu, *j'étois batu*,
je serai batu; *je*
suis, *j'étois*, *je se-*
rai.

A. Hòw mày
ōne knòw ä verb?

Hâou mâi ouōnne
nō ä verb?

Comment peut
on connoître un
verbe?

B. évery wórd
thät cān bë *conju-*
gated in *good sēse*,
with ä *Substantive*
ōf thé *Nominative*
Case before it; and
withòut ä *Nomi-*
native Case before
it, cānot màke
good sēse, is ä

év-ry ouörd thät
cānn bī cānn-djou-
gäi-tëd inn gōud
sēnce, *ouith ä*
Sōb-stënn-tive äff
tbī Nâ-mī-nē-tive
Cäice bī-fōre it;
änn ouith-äout ä
Nâ-mī-nē-tive
Cäice bī-fōre it,

Chaque mot qui
peut être *conjugat*
en *bon sēse* avec
un *Substantif* du
Cas Nominatif de-
vant lui; & qui
sans un *Cas Nomi-*
natif devant lui,
ne peut pas faire
le *bon sēse*, est *ver-*
be:

Dialogues Familiars.
DIALOGUE IX.
Des Verbes.
Le verbe est
comme l'ame du
discours, & signi-
fie, l'action, la pas-
sion, ou l'être de
son Cas Nominatif,
avec les circon-
stances du tems,
présent, passé, &
futur; comme
j'aime, j'aimois,
j'aimerai; je suis
batu, j'étois batu,
je serai batu; je
suis, j'étois, je se-
rai.

資料 107. Peyton (1776) の英文典 (続)。ここから 208 頁までが動詞の部である。

Dialogues Familiars.

99

vérb: ás thé wórds
lóve, *rëad*, *tëach*.

A. Hòw múlt
 óne knòw thé
 wórd *lóve* ís á
vérb.

B. I knòw thé
 wórd *lóve* ís á
vérb, becáuse I
 càn *cónjugate* ít ín
góod sènsè; thús; I
lóve, *thòu lóvest*,
bè lóves; *wè lóve*,
yòu lóve, *thèy lóve*.

A. Prày, Sír,
 tèll mè wát thé
cónjugation óf á
vérb ís; fór I dòn't
understand yòu?

B. Thé *conju-*
gation óf á *vérb*
 ís íts *variation*,
 accòrding tó íts
various Nominatives,
 and díffe-
rences óf *mòod*, and
tènsè, ór *tímè*.

A. Hòw mány
 sòrts óf *Nominatives*
 àre thèrè?

B. Thèrè àre

cänn-nát mäische
góud sènnce, íz á
vérb; *áz thī ouördz*
lóve, *rīde*, *tīche*.

Háou mōit ouōone
nō thī ouörd lōve
 íz á *vérb*?

āi nō thī ouörd
lōve íz ā vérb,
bī-cāze āi cänn
cänn-djoū gāite ít
inn góud sènnce,
thōfs; *āi lōve*,
thāou lō-vést, *hī*
lōvz; *ouī lōve*,
ioū lōve, *thāi lōve*.

Prāi, Sōrr, téll
mī houát thī cänn-
djoū-gāi-chiēnn
āff ā vérb íz; *fārr*
āi dōnt òan-dēr-
stāumd ioū.

Thī cänn-djoū-
gāi-chiēnn āff ā
vérb íz ítz vā-
rī-āi-chiēnn, ac-
cār-dinnng toū ítz
vā-riōfs Nā-mī-
nē-tivz, ānn díf-
frēnn-ciz āff
mōūd, ānn tēnnce,
ārr tāime.

Háou mén-ný
sártz; āff Nā-
mī-nē-tivz āire
thāire?

Thāire āire thrī
 F-2

be: *comme les*
mots, aimer, lire,
enseigner.

Comment faut
 il favoir que le
 mot *aimer* est
verbe.

Je fai que le
 mot *aimer* est *ver-*
be, parceque je
 puis le *conjuguer*
 en *bon sens*, ainli;
j'aime; *tu aimes*, *il*
aime; *nous aimons*,
vous aimez, *ils*
aiment.

Je vous prie,
 Monsieur, dites
 moi ce que veut
 dire la *conjugaison*
 d'un *verbe*; car
 je ne vous entens
 pas.

La *conjugaison*
 d'un *verbe* est sa
variation, selon
 les *Nominatifs* dif-
 ferens, & ces dif-
 férences du *mode*,
 & du *tems*.

Combien d'es-
 peces de *Nomina-*
tifs y a-t-il?

Il y a trois es-
 thrèe

Modelle General pour conjuguer tous les verbes actifs & neutres qui sont reguliers.

General Model for conjugating all active and neuter regular verbs.

<i>Indicative.</i>	<i>Inn-dī-cā-tive.</i>	<i>Indicatif.</i>
<i>Simple Present Tense.</i>	<i>Simple Prézént Ténne.</i>	<i>Tems Présent Simple.</i>
<i>Singular.</i>	<i>Sinnng-guiou-lër.</i>	<i>Singulier.</i>
<i>I love,</i> <i>thou love-st,</i> <i>he or she love-s.</i>	<i>ai love,</i> <i>thâou löw-ëst,</i> <i>bī arr chī löwz.</i>	<i>J'aime,</i> <i>tu aimes,</i> <i>il ou elle aime.</i>
<i>Plural.</i>	<i>Plou-rël.</i>	<i>Pluriel.</i>
<i>We love,</i> <i>you love,</i> <i>they love.</i>	<i>ouï löwz,</i> <i>ioü löwz,</i> <i>thâi löwz.</i>	<i>nous aimons,</i> <i>vous aimez,</i> <i>ils aiment.</i>
<i>Compound Present.</i>	<i>Cömm - pâound Prézént.</i>	<i>Tems Présent Composé.</i>
<i>Singular.</i>	<i>Sinnng-guiou-lër.</i>	<i>Singulier.</i>
<i>I do love,</i> <i>thou do'st love,</i> <i>he or she does love.</i>	<i>ai doü löwz,</i> <i>thâou döst löwz,</i> <i>bī arr chī döz löwz.</i>	<i>j'aime,</i> <i>tu aimes,</i> <i>il ou elle aime</i>
<i>Plural.</i>	<i>Plou rël.</i>	<i>Pluriel.</i>
<i>We do love,</i> <i>you do love,</i> <i>they do love.</i>	<i>ouï doü löwz,</i> <i>ioü doü löwz,</i> <i>thâi doü löwz.</i>	<i>nous aimons,</i> <i>vous aimez,</i> <i>ils ou elles aiment.</i>
<i>Simple Preterim-perfect.</i>	<i>Simple Präi-tër-imm-për-fët.</i>	<i>Simple Preterim-parfait.</i>
<i>Singular.</i>	<i>Sinnng-guiou-lër.</i>	<i>Singulier.</i>
<i>I loved.</i>	<i>ai löwd,</i>	<i>j'aimois,</i>

資料 109. Peyton (1776) の動詞活用表

左が英語、中央が英語の発音記号、右が仏蘭西語である。時制は、直説法：単純現在・複合現在・単純未完成過去。

Dialogues Familiars. 137		
<p>thou lóved-ft, hè ór thè lóved.</p> <p><i>Plural.</i> Wè lóved, you lóved, they lóved.</p> <p><i>Compound Preter- imperfect.</i></p> <p><i>Singular.</i> I díd lóve, thou dídst lóve, hè ór thè díd lóve.</p>	<p>tháon ló-vedft, hē àrr chī lóvd.</p> <p><i>Plou-rèl.</i> ouī lóvd, ioū lóvd, thāi lóvd.</p> <p><i>Cōmm - pāound Prāi-tēr-imm- pér-fèt.</i></p> <p><i>Sīngg-guiou-lër.</i> āi díd lóve, tháou dídst lóve, hē àrr chī díd lóve.</p>	<p>tu aimois, il ou elle aimoit.</p> <p><i>Pluriel.</i> nous aimions, vous aimiez, ils ou elles aimoient</p> <p><i>Prétérit-imparfait Composé.</i></p> <p><i>Singulier.</i> j'aimois, tu aimois, il ou elle aimoit.</p>
<p><i>Plural.</i> Wè díd lóve, you díd lóve, they díd lóve.</p> <p><i>Preterperfect.</i></p> <p><i>Singular.</i> I lóved, &c. ás thè <i>simple preterim- perfect.</i></p> <p><i>Compound Preter- perfect.</i></p> <p><i>Singular.</i> I háve lóved, thou hást lóved, hè ór thè á s lóved.</p> <p><i>Plural.</i> Wè háve lóved,</p>	<p><i>Plou-rèl.</i> ouī díd lóve, ioū díd lóve, thāi díd lóve.</p> <p><i>Prāi-tēr-pér-fèt.</i></p> <p><i>Sīngg-guiou-lër.</i> āi lóvd, &c. áx thē <i>simple prāi- tēr - imm - pér- fèt.</i></p> <p><i>Cōmm - pāound Prāi-tēr-pér-fèt.</i></p> <p><i>Sīngg-guiou-lër.</i> āi háve lóvd, tháou hást lóvd, hē àrr chī háx lóvd.</p> <p><i>Plou-rèl.</i> ouī háve lóvd,</p>	<p><i>Pluriel.</i> nous aimions, vous aimiez, ils ou elles aimoient.</p> <p><i>Prétérit - parfait.</i></p> <p><i>Singulier.</i> j'aimai, &c. comme le pré- térit - parfait <i>simple.</i></p> <p><i>Prétérit-parfait Composé.</i></p> <p><i>Singulier.</i> j'ai aimé, tu as aimé, il ou elle a aimé.</p> <p><i>Pluriel.</i> nous avons aimé, you</p>

資料 110. Peyton (1776) の動詞活用表 (続)

直説法：単純未完成過去 (続)・複合未完成過去・完全過去。

138 Dialogues Familiars.		
you hâve lôved, thèy hâve lôved.	ioū hâive lôvd, thâi hâive lôvd.	vous avez aimé, ils ou elles ont aimé.
<i>Préter-plupérfect.</i>	<i>Prâi-tër-plou-pér- fèt.</i>	<i>Prétérît - plusques parfait.</i>
<i>Singular.</i> I hâd lôved, thou hâdst lôved, hè ôr shè hâd lôved.	<i>Sinn-guiou-lër.</i> âi hâd lôvd, thâou hâdst lôvd, hî ârr chî hâd lôvd.	<i>Singulier.</i> j'avois aimé, tu avois aimé, il ou elle avoit aimé.
<i>Plûral.</i> Wè hâd lôved, you hâd lôved, thèy hâd lôved.	<i>Plou-rël.</i> ouï hâd lôvd, ioū hâd lôvd. thâi hâd lôvd.	<i>Pluriel.</i> nous avions aimé, vous aviez aimé, ils ou elles avoient aimé.
<i>Fûture.</i>	<i>Fioū-tiër.</i>	<i>Futur.</i>
<i>Singular.</i> I shâll ôr wîll lôve, thou shâlt ôr wîlt lôve, hè ôr shè shâll ôr wîll lôve.	<i>Sinn-guiou-lër.</i> âi châll ârr ouïll lôve, thâou châlt ârr ouïlt lôve, hî ârr chî châll ârr ouïll lôve.	<i>Singulier.</i> j'aimerai, tu aimeras, il ou elle aimera.
<i>Plûral.</i> Wè shâll ôr wîll lôve, you shâll ôr wîll lôve, thèy shâll ôr wîll lôve.	<i>Plou-rël.</i> ouï châll ârr ouïll lôve, ioū châll ârr ouïll lôve, thâi châll ârr ouïll lôve.	<i>Pluriel.</i> nous aimerons, vous aimerez, ils ou elles aime- ront.
<i>Impérative.</i>	<i>Imm-pé-râ-tive.</i>	<i>Imperatif.</i>
<i>Singular.</i> Lèt mè lôve,	<i>Sinn-guiou-lër.</i> lèt mî lôve,	<i>Singulier.</i> que j'aime, lôve.

資料 111. Peyton (1776) の動詞活用表 (続)

直説法：完成過去・未来。 命令法。

<i>Dialogues Familiars.</i>			139
<i>lôve thâu ôr lôve, lét him ôr hér lôve.</i>	<i>lôve thâu ârr lôve, lét himm ârr hêrr lôve.</i>	<i>aime, qu'il ou qu'elle aime.</i>	
<i>Plûral.</i>	<i>Plou-rêl.</i>	<i>Pluriel.</i>	
<i>Lét ùs lôve, lôve you ôr lôve, lét thém lôve.</i>	<i>lét ôfs lôve, lôve iou ârr lôve, lét thémh lôve.</i>	<i>aimons, aimez, qu'ils ou qu'elles aiment.</i>	
<i>Potential.</i>	<i>Pô-ténn-chiêl.</i>	<i>Potentiel.</i>	
<i>Singular.</i>	<i>Sînd-guiou-lêr.</i>	<i>Singulier.</i>	
<i>I may ôr cân lôve, thâu may'ft ôr cân'ft lôve, hê ôr thê may ôr cân lôve.</i>	<i>âi mâi ârr cân lôve, thâu mâi'ft ârr cân'ft lôve, hî ârr chî mâi ârr cân lôve.</i>	<i>je puis ou je pourrai aimer, tu peux ou pourras aimer, il ou elle peut ou pourra aimer.</i>	
<i>Plûral.</i>	<i>Plou-rêl.</i>	<i>Pluriel.</i>	
<i>Wê may ôr cân lôve, you may ôr cân lôve, thêy may ôr cân lôve.</i>	<i>ouï mâi ârr cân lôve, iou mâi ârr cân lôve, thâi mâi ârr cân lôve.</i>	<i>nous pouvons ou pourrons aimer, vous pouvez ou pourrez aimer, ils ou elles peuvent ou pourront aimer.</i>	
<i>Impérfect.</i>	<i>Imm-pér-fêt.</i>	<i>Imparfait.</i>	
<i>Singular.</i>	<i>Sînn-guiou-lêr.</i>	<i>Singulier.</i>	
<i>I might, could, would, should, ôr òught tó lôve; thâu mightest, could'ft, would'ft, should'ft, ôr òughtest tó lôve; hê ôr thê might,</i>	<i>âi mâte, could, ouôud, choûd, ârr âte tou lôve. thâu mâi - têt, couldst, ouôudst, choûdst, ârr â-têt tou lôve; hî ârr chî mâte,</i>	<i>je pourrais, voudrais ou devrais aimer. tu pourrais, voudrais ou devrais aimer. il ou elle pourrait, could,</i>	

資料 112. Peyton (1776) の動詞活用表 (続)

命令法 (続)。

許可法 : [現在]・未完成過去。

Dialogues Familiars.		
140 could, would, should, or ought to love.	coûd, couïd, choûd, ârr âte tou lève.	voudroit ou de- vrait aimer.
<i>Plural.</i> Wè might, could, would, should, or ought to love ; you might, could, would, should, or ought to love ; they might, could, would, should, or ought to love.	<i>Plou-rël.</i> ouï mâte, couïd, ouïd, choïd, ârr âte tou lève ; iou mâte, couïd, ouïd, choïd, ârr âte tou lève ; thai mâte, couïd, ouïd, choïd, ârr âte tou lève.	<i>Pluriel.</i> nous pourrions, voudrions ou de- vriions aimer, vous pourriez, voudriez ou de- vriez aimer, ils ou elles pour- roient, voudroi- ent ou devroient aimer.
<i>Præterpæfct.</i>	<i>Præi-tær-pær-fæt.</i>	<i>Prætërit-pæfæc.</i>
<i>Singular.</i> I might, could, would, should, or ought to have loved ; thou mightest, could'st, would'st, should'st, or oughtest to have loved ; hè or she might, could, would, should, or ought to have loved.	<i>Sinn-guiou-ler.</i> ai mâte, couïd, ouïd, choïd, ârr âte tou hâive lôvd ; thâou mâte - tæst, couïd'st, ouïd'st, choïd'st, ârr â-tæst tou hâive lôvd ; hè ârr chè mâte, couïd, ouïd, choïd ârr âte tou hâive lôvd.	<i>Singulier.</i> j'aurois pu, aurois voulu, ou aurois du aimer ; tu aurois pu, au- rois voulu, ou au- rois du aimer ; il ou elle auroit pu, auroit voulu, ou auroit du aimer.
<i>Plural.</i> Wè might, could, would, should, or ought to have loved ; you might, could, would, should, or ought to have loved ;	<i>Plou-rël.</i> ouï mâte, couïd, ouïd, choïd, ârr âte tou hâive lôvd ; iou mâte, couïd, ouïd, choïd, ârr âte tou hâive lôvd ;	<i>Pluriel.</i> Nous aurions pu, aurions voulu, ou aurions du ai- mer ; vous auriez pu, auriez voulu,

資料 113. Peyton (1776) の動詞活用表 (続)

許可法 : 未完成過去 (続) ・ 完成過去。

Dialogues Familiars.			141
would, should, or daghe tò hâve lôved ; they might, could, would, should, or daght tò hâve lôved.	ouët, choët, ârr âte tou hâve lôvd ; thâi mâtte, coët, ouët, choët, ârr âte tou hâve lôvd.	auriez voulu, ou auriez du aimer ; ils ou elles auroi- ent pu, auroient voulu, ou auroi- ent du aimer.	
Future.	Fioü-tiër.	Futur.	
Singular.	Sinn-guiou-lër.	Singular.	
Imây ör cân lôve, &c. ás thé pré- sent.	âi mâi ârr cân lôve &c. äz thî pré-zennt.	je puis ou pourraï aimer, &c. com- me le present.	
1. Conjunctive.	1. Cönn-djönn- tive.	1. Conjonctif.	
Present Simple and Compound.	Pré-zéant Simm- ple änn Cömm- pâound.	Present Simple & Composé.	
Singular.	Sinn-guiou lër.	Singular.	
If I lôve ör dô lôve ; if thòu lôve-ft, ör dôft lôve ; if hè ör shè lôve-s ör dôes lôve, &c. All thé rést is thé sâme ás thé Indicative, by äd- ding ä Conjunction tò it.	if âi lôve, ârr dôü lôve ; if thâou lö-vest, ârr dôft lôve. if hî ârr chî lôvx, ârr dôz lôve, &c. âll thî rést iz thî sâime äz thî inn-dî-cä-tive, bâi äd-ding ä Cönn-djönn- chienn tou it.	si j'aime ; si tu aimes ; s'il ou elle aime, &c. Tout le reste est le même que l'indicatif, en y ajoutant une con- jonction.	
2. Conjunctive.	2. Cönn-djönn- tive.	2. Conjonctif.	

資料 114. Peyton (1776) の動詞活用表 (続)

許可法 : 完成過去 (続) ・ 未来。

第1接続法 : 単純現在 及び複合現在。

第2接続法。

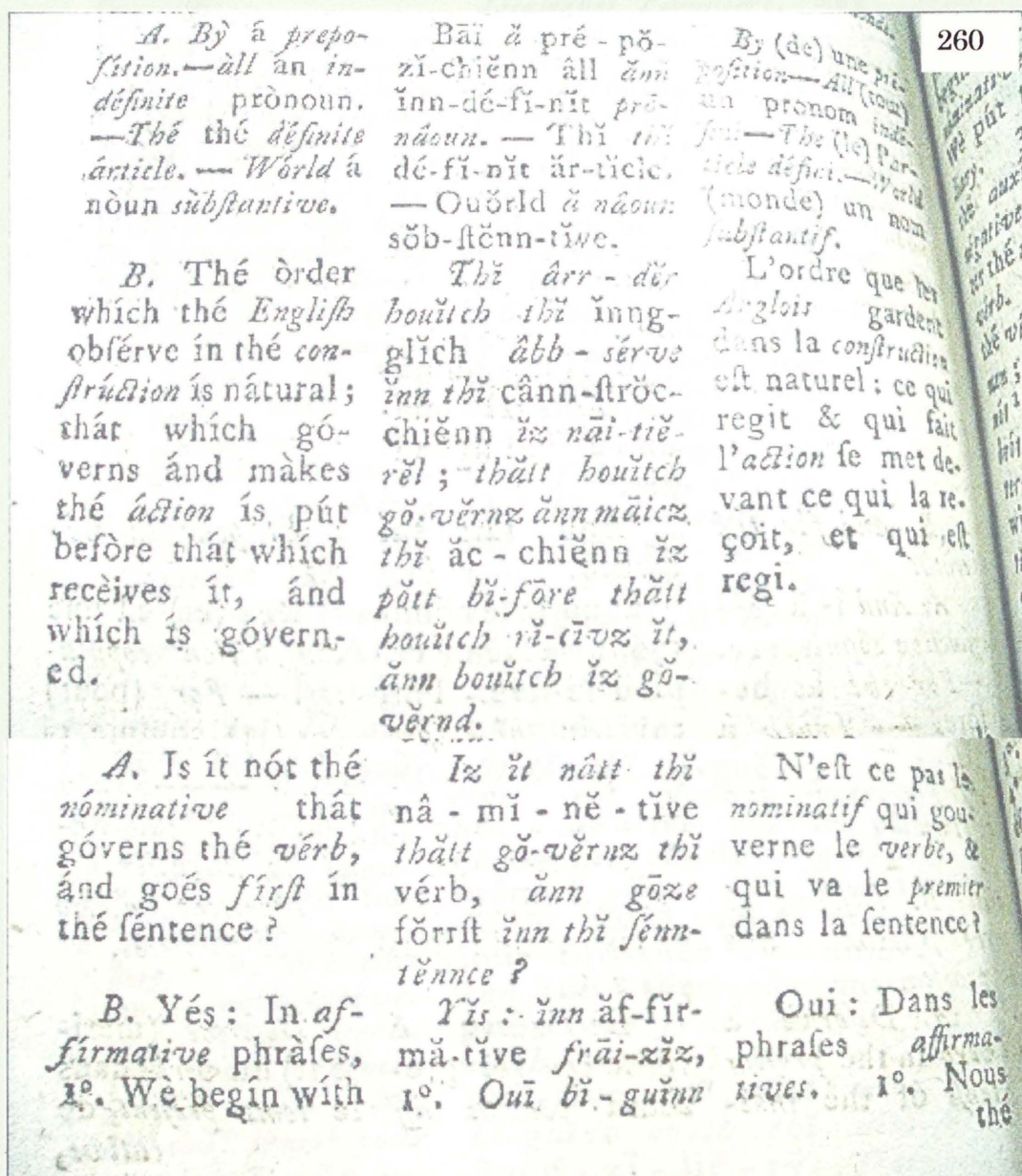
142		Dialogues Familiars.		143	
<i>Présent.</i>	<i>Pré-zénnt.</i>	<i>Présent.</i>			
<i>Singular.</i> Thát l màý ór cán lóve, thát thòu màý'ft ór cán'ft lóve, thát hê ór shè màý ór cán lóve, &c.	Sĩng-guiou-lër. thätt ái mài àrr cänn löve, thätt thàou màif àrr cännst löve, thätt hī àrr chī mài àrr cänn löve, &c.	<i>Singulier.</i> Que je puisse ai- mer, que tu puiffes ai- mer, qu'il ou elle puisse aimer, &c.			
All thé rést is thé sàme às thé <i>Potential</i> , bý ád- ding á <i>Conjunction</i> tó it.	áll thī rést iz thī sàime às thī Pö-ténn-chiël, bāi äd-ding á Cönn- djönn-chiënn toü it.	Tout le reste est le même que le <i>Potentièl</i> , en y ajoutant une <i>Con- junction</i> .			
<i>Infinitive.</i>	Inn-fī-nī-tīve.	<i>Infinitif.</i>			
<i>Présent Ténse.</i> Tó löve.	Pré-zénnt Ténnce. toü löve.	<i>Tems Présent.</i> aimer.			
<i>Preterpérfect.</i> Tó hàve löved.	Präi-tër-pér-sët. toü hāi-ve lövd.	<i>Prétérit-parfait.</i> avoir aimé.			
<i>Participle óf thé Présent Ténse.</i>	Pär-tī-cīple áff thī Pré-zénnt Ténnce.	<i>Participe du Prè- sent.</i>			
Löv-ing. <i>Compound Parti- ciple óf thé Präter Ténse.</i>	lö-vĩng. Cömm-pāound Pär-tī-cīple áff thī Präi-tër Ténnce.	aimant. <i>Participle Composé du Tems Prétérit.</i>			
Hävĩng löve-d.	hāi-vĩng löv-d.	ayant aimé.			
1. <i>Gerund.</i> Of löv-ing.	1. Dgér-rönd. áff lö-vĩng,	1. <i>Gerondif.</i> d'aimer.			
2. <i>Gerund.</i> In löv-ing.	2. Dgér-rönd. inn lö-vĩng.	2. <i>Gerondif.</i> en aimant.			
		3. <i>Gerund</i>			

Dialogues Familiars.		143	
3. <i>Gerund.</i> Tó löve.	3. Dge-rönd. toü löve.	3. <i>Gerondif.</i> pour aimer.	
B. Bý thís mó- del you màý cón- jugate áll thé ré-	Bāi thēs mō- dél iou mài cänn- djou-gāite áll thī	Selon ce mo- delle vous pouvez conjuguer tous les	

資料 115. Peyton (1776) の動詞活用表 (続)

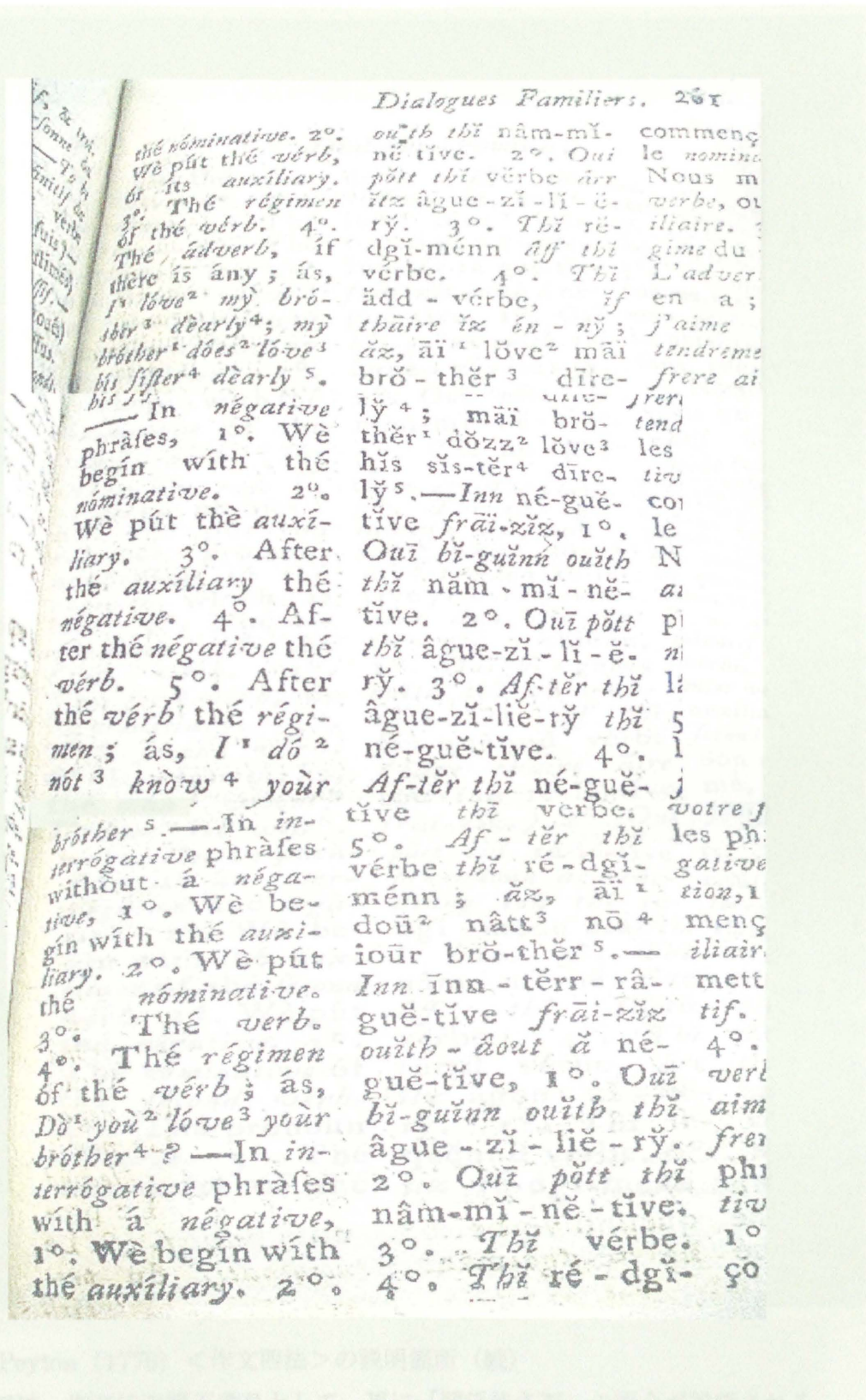
第2接続法：現在。不定法：現在・完全過去。現在分詞・過去複合分詞。

第1ジェルンド、第2ジェルンド、第3ジェルンド。



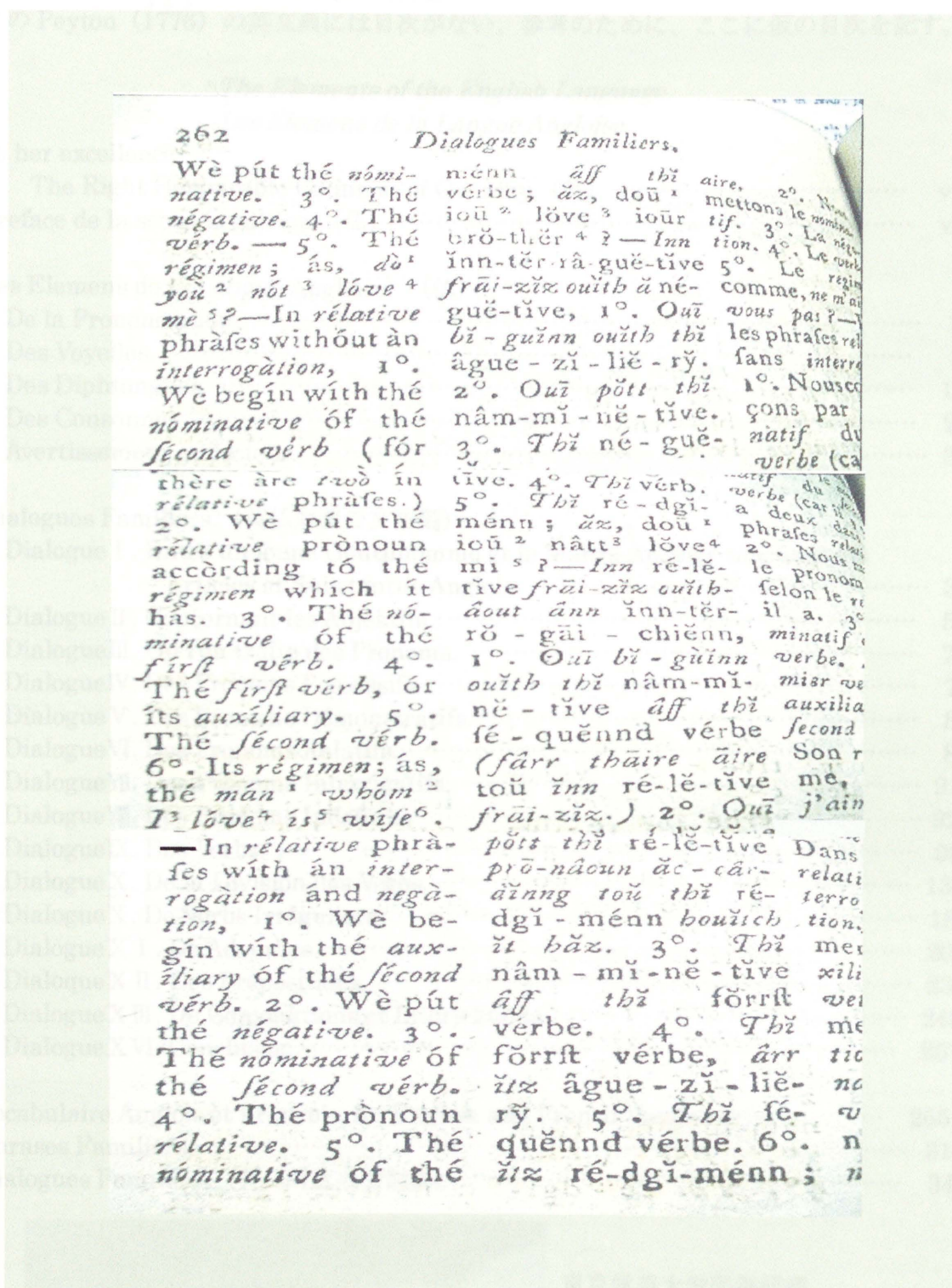
資料 116. Peyton (1776) <作文四法>の説明箇所

これは、文法編の最終章 Conclusion にある。その第一は affirmative phrase である。ただし Peyton には、『和蘭語法解』のような活用一覧表はない。



資料 117. Peyton (1776) <作文四法>の説明箇所 (続)

Negative phrase、Interrogative phrase、Interrogative phrase without a negative の部分。



資料 118. Peyton (1776) <作文四法>の説明箇所 (続)

Peyton では、作文法の第五番目として、更に「関係代名詞」の場合が説明される。
 <relative phrase without an interrogation> と <relative phrase with an
 interrogation and negation> の部分。

資料 119. Peyton (1776) の英文典「目次」

この Peyton (1776) の英文典には目次がない。参考のために、ここに仮の目次を記す。

The Elements of the English Language.
Les Elemens de la Langue Angloise.

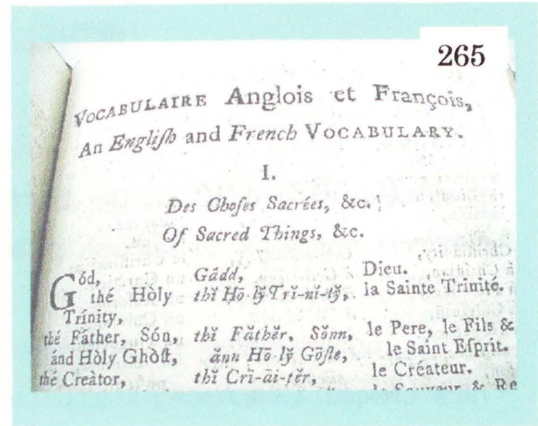
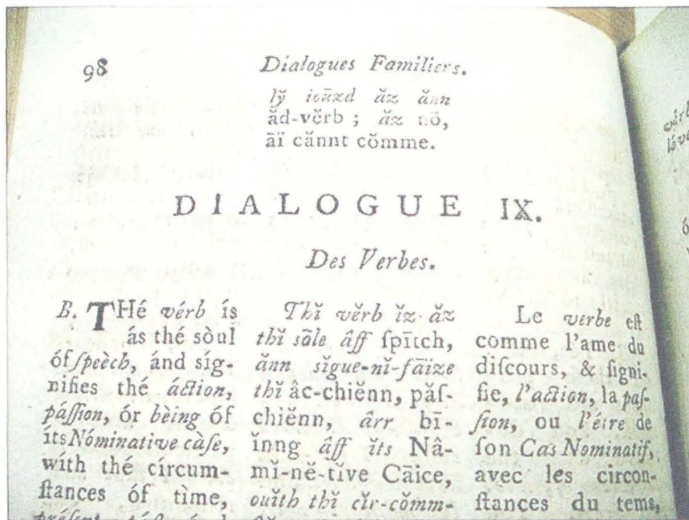
To her excellence

The Right Honourable Countess of Querchy. (英)	v
Preface de la seconde edition. (仏)	vii
Les Elemens de la Langue Angloise. (仏)	
De la Prononciation.	1
Des Voyelles.	3
Des Diphtongues.	12
Des Consonnes.	23
Avertissement au lecteur.	38
Dialogues Familiers. (英仏対訳の文法編)	
Dialogue I. Entre un jeune Gentilhomme et le Maitre Anglois, touchant les Articles et Substantifs Anglois.	39
Dialogue II. Concernant les Adjektifs.	57
Dialogue III. Oú l'on traite des Pronoms.	74
Dialogue IV. Des Pronoms Possessifs.	79
Dialogue V. Des Pronoms Démonstratifs.	83
Dialogue VI. Des Pronoms Relatifs.	87
Dialogue VII. Des Pronoms Interrigatifs.	91
Dialogue VIII. Des Pronoms Indefinis.	92
Dialogue IX. Des Verbs.	98
Dialogue X. De la Division des Verbs.	130
Dialogue X. De Verbs Irréguliers.	187
Dialogue X I. De Adverbes.	209
Dialogue X II. Des Prépositions.	236
Dialogue X III. De Conjonktions et Interjektions.	249
Dialogue X VI. Conclusion.	257
Vocabulaire Anglois et François, An English and French Vocaburary.	265
Phrases Familiers.	314
Dialogues Familiers. (英仏対訳の会話編)	349

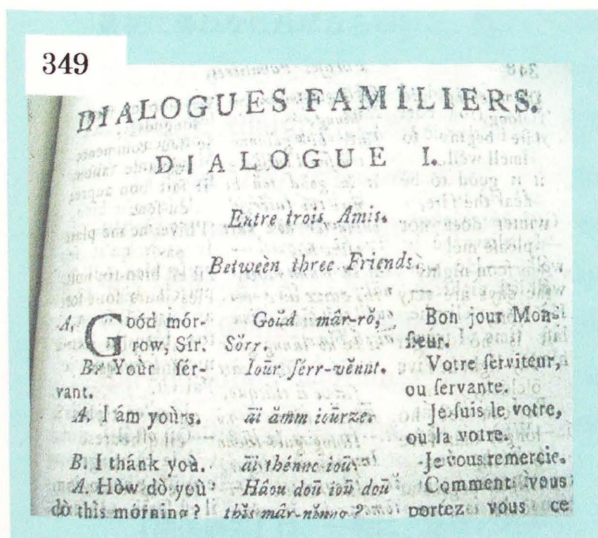
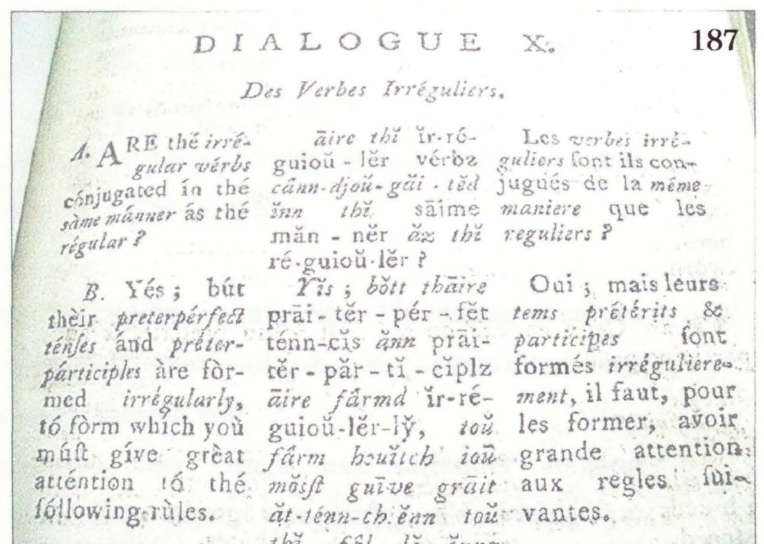
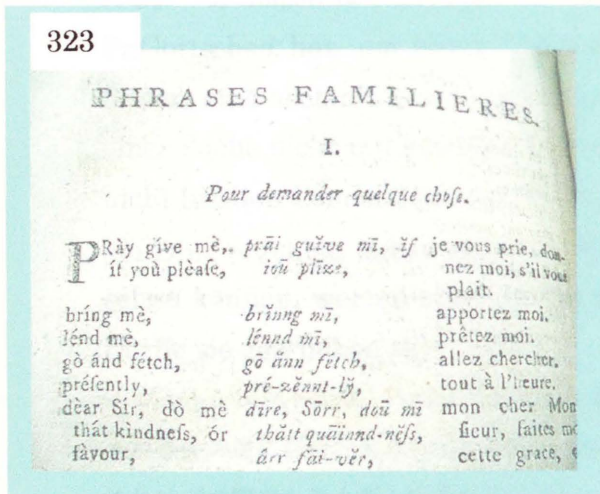
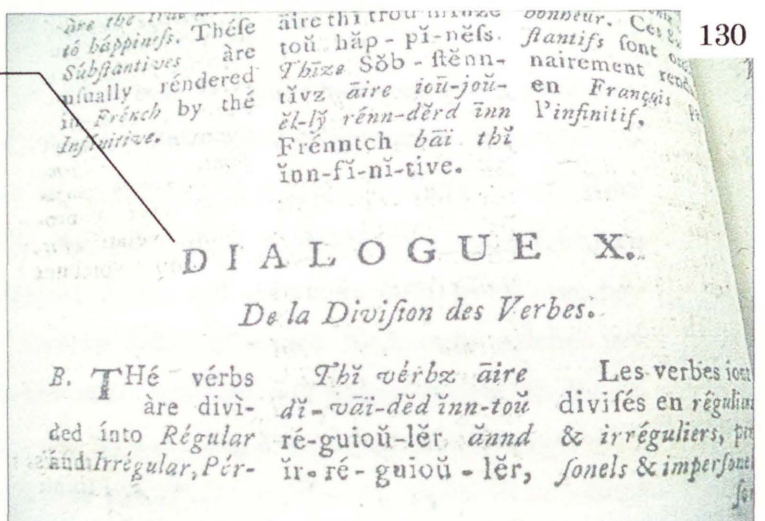


東京学芸大学図書館蔵





章番号の<X>がミスプリで重複している。



資料 120. Peyton (1776) の英文典 その他

APPENDIX (年代順)

No.1. Sewel, W. (1708, p.34 ; 1746, p.29 ; 1766, p.39)

Niettemin zal 't niet ondienstig zyn aan te mērken, dat de *Engelschen* veelytyds de *Onvolkomen verledene tyd* gebruyken, in plaats dat wy ons van de *Volkomen verledene tyd* bedienen, als

I never saw that man before, Ik heb dien man nooit te vooren gezien.

しかし、我々が【完成過去】(Perf.)を用いる場合、英国人はしばしば【未完成過去】(Imperf.)を用いるということを注意するのは、決して無益なことではあるまい。

[※各時制について個別の説明は持っていない。この一文は<Woordschikking> (文論)にある]

No.2. Aichinger(1754, p.292)

Gottschedの<Jenes[Perf.] soll man brauchen, wenn man bey einer Sache nicht mit gewesen : dieses[Imperf.], so man dabey gewesen.>[Perf.は人がその事柄のもとに居合わせなかった場合に用いられる。一方 Imperf.はそこに居合わせた場合に用いられる]という言に対しての批判：—— Herr Pr.Gottsched hat, um einen Unterschied zwischen dem perfekto und imperfekto zu finden, eine noch nie gewesene Regel erdacht. Jenes soll man brauchen, wenn man bey einer Sache nicht mit gewesen ; dieses, so man dabey gewesen. Er spricht, solches sey nicht in allen Ländern gebräuchlich : daher man daselbst erst fragen müsse, ob der, so ein Ding erzählet, dabey gewesen. Welch ein Anforderung ! Aus dem tempora soll man sehen können, wer an einer Sache mit Theil gehabt habe. Warum nicht, in welchem Dorffe sie geschehen sey?

ゴットシェート氏は、Perf.と Imperf.の違いを見出すためにありもしない規則を考えついた。Perf.は人が事件の場に居合わせなかった時に、Imperf.は居合わせた時に用いられねばならない、と彼は言う。これはどの国でもそうだというわけではないので、事件を語る人間がその場に居たかどうかを人はそこで最初に尋ねなければならない。何という要求であろう。その時制から、誰が事件に関係があったかを知ることができるのだそうだ。勿論どの村でその事件が起こったかもである。

No.3. Adelung (1782, 1. Band, § 677)

(1) *Das Imperfectum* wird überhaupt gebraucht, wenn eine Handlung erzählet werden soll, welche in Ansehung des Redenden, oder vielmehr des Zusammenhangs der Rede, als erst kurz vergangen dargestellt werden soll.

In zusammen hangenden Erzählungen, wo Dinge auf einander folgend dargeschillet werden ; daher es in einer zusammen hangenden Geschichte am häufigsten gebraucht, und um deswillen auch das wahre Tempus historicum der Hochdeutschen ist.

【関係過去】は、一般に、話者の判断か、あるいはむしろ話の脈絡という観点から、ほんのちょっと前

に過ぎ去ったばかりのこととして叙述されるべき行為を語る際に用いられる。

因果関係のある物語においては、事象は次々と連続的に描写されるものであるから、Imperf.は事象が因果関係を持つ「歴史」において最もよく用いられる。これが故に Imperf.は高地ドイツ語における真の「歴史時制」でもある。

Das Perfectum hingegen stehet, wenn eine vergangene Veränderung für sich allein, und ohne Beziehung auf eine andere Begebenheit vorgestellt wird.

それに対し【孤立過去】は、ある過去の出来事が、孤立的に、他の事象と何の関係もなしに叙述される場合に用いられる。

(2) Gottsched の <Jenes[Perf.] soll man brauchen, wenn man bey einer Sache nicht mit gewesen : dieses[Imperf.], so man dabey gewesen.> [Perf.は人がその事柄のもとに居合わせなかった場合に用いられる。一方 Imperf.はそこに居合わせた場合に用いられる]という言に対しての批判として：—— Es ist unnötig, den Ungrund dieses Unterschiedes zu beweisen ; ... Wenn ich erzähle, am Anfang schuf Gott Himmel und Erde u.s.f. wer wird sich da wohl träumen lassen, da ich mit dabey gewesen? Oder wenn ich sage, ich bin gestern zu Gaste gewesen, welcher vernünftige Mensch wird wohl zweifeln, da ich mit dabey gewesen? (p.384)

この相違の理由にもならない理由を示す必要はない。……「始めに神は天と地を創造し給うた」と私が Imperf.で言う時、一体誰が、私がお客に居たなどと思うだろうか。あるいは「私は昨日お客として呼ばれた」と Perf.で言う場合、理性ある人間で私がお客にいたかどうか疑う者などいるだろうか。

NO.4. Marin, P. (1790)

(1) Hoe gebruikt men de Voorleeden Tyden der Toonenderwys?

---*De eerste* [第一過去 J' étois] toont de Daad in haar geduurzaamheid.

Wanneer bediend men zig van *de tweede Voorleeden Tyd* [第二過去 Je fus]?

---Als de daad t'eenemaal geëindigd is. (pp.113-114)

どのように直説法過去は用いられるか——《第一過去》は継続中の行為を述べる。

いつ《第二過去》は用いられるか——その行為が終了したとき。

(2) In de Fransche Conjugation vind men in den *Indicativus* twee *præterita*, die men in 't Latyn nog in 't Nederduitsch niet recht kan uitdrukken, en derhalve is 't hoog noodig 't onderscheid daar van aan te toonen.

Het eerste *præteritum*, of de *voorleeden tyd*, wist een daad aan, die niet t'eenemaal geëindigd of voorby is. Het tweede *præteritum*, of de *voorleden tyd*, wordt gebruikt, als men van een daad spreekt, die 't eenemaal geëindigd en voorby is....

Maar men moet zich wachten dit *tempus* te gebruiken als men van iets spreekt, dat op den zelfden dag voorgevallen is ; als dan moet men de spreekwyze met een *tempus perfektum* uitdrukken. (p.121)

仏蘭西語の動詞活用においては、直説法にふたつの過去が見出される。それは羅典語においても和蘭語においても正確に表現することができない。よってその違いについて説明することが絶対に必要である。

《第一過去》はまだ終了していない、あるいは過ぎ去っていない行為を表す。《第二過去》は終了し過ぎ去った行為について話すときに用いられる。…

しかしながら、その同じ日に起こった事柄について話すときは、人は《第二過去》というこの時制を用いることを控えねばならない。即ちその場合は Perfectum で以って表現すべきである。

NO.5. Murray, L. (*English Grammar*, 1795[初版], pp.41ff.)

The Preterimperfekt Tense represents the aktion or event as past and finished, or as remaining unfinished at a certain time past ; as, "I loved her for her modesty and virtue" ; "I wrote yesterday, or last year" ; "They were travelling post when he met them."

The Preterperfekt Tense not only refers indefinitely to what is past, but also conveys an allusion to the present time ; as, "I have written the letter" ; "I have seen the person that was recommended to me" ; that is, "I have seen him by this time."

... The preterperfekt tense, and the preterimperfekt tense, both denote a thing that is past, ; but the former denotes it in such a manner, that there is still actually remaining some part of the time to slide away wherein we declare the thing has been done ; whereas the preterimperfekt denotes the thing or aktion past in such a manner, that nothing remains of that time wherein it was done...

In general the preterperfekt tense may be applied wherever the aktion is connected with present time, by the aktual existence, either of the author or of the work, though it may have been performed many centuries ago ; but if neither the author nor the work now remains, it cannot be used...

NO.6. Sedger, J. (1798, p.54)

This tense applies to a mode of being or mode of aktion. *I have been ill to day*, the day being present, I call this *the present perfekt tense*. I have been ill yesterday, would be wrong.. I was ill yesterday, is the proper expression of the past time.

NO.7. Weiland, P. (1806, p.63)

De onvolmaakt verledene tijd duidt eene niet geëindigde handeling aan.

【未完成過去】は未だ終わっていない行為を表わす。

De volmaakt verledene tijd stelt eene zaak als geheel geëindigd voor.

【完成過去】はある事柄を完全に終わったものとして表わす。

NO.8. Murray, L. (和名『モルレイ氏英吉利小文典』: 1806, pp.83f.)

— *The Imperfect Tense* represents the action or event, either as past and finished, or as remaining unfinished at a certain time past ; as, "I loved her for her modesty and virtue" ; "They were travelling post when he met them."

The Perfect Tense not only refers to what is past, but also conveys an allusion to the present time ; as, "I have finished my letter" ; "I have seen the person that was

recommended to me.”

... The perfect tense, and the imperfect tense, both denote a thing that is past, ; but the former denotes it in such a manner, that there is still actually remaining some part of the time to slide away, wherein we declare the thing has been done ; whereas the imperfect denotes the thing or action past, in such a manner, that nothing remains of that time in which it was done....

In general, the perfect tense may be applied wherever the action is connected with present time, by the actual existence, either of the author, or of the work, though it may have been performed many centuries ago ; but if neither the author nor the work now remains, it cannot be used....

[※これ以後の版では時制名から<preter>が消え、<k>が<c>に変わる]

NO.9. Pyl, R.van der (1819, pp.132-134)

The preter imperfect tense expresses an action, past at the time in which I speak, but still present at the time of which I speak.

The perfect tense expresses an action, not only past at the time, in which we speak, but also at that, of which we speak.

NO.10. ^{マートシカッペイ}Maatschappij 『和蘭文典 前編』^{みづくり}作州箕作氏蔵版 ⁽¹⁸⁴²⁾天保13年壬寅九月(原本 ; *Grammatica, of Nederduitsche Spraakkunst.*1822) ^{文政5} [江戸幕府旧] ^{西洋書外}

§ 145. *De onvolmaakt verledene tijd*....stelt eene zaak voor, die voorbij is op den tijd, waarin men spreekt, maar nog duurde op den tijd, waarvan men spreekt, of duidt eene handeling aan, welke nog niet geheel voorbij is, waanneer eene andere begint....

【未完成過去】(=Imperf.)は、我々が話をしている時点では既に過ぎ去っているが、我々によって語られるその時点ではまだ継続している事柄か、さもなければ、別の行為が始まる時まで完全に過ぎ去っていない行為を表わす。

§ 146. *De volmaakt verledene tijd* stelt eene zaak voor, als geëindigd op den tijd, waarin men spreekt, zonder eenig opzigt op eenigen anderen tijd, op eenige andere handeling.

【完成過去】(=Perf.)は、我々が話している時には完全に終了した事柄を表わす。他のいかなる時・行為にも関係しない。

NO.11. Bilderdijk, W. (1826, pp.159 f.)

Wij hebben dus het voorledene verklaard, doch men onderscheidt gewoonlijk in alle talen op 't voorbeeld van 't Latijn drie voorleden tijden, of vormingen van het voorledene .

De eerste is,.....doch waaran men (zeer te onrecht, maar naar de wijsheid der oudere en latere Taalleeraars) den naam van *Onvolmaakt Voorleden* gegeven heeft (Praeteritum imperfectum). Te minder voegt deze benaming bij ons, daar dit voorleden

het juist is, waarin alle verhaal van 't gebeurde vervat wordt, even als in het perfectum der Latijnen.

Den tweeden noemt men *den Volmaakt voorleden tijd*; *den derden, den Meer dan volmaakten tijd*... Beter zou men aan de eerste vorming een algemeen Voorleden, en aan de tweede een afgedaan Voorleden, en aan de derde een voor-Voorleden als benaming toeëigenen.

このように我々は「過去」について説明した。しかし、すべての言語には羅典語の例に倣って三種の過去時ないしは過去の形態が区別されるのが普通である。

第一の過去は、……人はこれに【不完全過去】という名称を与えた（これはあまり適切ではないが、しかし古今の文法家の説に従ったものである）。この名称は我が和蘭語にはあまり向いていない。何故ならこの過去は、その中で出来事のすべてのストーリーが表現される過去で、羅典語の（歴史的）Perfect と同じようなものだからである。

第二の過去は【完全過去】と呼ばれる。第三は【更なる過去】である。……第一の形を「一般過去」、第二を「終了過去」、第三を「前過去」という名称にしたほうがより適切であろう。

No.12. Wilde, J.C. de (1836, pp.72-74)

De onvolmaakt verledene tijd duidt eene handeling aan, die wel begonnen maar niet geëindigd is.

De volmaakt verledene tijd stelt eene daad als geheel geëindigd voor, met betrekking tot den tijd waarin men spreekt.

【未完成過去】は、もう始まっているのにまだ終了しない行為を表わす。【完成過去】は、完全に終了したが、我々が話している時と関係を持っている好意を表わす。

No.13. J.Grimm (1837)

Man muss sagen;.....die mit *habe* und *bin* gebildeten [umschriebenen temporal] treten neben dem einfachen prät. für das lat.perf. ein, dergestalt, dass erzählende perf.(der gr.aor.) mit dem einfachen prät., das dem gr. perf. gleiche lat. perf. aber mit der deutschen umschreibung ausgedrückt wird. unser einf.prät. dient zugleich für das lat.imperf. In dem mit *habe* und *bin* zusammengesetzten prät., wie in dem begriff vollendeter vergangenheit, liegt etwas präsensartiges;...

…羅典語で、物語の Perf.（希臘語の aorist に当たる）が独逸語の単純過去で表現され、一方希臘語の Perf.に相当する方の Perf.が、独逸語では<haben>と<sein>による書替え形によって表現されるように、この書替えの時制は、単純過去と共に羅典語の Perf.に相当する。この<haben>と<sein>の複合過去には、完成した過去の概念の中にも「現在のなもの」が存在している。

No.14. Héyse, K.W.L. (1838, I .Band, pp.683ff.)

(1) *Die vollendete Gegenwart*, das Praesens perfectum, gewöhnlich schlechthin perfectum genannt, zeigt an, daß eine Handlung gegenwärtig vollendet ist; ich *habe gelesen*, du *hast geschrieben* (d.h. mein Lesen, dein Schreiben ist gegenwärtig

vollendet) ; wir *sind gekommen* (also gegenwärtig da).

Anmerk. Fälschlich hält man diese Zeitform gemeiniglich für ein Tempus der Vergangenheit.

《完成現在》は、普通は唯 Perf.とのみ呼ばれる。この形は、行為が現在において完了したということを表わす。注：この時制を普通過去時制とするのは誤りである。

Die währende Vergangenheit, das Praeteritum imperfectum, gewöhnlich schlechthin Imperfectum genannt, bezeichnet eine vergangene Handlung in ihrer Dauer ; Ich *las* und Du *schreibst* (d.h. ich war im Leben, Du im Schreiben begriffen, damit beschäftigt), als er hereintrat.

《継続過去》または《未完成過去》は、普通はただ Imperf.とのみ呼ばれる。この時制は、継続中の過去の行為を表わす。

(2) . . . Es giebt auch Zeitformen, welches reine Ausdruck der Subjectiven Zeiten enthalten, aber die Handlung od. den Vorgang schlechthin und ohne innere Begrenzung nach den Momenten ihres Verlaufs in die Gegenwart, Vergangenheit, od. Zukunft des redenden Subjects setzen. Diese Zeitformen nennt man im griechischen Aoriste, d.h. unbegrenzte Zeiten (Tempora indefinita).

Das deutsche Verbum hat jedoch, wie das lateinische, für diese Zeitbegriffe keine eigenthümlichen Ausdrücke, sondern bedient sich auch dafür der obigen bestimmten Tempora, namentlich derer, welche die Handlung in der Währung darstellen.

時の形には出来事を純粋に表現する形式もある。そこでは、行為や事の経緯は、内的な何らの附帯条件もなしに、ただ単にそれが起こった時点の通りに順々に並べられて、現在か過去か未来の中に置かれる。これらの時制形式は、希臘語では Aorist、即ち「非限定時制(不定時)」と呼ばれる。

ところが、独逸語の動詞は、羅典語と同じく、こういう時間概念を表わすための力を本来持っていないのである。そのため、上述の「制限時」——即ち、行為を継続的に叙述する時制が、ここでもやはり用いられる。

(3) . . . Das Tempus der währenden Vergangenheit (Imperfectum) dient zugleich für die unbegrenzte Vergangenheit, als historisches od. erzählendes Tempus...

Anmerk. Das griechische Verbum hat für den Aorist der Vergangenheit, welchen die deutsche Sprache durch das Imperfectum, die lateinische durch das Perfectum mitbezeichnen muß, eigenthümliche Formen.

《継続過去》は更に、不定過去の代わりに、歴史時制、または物語の時制として用いられる。

注) 希臘語の動詞には、過去のアオリストのための固有の動詞形があるが、独逸語では《継続過去》(=Imperf.)が、羅典語では《完成過去》(=Perf.)が、それを兼ねなくてはならない。

(4) Dieser Irrtum ist daher entstanden, weil man das Vollendet=sein der Handlung mit der vergangenen Zeit verwechselte, wie denn überhaupt die bisher gewöhnliche verworrene Theorie der Tempora die 3 objectiven Momente der Handlung von den 3

subjectiven Zeiten nicht unterschied, und durch ein Früher od. Später in Beziehung auf die Zeit des Redenden die Unterschiede zu erklären meinte, welche in der Handlung selbst als die wesentlichen Momente ihrer zeitlichen Ausdehnung liegen. Daher entstanden denn so verkehrte Benennungen, wie Plusquamperfectum, jüngst= und längstvergangene Zeit, die nichts aufzuklären vermochten, und mit denen man beständig nur ins Gedränge kam, wenn man z.B. bemerkte, da die sogenannte längst vergangene Zeit auch von einer ganz kürzlich vorgefallenen Sache gebraucht werden kann, (z.B. *vor einer Stunde, als mein Bruder zu mir kam, hatte ich eben einen Brief geschrieben*), die sogenannte jüngst vergangene hingegen von einer uralten Begebenheit, (z.B. *Cäsar schrieb vor beinahe 1900 Jahren die Geschichte seiner Feldzüge*.)

Perf. (ich habe gehabt) を過去とするこの誤りが生じたのは、行為の完了という状態が時間的な過去と取り違えられたからである。これまでの時制論では、行為の「開始」「継続」「完了」という副次的3時点、主時である「現在」「過去」「未来」と区別しないのが普通である。この行為の3時点は、行為それ自体の中に存在して行為の時間を拡張する本質的なものであるが、それを、従来の理論は、発話時の前か後かということによって説明しようと考えた。それ故【更なる過去】(Plusquamperf.) だとか、【つい最近過ぎ去ったばかりの過去】(jüngst vergangene Zeit=Imperf.)だとか、【ずっと前に過ぎ去った過去】(längst vergangene Zeit=Plusquamperf.) だとか言う、何の説明にもならない誤った名称が生まれたのである。そして、これらの名称を使うと、次のような場合にはいつも決まって困難に陥ってしまうのである。即ち【ずっと前に過ぎ去った過去】が、ほんのつい最近起こったばかりのことに用いられたり、逆に【つい最近過ぎ去ったばかりの過去】のはずが、古代の出来事を述べたりする。例を挙げれば、*Vor einer Stunde, als mein Bruder zu mir kam, hatte ich eben einen Brief geschrieben*. [兄がここに来る一時間前、私はちょうど手紙を書いていた]の<hatte....geschrieben>[書いていた]は、一時間前でも【ずっと前に過ぎ去った過去】(Plusquamperf.)であるし、*Cäsar schrieb vor beinahe 1900 Jahren die Geschichte seiner Feldzüge*. [シーザーは約1900年前に自らの遠征記を書いた]の<schrieb>[書いた]は、1900年前なのに【つい最近過ぎ去ったばかりの過去】(Imperf.)である。

(5) Die Quelle dieser Begriffsverwirrung liegt schon in der lateinischen Grammatik, deren alte Lehrer sich besonders durch die doppelte Natur des sogenannten Perfectums (z.B. *amavi, legi*) irre führen ließen. Dieses muß nämlich neben seiner Bedeutung als Zeitform für die vollendete Gegenwart (*ich habe geliebt, gelesen*) zugleich den mangelnden Aorist der Vergangenheit ausdrücken, wofür wir uns im Deutschen des Imperfects der Vergangenheit bedienen (*ich liebte, las*).

この時制概念の混乱は、すでに羅典文法の中に存在している。旧来の羅典文法家が過ちを犯したのは、いわゆる Perf.の持つ二重の性質故である。Perf. (*ich habe geliebt, gelesen*) は、つまり完了した「現在」のための時制形式であるが、同時に羅典語に欠けている「過去のアオリスト」をも表現しなければならないからである。我が独逸語では、この「過去のアオリスト」に対しては Imperf.、即ち【過去未完成】

(*ich liebte, las*) が用いられる。

No.15. Hamelberg, H.A. (1845, p.146)

In het Nederduitsch wordt van den onvolmaakt verledenen tijd meestal gebruik gemaakt, wanneer eene verledene handeling in betrekking tot eene andere verledene handeling als tegenwoordig wordt voorgesteld, terwijl de volmaakt verledene tijd de handeling zonder betrekking op eene andere voorstelt.

In het Engelsch echter wordt altijd de verledene handeling, wanneer de tijd, waarop zij plaats heeft, niet met het tegenwoordige oogenblik in verband staat, onverschillig, of zij al dan niet op eene andere verledene handeling betrekking heeft, door den onvolmaakt verleden tijd uitgedrukt ; terwijl de volmaakt verledene tijd gebruikt wordt, wanneer de tijd der handeling nog voortduurt, of een gedeelte uitmaakt van dien, waarin gesproken wordt ; alsmede wanneer de handeling, schoon in eenen verleden tijd geschied, in betrekking staat tot het tegenwoordige oogenblik door het voortdurend bestaan van den werker of het gewrocht....

I saw him yesterday. ik heb hem gisteren gezien.

I finished my work last week. ik heb mijn werk verleden week afgemaakt.

低地独逸語 [=和蘭語] では、ある過去の行為がもうひとつ別の過去の行為との関係において現在であると見做される場合には、普通の【未完成過去】(Imperf.)が用いられ、別の過去の行為と関係を持たない行為は【完成過去】(Perf.)によって表わされる。

しかし英語では、過去の行為は、それが起こった時が現在の瞬間に関係のない場合、あるいはまたその行為が他の過去の行為と関わりのない場合には、常に【未完成過去】(Imperf.)によって表わされる。一方【完成過去】(Perf.)は、行為の行なわれた時が今だ継続している場合、その一部が、それが語られている時から続いている場合に用いられる。また、ある過去の行為が、行為者あるいは為された事柄の継続的状态によって現在の瞬間と関係している場合にもまた用いられる(以下8例省略)。

No.16. Weiland, P. (1846)

§ 304. *De onvolmaakt verledene tijd*, welke uit het woord zelf gevormd wordt, stelt eene zaak voor, die voorbij is, op den tijd, waarin men spreekt, maar nog duurde, op den tijd waarvan men spreekt ; of, die eene handeling aanduidt, welke nog niet geheel voorbij is, wanneer eene andere begint....

【未完成過去】(=Imperf.)は、人が話をしている時点においては既に過ぎ去っているが、しかし、人によって語られるその時点においてはまだ継続している事柄を表わす。さもなければ、もうひとつ別の行為が始まる時、まだ完全に終了していない行為を表わす。

§ 309. *De volmaakt verledene tijd*, welke door het verledene deelwoord en de hulpwoorden *hebben* en *zijn* omschreven wordt, stelt eene zaak voor als geheel ^(ママ)geëindigd, op den tijd, waarin men spreekt, zonder opzigt op eenigen anderen tijd, of eenige andere handeling...

【完成過去】(=Perf.)は、ある事柄を、人が話をしている時点において完全に終了したものと表わす。そして、他のいかなる時・行為にも関係しない。

NO.17. Maatschappij, *Rudimannta* (1846, p.77)

De eerste betrekkelijke verledene tijd stelt het bestaan of de wijziging voor als tegenwoordig of nog niet geëindigd zijnde in eenen tijd, die voorbij is....

※de verledene tijd の説明なし

【第一関係過去】は、その存在ないしは変化を、「過ぎ去った時における現在」、または過ぎ去った時においてまだ終了していないものとして表わす。

NO.18. Hagoort (1851, p.18)

Vr. Wanneer gebruikt men *den onvolm.verl.tijd*?

Antw. Om eene handeling of werking aan te duiden, welke voorbij op den tijd waarin men spreekt, maar nog voortduurde op den tijd waarvan men spreekt....

Vr. En waaneer *den volm.verl.tijd*?

Antw. Om eene handeling of werking als geheel geëindigd voor te stellen....

問. 【未完成過去】はいつ用いられるか。

答. 我々が話している時には過ぎ去っているが、我々によって語られる時点ではまだ継続している行為または事柄を表わすため。

問. 【完成過去】はいつ用いられるか。

答. 完全に過ぎ去った行為または事柄を表わすため。

NO.19. Brown, G. (1851 ,p.340f.)

The Imperfect tense is that which expresses what *took place, or was occurring*, in time fully past : as, "I saw him yesterday, and hailed him as he was passing."

The Perfect tense is that which expresses what *has taken place*, within some period of time not yet fully past : as, "I have seen him to-day ; something must have detained him."

OBS[ERVATION] 1.—The terms here defined are names usually given to those parts of the verb to which they are in this work applied ; and though some of them are not so strictly appropriate as scientific names ought to be, it is thought inexpedient to change them. In many old grammars, and even in the early editions of Murray, the three past tenses are called the *Preterimperfect, Preterperfect, and Preterpluperfect*. From these names, the term *Preter*, (which is from the Latin preposition *præter*, meaning *beside, beyond, or past*,) has been well dropped for the sake of brevity.*

OBS.2.—The distinctive epithet *Imperfect, or Preterimperfect*, appears to have been much less accurately employed by the explainers of our language, than it was by the Latin grammarians from whom it was borrowed. That tense which passes in our

schools for the Imperfect, (as, I slept, did sleep, or was sleeping,) is in fact, so far as the indicative mood is concerned, more completely past, than that which we call the Perfect. Murray indeed has attempted to show that the name is right ; and, for the sake of consistency, one could wish he had succeeded. But every scholar must observe, that the simple preterit, which is the first form of this tense, and is never found in any other, as often as the sentence is declarative, tells what *happened* within some period of *time fully past*, as *last week, last year* ; whereas the perfect tense is used to express what *has happened* within some period of time *not yet fully past*, as *this week, this year*. As to the completeness of the action, there is no difference ; for what *has been done* to-day, is as completely done, as what *was achieved* a year ago. Hence it is obvious that the term Imperfect has no other applicability to the English tense so called, than what it may have derived from the participle in *ing.* which we use in translating the Latin imperfect tense ; as, *Dormiebam, I was sleeping ; Legebam, I was reading ; Docebam, I was teaching.* And if for this reason the whole English tense, with all its variety of forms in the different moods, “may, with propriety, be denominated *imperfect*” ; surely, the participle itself should be so denominated *a fortiori* : for it always conveys this same idea, of “*action not finished*,” be the tense of its accompanying auxiliary what it may.

*Some grammarians—(among whom are Lowth, Dalton, Cobbett, and Cardell—) recognize only three tenses or “*times*”, of English verb ; namely, *the present, the past, and the future*. A few, like Latham and Child, denying all the compound tenses to be tenses, acknowledge only the first two *the present and the past* ; and these they will have to consist only of the simple or radical verb and the simple preterit. Some others, who acknowledge six tenses, such as are above described, have endeavoured of late to change the name of a majority of them ; though with too little agreement among themselves, as may be seen by the following citations :

(1.) “We have six tenses ; three, the *Present, Past, and Future*, to represent time in a general way ; and three, the *Present Perfect, Past Perfect, and Future Perfect*, to represent the precise time of *finishing* the action.”—*Perley’s Gram.*, 1834, p.25.

(2.) “There are six tenses ; the *present, the past, the present-perfect, the past-perfect, the future, and the future-perfect.*”—*Hiley’s Gram.*, 1840, p.28.

(3.) “There are six Tenses ; the *Present and Present Perfect, the Past and Past Perfect, and the Future and Future Perfect.*”—*Farnum’s Gram.*, 1842, p.34.

(4.) “The names of the tenses will then be, *Present, Present Perfect ; Past, Past Perfect ; Future, Future Perfect.* They are usually named as followed : *Present, Perfect, Imperfect, Pluperfect, Future, Second Future.*”—*N.Butler’s Gram.*, 1845, p.69.

met them.

ontmoette.

De volmaakt verleden tijd duidt niet alleen aan, dat de daad voorbij is, maar geeft tevens te kennen dat het zoo even of zeer onlangs geëindigd is, als :

I have finished my letter.

Ik heb mijnen brjef geëindigd.

I have seen the person, that was

Ik heb den person gezien, die mij

Recommended to me.

aanbevolen was.

...Hieruit blijkt dus, dat de *onvolmaakt verleden* en de *volmaakt verleden tijd* beide eene daad aanduiden, die voorbij is ; met dit onderscheid, dat de eerste eenen tijd opgeeft, die geheel voorbij is—waarvan niets meer overig blijft—terwijl de tijd, dien de tweede aanduidt, nog niet geheel voorbij is, maar nog voortduurt ; ...

[“In general...”の部分の蘭訳なし。その他、省略部の引用の例文も No.31 とは微妙に異なっている]

No.21. Beijer, J.C. (1853)

§ 134. *De eerste betrekkelijk verledene tijd*, ... voorstellende het bestaan of dezelfde wijziging, als tegenwoordig in eenen tijd, die voorbij is....

【第一関係過去】は、…その事柄の存在あるいは変化を「過ぎ去った時における現在」として表わす。

De volstrekt verledene tijd, ... voorstellende het bestaan of de wijziging van hetzelfde, als geheel geëindigd in den tijd, waarin men spreekt....

【孤立過去】は、…その事柄の存在あるいは変化を、それが語られる時点において完全に終了したものとして表わす。

No.22. Backer, H.G. (1853, pp.25-26)

V. Wat beteekent *de onvolmaakt verledene tijd*?

A. De onvolmaakt verledene tijd beteekent, dat eene zaak wel begonnen, maar nog niet geëindigd is....

質問：【未完成過去】は何を意味するか。

答え：【未完成過去】は、ある事柄がすでに始まったが、まだ終了していないことを表わす。

V. Wat geeft *de volmaakt verledene tijd* te kennen ?

A. De volmaakt verledene tijd geeft te kennen, dat de werking, op dien tijd geheel geëindigd is....

質問：【完成過去】は何を意味するか。

答え：【完成過去】は、その行為がこの時点で完全に終了していることを表わす。

No.23. Beijer, J.C. (1854)

§ 291. *De eerste betrekkelijk verledene tijd*, voorstellende het bestaan of de wijziging als tegenwoordig in eenen tijd, die voorbij is....

De volstrekt verledene tijd, voorstellende het bestaan of de wijziging van hetzelfde als geheel geëindigd in den tijd, waarin men spreekt...

【第一関係過去】(=Imperf.)はその状態ないしは変化を「過ぎ去った時における現在」として述べる

ものであるが…【孤立過去】(=Perf.)はその状態ないしは変化を発話時において完全に終了したものと
して述べるものであるが…]

No.24. Weiland, P. (1854)

§ 127. *De onvolmaakt verledene tijd* duidt eene handeling aan, welke wel begonnen, maar niet geëindigd is...

【未完成過去】は、ある行為がすでに始まったが、まだ終了していないことを表わす。

§ 128. *De volmaakt verledene tijd*, stelt eene zaak voor als geheel geëindigd, op den tijd, waarin men spreekt...

【未完成過去】は、ある事柄が、それが語られている時完全に終了したことを表わす。

No.25. Spijkerman, G. (1855)

§ 78. In *den onvolmaakt verledenen tijd* wordt het bestaan en de werking der personen en zaken voorgesteld als voorbij zijnde op den tijd waarin, maar nog plaats hebbende op dien waarvan men spreekt...

【未完成過去】では、人や事柄の状態および行為が、人が話をしているこの時点では過ぎ去っているが、しかし、人によって語られるその時点においてはまだ起こっているということが表わされる。

§ 79. *De volmaakt verledene tijd* stelt het bestaan en den handelingen der onderwerpen voor als geheel geëindigd op den tijd, in welken men spreekt...

【完成過去】は、主語の状態ないしは行為を、人が話をしている時点において完全に終了したものと
して表わす。

No.26. Maas Jr., van der (1855)

§ 216. *De eerste betrekkelijk verleden tijd* is de naam van die vormen der zegwoorden, waarmee iets wordt voorgesteld, als tegenwoordig in eenen tijd, die voorbij is...

【第一関係過去】は、物事が「過ぎ去ったある時点における現在」として表わされる場合の、動詞の形の名称である。

§ 217. *De volstrekt verleden tijd* is de naam van die vormen der zegwoorden, waarmee iets wordt voorgesteld, als geheel geëindigd op den tijd, waarin men spreekt...

【孤立過去】は、物事が、人が話をしている時点において完全に終了したものと
して表わされる場合の、動詞の形の名称である。

No.27. Sandwijk, G. van (1855, p.22)

de onvolmaakt verleden tijd, stelt eene werking voor, die voorbij is, maar tegenwoordig was in den tijd, waarvan men spreekt...

de volmaakt verleden tijd stelt de werking als verleden voor...

【未完成過去】は、過ぎ去ったある行為が、人がそれについて話している時には「現在」であったとい
うことを表わす。

【完成過去】は、その行為を過ぎ去ったものとして表わす。

No.28. Mulder, G.C. (1856)

§ 234. *De betrekkelijk tegenwoordige tijd* kan drierlei beduiding hebben ; ...stelt hij de werking voor als tegenwoordig in het verledene ; *hij was een beminnaar van het buitenleven ; dagelijks deed hij eene groote wandeling* ; als verleden in het tegenwoordige ; *gisteren kwam hij bij mij en verhaalde mij* ; als mogelijk toekomende, wanneer eene voorwaarde uitgedrukt wordt ; *indien hij sprak, zou ik zwijgen*.

【関係現在】は次の三つの意味を持っている。…まずその行為を「過去における現在」として表わす。次に現在において過ぎ去ったものとして表わす。第三に可能な未来として表わす。その場合、ある程度の仮定が表現される。

§ 235. *De verledene tijd* stelt de werking of den toestand voor, als voorbij of geschied zijnde met betrekking tot het tegenwoordige....

【完成時】は、その行為ないしは状態を、過ぎ去ったものとして、あるいは「現在」と関係を持って生じたものとして表わす。

No.29. Kuijper, G. (1856, pp.109-110)

§ 226. b. *De eerste betrekkelijk verleden tijd*, voorstellende het bestaan, of de wijziging daarvan, als tegenwoordig in eenen tijd, dien men zich voorbij denkt....

【第一関係過去】は、その状態ないしはそれに関する叙述を、「過ぎ去った時における現在」として表わす。

c. *de volstrekt verleden tijd*, voorstellende het bestaan, of de wijziging daarvan, als geheel geëindigd op den tijd, waarin men spreekt, buiten betrekking op eenigen anderen tijd of eenige andere handeling....

【孤立過去】は、その状態ないしはそれに関する叙述を、人が話をしている時点において完全に終了したものとして表わす。別の時や行為との関係は持っていない。

No.30. Wees, H.J. van (1857, p.48)

De betrekkelijk tegenwoordige tijd stelt eene werking voor als tegenwoordig in eenen tijd, die reeds voorbij is. (*)

【関係現在】は、ある行為を「すでに過ぎ去っている時における現在」として表わす。

(*) Men heeft dezen tijd ook *onvolmaakt verledenen tijd* genoemd, hetwelk genoegzaam hetzelfde beteekent.

この時制は【未完成過去】とも呼ばれるが、全く同じものを意味する。

De verledene tijd stelt eene werking voor als volkomen geëindigd op den tijd, waarin men spreekt.

《過去時》は、ある行為を、人が話している時点において完全に終了したものと表わす。

No.31. Murray, L. (1861, pp.181ff.)

The Imperfect Tense represents the action or event, either as past and finished, or

as remaining unfinished at a certain time past : as, "They were travelling post when he met them." [例文はこれのみ]

The Perfect Tense not only refers to what is past, but also conveys an allusion to the present time : as, "I have finished my letter" ; "I have seen the person that was recommended to me."

... The perfect tense, and the imperfect tense, both denote a thing that is past, ; but the former denotes it in such a manner that there is still actually remaining some part of the time to slide away, wherein we declare the thing has been done ; whereas the imperfect denotes the thing or action past, in such a manner, that nothing remains of that time in which it was done...

In general, the perfect tense may be applied wherever the action is connected with the present time, by the actual existence, either of the author, or of the work, though it may have been performed many centuries ago ; but if neither the author nor the work now remains, it cannot be used...

No.32. Noel, M. (1862, p.34)

§ 121. *L'imparfait*, qui l'exprime comme présente relativement à une époque passée : *JE LISAIS*, quand vous entrâtes.

Le passé défini, que la marque comme ayant eu lieu dans un temps passé complètement écoulé : *JE VOYAGEAI* l'année dernière.

Le passé indéfini, qui l'exprime comme ayant eu lieu dans un temps passé complètement écoulé ou non : *JAI LU* hier, *JAI ÉCRIT* aujourd' hui.

No.33. Theodor Becker (1864; ; 初版 1833)

§ 18. Die *Mitvergangenheit* (Imperfekt) bezeichnet, daß die Thätigkeit einer andern ebenfalls vergangenen Thätigkeit gleichzeitig war, oder ihr nachfolgte oder voranging.

【共過去】は、その行為が、もうひとつ別の過去の行為と同時に、後か、前かに為されていたということを表わす。

Die *Vergangenheit* (Perfekt) bezeichnet, daß die Thätigkeit schlechtweg vergangen ist.

《過去》は、その行為が完全に過ぎ去ったことを表わす。

No.34. Quackenbos (1867, p.55)

The Indicative Imperfect affirms that an action took place, or a state existed, at some past time ; ...

The Indicative Perfect affirms a past action or state as completed at the present time ; ...

No.35. Pinneo (1869)

What does the First Past Tense denote?

Art.173. The First Past Tense denotes time past, without reference to any particular portion of it ; as, 'He studied', (yesterday, or last week, or many years since), or it represents an action or event as going on at a certain time past ; as, 'He was studying when the bell rang.'

What does the Second Past Tense denotes?

Art. 175. The Second Past Tense denotes a past time completed at the present time ; as, 'I have studied' (that is, at this moment, the studying is done), 'I have written' (at this time the writing is completed).

No.36. Gurke, G.(1870, § 29)

Das Imperfectum oder Präteritum, *die unvollendete Vergangenheit* : *ich sang, ich fiel* (das Ausgesagte dauerte noch fort, während etwas anderes stattfand.)

【未完成】または《過去》、即ち《未完成過去》では… (語られたことは、何か別のことが生起した時にはまだ継続している)。

Das Pefectum oder *die vollendete Gegenwart* : *ich habe gesungen, bin gefallen* (das Ausgesagte ist im Augenblicke des Sprechens eine vollendete Thatsache.)

【完成】または《完成現在》では…、(語られたことは発話時点では完成した事柄である)。

No.37. Adler (1871 ; 序文は 1845)

(1) § 57. In English there are three imperfect tenses, viz : I praised, did praise, and was praising. These three are expressed in German by one *imperfect ich lobte*. It is used to express a past action or event in reference to another, which was either simultaneous with or antecedent to it. It is the historical tense of the Germans, and is always employed in narration, particularly when the narrator was an eye-witness of the action or event. *The perfect tense*, on the contrary, expresses an action or event, as perfectly past and ended, without any reference to another event, and when the narrator was not an eye-witness. In this latter instance the imperfect also may be used, if the narrator accompanies his narrative with any phrase denoting that he does not speak in his own name, as *man sagt* or *sagt man*, they say, it is said, &c. (pp.162f.)

§ 168. The imperfect, the perfect, and the pluperfect correspond on the whole to the tenses of same name in English, with this exception, that when simply a *division of time*, and not another event is referred to, the Germans sometimes employ the perfect, when the English idiom requires the imperfect ; e.g. gestern *sind* Ihre Bücher *angekommen*, yesterday your books *arrived* ; er *ist* letzte Woche *gestorben*, he *died* last week.…) (pp.471f.)

No.38. Brown, G. (1875, p.41)

The Imperfect tense is that which expresses what *took place*, or *was occurring*, in

time fully past : as, "I saw him yesterday ; he was walking out."

The Perfect tense is that which expresses what *has taken place*, within some period of time not yet fully past : as, "I have seen him to-day."

No.39. Swinton, W. (1876, pp.81f.)

"I have walked" is a kind of present. We may say "I have walked a mile to-day" ; but not "I have walked a mile yesterday". It is kind of present tense, with the meaning that at the present time the action stated is completed. This might, therefore, be called *the present completed* ; but in grammar it is usually named the present perfect—"perfect" meaning *perfected*, that is, *completed*.

"The *present perfect*, *past perfect*, and *future perfect* are called compound tenses, because they are made by means of the verb *have*, and *have* is called an auxiliary or helping verb.

No.40. Schäfer, E. (1882 ; 序文は 1850)

(1) § 29. Die *Mitvergangenheit* (das Imperfectum), deren sich der Sprechende bedient, wenn er bezeichnen will, daß mit einer vergangenen Thätigkeit eine andere ebenfalls vergangen sei, mag nun diese zu gleicher Zeit, vor oder nach ihr vergangen sein.

話者が【共過去】を用いるのは、ある過去の行為とともに、もうひとつ別の行為も同じく過ぎ去ったということを表わす場合である。後者の行為が過ぎ去るのは、同時であっても、あるいは前者の先または後であってもよい。

Die *Vergangenheit* (Perfectum), deren sich der Sprechende bedient, wenn er bezeichnen will, daß die Thätigkeit zur Zeit Sprechens schon geschehen ist.

話者が《過去》を用いるのは、その行為が発話時には既に起こってしまったということを示したい場合である。

(2) § 28. Anmerkung 2. Nach der neueren Ansicht der deutschen Sprache wird die verbundene Redeweise oder der Conjunctiv getrennt, indem der Conjunctiv *der dauernden und vollendeten Gegenwart* und Zukunft (also : *Praesens*, *Perfectum*, Futurum I und II), der nur Mögliches enthält, als eigentlicher Conjunctiv (Conjunctiv im engeren Sinne) bezeichnet wird.

注 2. 独逸語の新説に従うと、《接続法》は、継続の現在 (=Präs.)、完成した現在 (Perf.)、第一未来及び第二未来の接続法が可能性のみを有するが故に、本来の接続法 (狭義の接続法) と呼ばれる。

(3) § 28. b. Neuere Ansicht.

1) Wirklichkeitsform [説明省略]

2) Die Redeweise, durch welche der Redende anzeigt, daß eine nicht wirkliche Thätigkeit möglich ist, heißt Möglichkeitsform (modus conjunctives).

z.B.: Der König lebe! Das verhüte der Himmel! Ich hoffe, daß er komme!

現実でない行為が可能であるということを話者が示す時の話法が《可能法》と呼ばれる。例) 国王万歳 (王が長く生きんことを) ! そんなことは真平だ (神がそれを防止し給わんことを) ! 私は彼が来ることを望む。

3) Die Redeweise, durch welche der Sprechende andeutet, daß eine nicht wirkliche Thätigkeit als wirklich angenommen wird, heißt Bedingungsform(modus conditionalis), auch Wunschform(modus optativus).

z.B.: Wenn du fleißig gewesen wärest, würdest du mehr wissen.

現実でない行為を現実であると仮定するということを話者が示す時の話法が《条件法》または《希求法》と呼ばれる。例) 君が一生懸命勉強したならもっと学んだであろうに。

4) Befehlsform(modus imperativus) [説明省略]

NO.41. Lehmann, J. (1883)

§ 78. Die Zeit, welche eine Handlung als mit einer andern geschehen darstellt, heißt Mitvergangenheit (Imperfectum).

Wird die Handlung ohne Beziehung auf eine andere als geschehen darstellt, so nennt man diese Zeit Vergangenheit (Perfectum).

ひとつの行為がもうひとつ別の行為と一緒に起こったということを表わす時制が【共過去】と呼ばれる。その行為が他の行為と無関係に起こったということを表わす場合、この時制は《過去》と呼ばれる。

NO.42. Engelen, A. (1886, II.Theil. 3.Band. § 104)

Das Imperfekt ist die eigentlich Erzählungsform und wird gebraucht, wenn von Vorgängen die Rede ist, welche entweder gleichzeitig oder in ununterbrochener Reihenfolge stattgefunden haben.

Imperf.は本来物語の時制で、同時にか、あるいは中断されない流れの中で生じた出来事の経過が重要な時に用いられる。

Das Perfekt bezeichnet einen Vorgang als gegenwärtig vollendet, dessen Wirkung oder Ergebnis aber auch gegenwärtig besteht.—Nur Imperfekt versetzt sich der Gedanke eigentlich in die Vergangenheit selbst, im Perfekt dagegen auf den Standpunkt der Gegenwart (Die Aussageform des Perfekts ist Präsens).

Perf.は、ある事柄を、現在において完成しているが、その影響なり結果なりが現在もあるものとして表わす。Imperf.の場合はその観念がもともと過去の中にあるのに対し、Perf.は現在の時点にある。

NO.43. Valette, T.G.G. (1913, pp.226-227)

§ 489. It [=the Present Tense] is used instead of the English Perfect Tense when referring to a time not separated from the present.

<i>Hoe lang zijt gij al in Sakken?</i>	<i>How long have you been in Saxony?</i>
<i>Wij wonen al drie jaar in deze straat.</i>	<i>We have lived in this street these three years.</i>

§ 490. The Past Tense is sometimes used even when there is some relation to a past time.

Hij kwam dezen morgen aan.

He arrived this morning.

Hij is van morgen aangekomen.

He has arrived this morning.

Hoe lang was je al van huis?

How long had you been from home?

文法書および参考文献

I. 使用文法書 (年代順)

A. 和 蘭 語

A-1. 著 述 または 翻 訳 蘭 文 典

杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』I～IV (早稲田大学出版部、昭和 51～56) 所収による。※印はそれ以外。この中には和蘭語とともに学ばれた若干の英・仏文典も含まれる。

『解体新書』安永 3 (1774)

1. 大槻玄沢『蘭学階梯』(上・下) 天明 8 (1788) [非蘭文法書]
 - *2. 中野柳圃著『蘭学生前父』(天明・寛政期頃?)
 3. 同 『柳圃先生助詞考』(同)
 4. 同 『柳圃和蘭助辞考』(同)
 5. 同 『柳圃先生文法』(同)
 6. 同 『三種諸格』(同)
 7. 同 『作文必須譯書須知 属文錦囊』(同)
 8. 同 『九品詞名目』(同)
 9. 宇田川玄随『蘭譯弁髦』寛政五年癸丑之冬
 10. 同 『蘭学秘蔵』成立年未詳
- 「寛政異学の禁」寛政 2 (1790)
11. 中野柳圃著『四法諸時対譯』文化 2 (1805)
 12. 馬場貞由著『蘭語首尾接詞考』文化 2 (1805)
 13. 同 『蘭語冠履辞考』文化 2 (1805)
 14. 中野柳圃原著・西正典編『蘭語九品集』文化 4 (1807)
- 「フェートン号事件」文化 5 (1808)
- *15. 藤林普山著『蘭学逕』文化 7 (1810)
 - *16. 本木正栄等訳『和仏蘭対譯語林』文化 12～文政 5 (1815～22)の間
 17. 馬場貞由訳『和蘭文学問答』(別名『西文規範』) 文化 8 (1811)
 18. 野呂天然著『九品詞略』文化 8 (1811)

19. 前野良沢(蘭化)『和蘭点例考』文化9(1812)
- ※20. 本木正栄他編『暗厄利虫語林大成』文化11(1814)
21. 馬場貞由著『和蘭文範摘要』文化11(1814)
22. 江馬元弘筆写『助字要訣』文化11(1814)
23. 馬場貞由編『訂正蘭語九品集』文化11(1814)
24. 吉雄俊蔵(羽栗洋斎)著『六格前編』名古屋、文化11(1814)
25. 宇田川玄真『檢麓韻府』(文化11~12年頃?)
- 『蘭学事始』文化12(1815)
- ※26. 藤林普山訳述『和蘭語法解』 瑤川堂蔵板・水玉堂発行 京都、文化十二乙亥十一月(1815) [序文の日付は文化九年壬申]
27. 馬場貞由著『魯語文法規範』 静嘉堂文庫所蔵、文化13(1816)
28. 馬場貞由著『蘭学梯航』文化13(1816)
29. 大槻玄幹著『蘭学凡』文政7(1824)
30. 吉雄権之助著『和蘭属文錦囊抄』(文化・文政年間?)
- 「シーボルト事件」文政11(1828)
- ※31. 高野長英著『緋卷得師草稿』国会図書館所蔵本 (文政11~12[1828~9]頃?)
32. 小関三英著 文法断片3葉 (文政・天保年間?)
- 「モリソン号事件」「大塩平八郎の乱」天保8(1837)
33. 鶴峰茂申著『洋学翻譯便覧』(天保期頃?)
- 「蛮者の獄」天保10(1839)・「アヘン戦争」天保11(1840)
- ※34. 天文方見習 渋川敬直訳述・藤井 質 訂補『英文鑑』天保11(1840)
35. 伊藤圭介『洋学指針』花繞書屋蔵版 天保庚子(11年)刊行
- ※36. 鶴峰茂申著・河野通尚写『蘭学捷法 上 一名蘭字通補』徴古究理堂蔵 天保12辛巳(1841)
- 「ペリー来港」嘉永6(1853)・「日米和親条約」安政1(1854)
- 「洋学所設置」安政2(1855)
37. 賀寿麻呂大人(宇田川榕庵)著・篤麻呂大人校『蘭学重宝記』全 観自在楼蔵梓 嘉永庚戌(3年・1850)新鑄※
38. 江馬元齡『四格十品弁解』(安政期頃?)
39. 大庭雪斎訳『和蘭文語凡例』(前・後編) 片多哲蔵々梓 安政2(1855)
40. 原 梅南直訳『設卯多幾斯和蘭陀語法』(一、二、三篇) (安政期頃?)
41. 直訳者未詳『和蘭文典』後編 (安政期頃?)
42. 矢野秀和『和蘭文典全編直譯』(安政期頃?)
43. 小原竹堂訳『挿譯俄蘭磨智科』安政3(1856)
44. 可野 亮著『蘭学獨案内』安政3(1856)
45. 香处閑人著『和蘭文典便蒙』安政4(1857)
46. 飯泉士讓著『和蘭文典字類』(前編) 安政4(1857)

47. 高橋重威著『和蘭文典字類』(後編) 安政 5 (1858)
 「安政の大獄」安政 6 (1859)・「桜田門外の変」万延 1 (1860)
- *48. 石橋政方著『英語箋』上・下 自琢斎蔵版 万延 2 (1861)
- *49. 堀 達之助著『英和对譯袖珍辞書』文久 2 (1862)
- *50. 村上英俊著『仏語明要』達理堂 元治 1 (1864)
- *51. 足立梅景編述『英吉利文典字類』慶応 2 (1866)
52. 伊東朴斎著『洋学須知』慶応 2 (1866)
53. 柳川春三著『洋学指針』蘭学部 柳川氏鷄鷄堂蔵、慶応 3 (1867) [成立は安政 4 (1857)]
54. 柳川春三著『洋学指針』英学部(初編) 柳川氏鷄鷄堂蔵、慶応 3 (1867)
 「大政奉還」慶応 3 (1867)
- *55. 村上英俊著『明要附録』達理堂 明治 3 (1870) [仏和辞典]

A-2. 原 典

国会図書館所蔵「江戸幕府旧蔵所洋書」中の蘭文典。※はそれ以外。輸入蘭書には、和蘭語を介して学ばれた若干の英・仏文典も含まれる。

なお、次のような綴りの相違は新旧の正書法の相違である。例) *nederduytsch*(古) : *nederduitsch*(新) ; *konnst*(古) : *kunst*(新) ; *wyze*(古) : *wijze, wijs*(新)

1. Sewel, W. *Groot Woordenboek der Nederduytsche en Engelsche Taalen*, Waarin de rykdom derzelve in 't breede wordt voorgedraagen, de verscheydene betékenissen aangewezen, en de Geslachten van alle Nederduytsche naamwoorden naauwkeuriglyk aangetoond ; met byvoeginge van zeer veele uytgeleezene Spreekwyzen, en een goed getal van Spreekwoorden. t'Amsterdam. 1708.

-----, [表題・副題・出版地同上] *De Vierde Druk*[第四版] volgens des Auteurs eigen Handschrift verbeterden met een groot getal Woorden en Spreekwyzen vermeerderd. 1746.

2. -----, *Volkomen Woordenboek der Nederduitsche en Engelsche Taalen*; Névens eene Spraak-Konst van dezelve, Oorsprongkelyk saamengestéld door WILLEM SEWEL; nu niet alleen overgezien, en meer als de helft vermeerderd; maar ook naar de hedendaagsche Spelling, in allen opzichten vérbétert, door EGBERT BUYS, Hofraad van hunne Poolsche en Pruissische Majesteiten, &c. Tweede Deel. ;

A Compleat Dictionary Dutch and English, To which is added a Grammar, for both Languages. Originally compiled by WILLIAM SEWEL; But now, not only reviewed, and more than the half part augmented, yet according to the modern spelling, entirely

improved ; by EGBERT BUYS, Counsellor of their Polish and Prussian Majesties, &c. The Second Volume. Te Amsterdam, 1766.

この2辞書中に、次の蘭文典と英文典が含まれている。

A) *Beknopte] Vertoog wegens de Engelsche Spraakkunst*. [1766版では *Beknopt* なし]

B) *A Brief and Compendious Dutch Grammar*.

3. Marin, P. *Nouvelle Methode pour prendre les Principes & l'Usage des langues Françoise et Hollandoise. / Nieuwe Fransche en Nederduytsche Spraakwyze, Vermeerderd met een uitvoerige Syntaxis of Woorden-schikking*. De laatste druk. Te Amsterdam. 1790.

4. Locke, W. *Spiegel der Engelsche Taal, of des Students Wegwyzer*. Handelende over de Maatklank, de Spraak-Kunde, de Woordvoeging, het Lezen, de Welsprekendheid, het Kunstmatig lezen. Moeilyk uittesphekene Woorden. De Letterkunde, de Geschiedenis, de Koophandel, de Kunsten en Wetenschappen, de Verkeering, de Land-Spraak, enz. enz. Rotterdam. 1801.

5. Weiland, P. *Beginnelsen der Nederduitsche Spraakkunst*. Principes de la Langue Batave, traduits en françois par J. van BEMMELEN, Maitre de Pension Leide. Amsterdam, MDCCCVI(1806).

6. Pyl, R. van der. *A practical grammar of the Dutch language, containing : an explanation of the different parts of speech ; all the rules of syntax, and a great number of practical exercises*. Rotterdam, 1819.

※7. 『和蘭文典 前編』作州箕作氏蔵板、天保十三年壬寅九月稟准刊行

[原本 : Maatschappij : Tut Nut van 't Algemeen. *Grammatica of Nederduitsche Spraakkunst*. Tweede Druk. Te Leiden, Deventer en Groningen, MDCCCXXII(1822)の翻刻版]

8. Bilderdijk, W. *Nederduitsche Spraakleer*. In's Gravenhage, MDCCCXXVI(1826).

9. Lulofs, B. H. *Over Nederduitsche Spraakkunst, Stijl en Letterkennis*. te Groningen, 1831.

10. Wilde, J. C. *Beginnelsen der Nederduitsche Spraakkunst, Voor de Scholen*. Tweede Druk. Te Dordrecht. 1836.

11. 窩窩所徳温實学校利用『和蘭語学原始』紀元千八百四十四年刊

[原本 : *Eerste beginselen der Nederduitsche Spraakkunst ter dienste der Scholen in Nederlandsche oost-indi*. Samarang, 1844.の翻刻版]

12. Hamelberg, H. A. *Beknopte Engelsche Spraakkunst*, bevattende de Hoofdregelen der Engelsche Taal, opgehelderd door voorbeelden en gevolgd van een aantal opstellen ter toepassing in het Engelsch en Nederduitsch. Te Dordrecht, 1845.

13. Bomhoff, D. ; Zoon, H. *Vollständiges deutsch=holländisches und holländisch=*

deutsches Taschenwörterbuch, nach den besten Quellen. Leyden. 刊年不明 [序文の日付 : Zutphen, 20. October 1846]

14. Maatschappij : Tut Nut van 't Algemeen. *Rudimenta of Gronden der Nederduitsche Taal.* 1.Stukje.(over de Woordgronding.) Vijfde Uitgave. Te Leyden en Deventer, 1846.

15. Weiland, P. *Nederduitsche Spraakkunst.* Uitgegeven in naam en op last van het Staatsbestuur der Bataafsche Republiek. Nieuwe door den auteur zelven overziene en verbeterde druk. Te Dordrecht, 1846.

16. Hagoort, A. *Eerste Gronden der Nederduitsche Taal,* ten dienste der scholen. Zevende, herziene druk. Te Amsterdam, 1851.

17. Marin, P. *Méthode familière pour ceux qui commencent à s'exercer dans la langue Française ; Gemeenzame Leerwijze voor degenen, die zich in de Fransche Taal beginnen te oefenen.* Laatstelijk nagezien door D.BOMHOFF, HZ. Negende verbeterde Druk. Arnhem, 1851.

18. Murray, L. *Engelsche Spraakkunst.* Met toepasselijke opstellen ter vertaling. Ten dienste der scholen en dergenen, die de Engelsche taal, op eene spoedige wijze, grondig willen leeren. Zesde Druk, nagezien en verbeterd door F. M. COWAN, Lector aan het Gymnasium te Amsterdam. Zalt-Bommel. 1852.

19. Backer, H. G. *Beknopte Schets van de gronden der Nederlandsche Taal, in vragen en antwoorden, ten dienste der lagele scholen.* Tweede, vermeerderde en verbeterde uitgave. Tiel. 刊年不明 [序文の日付 : den 27.April,1853]

20. Beijer, C. J. *Beknopte Handleiding tot den Nederlandschen Stijl,* of Aanwijzing ter vervaardiging van allerlei soort van schriftelijke opstellen ; ten dienste van Nederlanders. Derde Druk. Te Rotterdam, 1853.

21. Brill, W. G. *Nederlandsche Spraakleer,* ten gebruike bij het onderwijs in de lagere scholen. Leyden. 1853.

*22. 『英吉利文典』美作 宇田川氏蔵梓 ⁽¹⁸⁵⁷⁾ 安政四年丁巳新鐫

[原本 : *Engelsche Spraakkunst,* vereenvoudigd en tot een-en-twintig lesson gebragt door VERGANI, omgewerkt voor de Hollandsche scholen, door Olivier, Joh. Tweede uitgave. Amsterdam, 1853.]

23. Beek, J.van der. *Handleiding ter Beoefening der Engelsche Taal ten gebruike der Scholen en Zelfoefenaars* ingerigt door J. VAN DER BEEK, Onderwijzer te Dussen en voor het Engelsch onder medewerking van F. M. COWAN, Lector aan het Gymnasium te Amsterdam. Eerste Afdeeling : *Spraakkunst.* Tweede Druk. Utrecht, 1854.

24. Beijer, C. J. *Beknopte Handleiding tot den Nederlandschen Stijl,* of volledige

aanwijzing ter vervaardiging van schriftelijke opstellen voor Nederlanders, zoo in het algemeen als in beroepsbetrekkingen, en gegrond op de redeneerkunde. Vijfde druk. Te Rotterdam. 1854. [No. 20 とは別書]

25. Pijl, van der ; Schuld, H. L. *VAN DER PIJL'S Gemeenzame Leerwijs*, voor degenen, die de engelsche taal beginnen te leeren. het engelsch haar den geroemden WALKER, en het nederduitsch haar de heeren WEILAND en SIEGENBEEK. Negende en veel verbeterde uitgave, door H. L. Schuld. te Dordrecht, 1854.

26. Weiland, P. *Nederduitsche Spraakkunst ten dienste der scholen*. Te Dordrecht, 1854.

27. Gerdes, F. *Nieuwe Leerwijze der Engelsche Taal*. Eerste Cursus. Amsterdam, 1855.

28. Lloyd, H. E. *Nieuwe Engelsche Spraakkunst*. Naar den negenden druk voor Nederlanders bewerkt door D. BOMHOFF, Hzn. Herzien door Dr. M. P. LINDO, Leeraar der eerste klasse bij de Koninklijke Akademie voor de Zee- en Landmagd. Vijfde Druk. Te Arnhem, 1855.

29. Maas Jr., J. P. van der. *Nederlandsche Spraakkunst*, bevattende : 1.Zinsontleding. 2.Woordgronding. 3.Spelling en Uitspraak. 4.Woordvoeging. 5.Zinscheiding. Amsterdam, 1855.

30. Sandwijk, G. van. *Beknopte Nederlandsche Spraakkunst*. Inhoud : I . Nederlandsche Spraakkunst. II . Redeneerkundige Beschouwing. III . Woordgronding. IV . Woordvoeging. V . Spelkunst. VI . Punctuatie. VII . Titels en Opschriften. VIII . Uitspraakleer. Een lees- en leerboek voor de jungd. Te Purmerende, 1855.

31. Spijkerman, G. *Schets van de Nederduitsche Spraakkunst*, geschikt tot Geheugen-oefeningen. Te Zwolle, 1855.

32. Kuijper, G. *Beginzelen Nederlandsche Spraakleer voor schoolgebruik*. Vijfde Druk. Te Utrecht, 1856.

33. Mulder, G. C. *Nederlandsche Spraakkunst voor Schoolgebruik*. Te Arnhem, 1856.

34. Wees, J. H. van. *Kleine Beoefenende Nederlandsche Spraakkunst voor eerst-beginnenden*. Zesde Druk. Te Brede, 1857.

35. Murray, L. *English Grammar*, adapted to the different classes of learners ; with An Appendix containing rules and observations, for assisting the more advanced students to write with perspicuity and accuracy BY LINDLEY MURRAY. London, 1861.

36. Noel, M., et Chapsel, M. *Nouvelle Grammaire Française*, sur un plan très méthodique, avec de nombreux exercices d'orthographe, de syntaxe et de ponctuation. Cinquantième edition. Paris, 1862.

37. Quackenbos, G. P. *First Book in English Grammar*. New York, 1867.

*38. 江戸版『英吉利文典』The Elementary Catechisms. English Grammar. 6.edition. At YEDO. 1867

*39. Valette, T. G.G. *Kleine Niederländische Sprachlehre für den Gebrauch in Schulen und zum Selbstunterricht*. Dritte durchgesehene Auflage. Heidelberg, 1907.

*40. Valette, T. G. G. *Dutch-Conversation Crammar*. London/ Heidelberg, 1913.

B. 英語(含仏文典)

B-1. 著述または翻訳英文典

★江戸時代

1. 『諸厄利亜語林大成』叙・凡例・尾、本木正栄、文化 11(1814) [「長崎原本『諸厄利亜興学小筈』『諸厄利亜語林大成』研究と解説」日本英学資料刊行会、大修館書店、1982所収]
2. 『和蘭語法解』^{オランダごほうげ} 平安 普山藤林先生訳述、瑤川堂蔵板・水玉堂発行、文化 12(1815) [国会図書館所蔵] (題名は蘭文典であるが、その内容は英語の文法書か)
3. 『英文鑑』^{かがみ} (上・下編) 江戸天文方見習 渋川敬直訳、天保 11~12(1840~41) [杉本つとむ編著『英文鑑——資料と研究』(ひつじ書房、1993)所収]
4. 『英吉利文典字類』足立梅景編述、慶応 2 (1866) [『日本の英学 100 年 明治編』(研究社、1986、264-267 頁)所収]
5. 『英吉利単語篇』開成所、慶応二年刊 [中表紙: *Book for Instruction at the school Kaiseizio in Yedo. Vol. I. First edition. Yedo. Anno 2. Kei-ou.*]
6. 『英語箋』石橋政方著、自琢斎蔵版、萬延辛酉蔵刻
7. 『洋学指針 英学部』柳川春三著、柳川氏鷄鶴堂蔵、慶応 3 (1867) [杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』(早稲田大学出版部、昭和 52、1283-1291 頁) 所収]

★明治 1 ~ 9 (1868~1876)年

8. 『格賢勃斯英文典直譯』大学南校助教訳、大学南校開版、明治 3 年庚午初夏
9. 『佛語自在』橋爪貫一編輯、誠之堂蔵版、明治三庚午初秋七月
10. 『英学楷梯』 [中表紙の題名は『洋学楷梯』] 松岡 啓著、好問堂、明治 4 年辛未仲秋 [No. 17 と同内容]
11. 『英文典獨学』(初號・二號) 格賢勃斯氏著・戸田忠厚訳、戸田氏蔵、明治 4 辛未 12 月
12. 『洋学指針』英学部二編 柴田清熙撰・蔵、大和屋喜兵衛発兌、明治 4 年辛未 12 月
13. 『法語階梯挿譯』明治四年歳辛未冬日朝眠懶生記 [仏蘭西語]
14. 『洋学指針』佛学部 全一冊 戸澤光徳刊、東京 戸澤氏蔵、明治壬申(5 年)初春上梓

15. 『ピ子ヲ氏著挿譯英文典』(初編) 惣 榎木寛則訳、雄風館蔵梓、明治5年壬申春二月刻
16. 『英語通』(初編) 金沢学校、明治5
17. 『英学教授』(全) 亜遊居人著、東京書林 弘成堂梓、明治5 壬申歳孟秋 [No. 10 と同内容]
18. 『英語学捷徑』(全) 官許 惣 佐藤氏蔵版、明治5 壬申暮春
19. 『英学必携』(上・下) 山田正精訳、東京 玉山堂発兌、明治5年壬申歳新雕
20. 『ピ子ヲ氏通俗英文典』 訳者不詳、文泉堂蔵梓、官許 明治壬申初夏
21. 『英話初歩』(全) 堀江景宣著、東京書肆 翰林堂発兌、明治6年10月
22. 『英学新式』海軍兵学寮、出版年不明 [だが 明治初年頃と推定される]
23. 『格賢勃斯英文典挿譯』(初編) 桂潭・島 一徳訳、篠筵蔵版/ 小林喜右エ門・鈴木喜右門発兌、出版年不明 [だが 明治初年頃と推定される]
24. 『語学獨案内』(初編・二編・三編) 英国砲隊士官ブリンクリ氏著、日就社、明治8 [初編欠本] [No. 67、70 と同内容]

★明治10～19(1877～1886)年

25. 『英語變格一覽』全二冊 日本海軍兵学校教師 英国人 王堂チャムブレン氏編述、一貫堂発兌、版權免許明治12年4月
26. 『克屈文典直譯』(上・下) 英人コックス氏著・東京府平民 都筑直吉訳、丸善蔵版 明治16.1
27. 『ピネヲ氏文典獨学字書』今津厚自 校閲・岐阜縣士族 清水房之助訳、土屋忠兵衛、明治16.5
28. 『ピネヲ氏原書英文典獨案内』 英国ピネヲ氏原著・日本 東京府平民 渡辺五一郎 直訳、東京書肆 東生氏蔵、明治16.11 [No. 20 と同内容]
29. 『英語獨学便法』愛媛縣士族 片山正行著、博聞社蔵版、明治16
30. 『英国文典獨案内』(全) クワケンボス氏著・新潟縣士族 垣上 緑挿訳、嘯山書房蔵版、明治17.8
31. 『ブラウン氏英文典直譯』中西 範訳、二書房(開新堂・三省堂)蔵版、明治17.8
32. 『文典和解 英文指針』 広島縣士族 田原 栄著述、大平俊章・江草斧太郎刊・梅原蔵版、明治17.10
33. 『スウキントン氏英語学新式直譯』宮城縣 斎藤秀三郎訳、十字屋錠太郎・日新堂、明治17.12
34. 『英学五書獨案内』大阪府平民 外川秀次郎編纂、大阪同志出版舎蔵版、明治18.6
35. 『無類捷徑英学童子解』(初編) 惣 青木輔清編述、同盟舎・梅原発兌、明治18.6 [二編：明治19年3月 (No. 47)]
36. 『懷中英語獨稽古』英人チョークエー氏原著・日本 東京府平民 斎田良治先生訳、

大阪 共同出版舎蔵版、明治 18.7

37. 『英学入門』 東京府平民 宮本興晃編、東京 銀盤小窓蔵版・仙鶴堂、小林喜右衛門発兌、明治 18.8
38. 『新撰獨学英語自在』(全) 埼玉縣士族 安部信恭編輯、東京 薫志堂蔵版、明治 18.9
39. 『袖珍英和獨案内』 渡辺 遂編輯、辻本尚書堂、明治 18.9
40. 『英語訓蒙』 東京府平民 工藤精一著、阪上汎愛堂発兌、明治 18.10
41. 『クワッケンボス氏英文典獨案内』 米国博士レーエッチ、グァリー、氏校訂・日本 東京府士族 高宮直太挿訳、榊原友吉出版、明治 18.11
42. 『英学入門』 宮城縣平民 梅原栄造編輯、梅園堂蔵・楽善堂発兌、明治 18.12
43. 『英文手引草』 英国学士エー・シー・シヨウ氏訂正・日本 静岡 島田奚疑著述、明治 18 [佐藤良雄「動詞過去の用語に関する研究」『日本大学創立七十年記念論文集』第一巻・人文科学編、1960、783 頁]
44. 『外交必用正則英語獨学』 静岡縣士族 勝岡信三郎編纂、大東館 牧野善兵衛出版 明治 19.1
45. 『英和獨稽古』 東京府平民 石井秀胤編輯、松澤庄治郎出版、明治 19.1
46. 『英学早稽古』 大阪府平民 飯田駒吉編輯、大阪 梅原市松出版、明治 19.2 [No. 54, No. 56 と同内容]
47. 『無類捷徑英学童子解』(二編) 忍 青木輔清編述、同盟舎 梅原発兌、明治 19.3 [初編：明治 18 年 6 月 (No. 35)]
48. 『英語獨学軌範』(全) 山口松五郎訳、東京 旭昇堂蔵版、明治 19.3
49. 『英語学自在』 伴松 琴先生閱・芝田新兵衛編輯、京都 今川内改進黨蔵、明治 19.4
50. 『鼈頭挿画 正則英語獨稽古』 和歌山縣士族 鈴木政男編纂、大阪 田中宋栄堂蔵版、明治 19.5
51. 『ブラウン氏英文典文法詳解獨案内』 大阪府平民 近藤堅三訳出、大阪 同志出版社蔵版、明治 19.5
52. 『ピネヲ氏英文典獨稽古』 英国 エドワード ホーゲン氏校訂・新潟縣平民 伊藤一郎訳、大阪府平民 梅原氏蔵版、明治 19.5
53. 『ピネヲ氏英文典獨学』(全) 愛媛縣平民 玉井靖三郎訳、伊藤誠之堂、明治 19.5
54. 『英学早稽古』 三重縣平民 伊藤末吉 翻刻出版、大阪 梅原市松出版、明治 19.8 [No. 46, No. 55 と同内容]
55. 『万民必携英学自在』(全) 東京府平民 岡本 信抄訳、東京 金松堂蔵、明治 19.9
56. 『英学早稽古』 瀬山佐吉 翻刻出版、大阪 梅原市松出版、明治 19.11 [No. 46, No. 54 と同内容]
57. 『ピネヲ氏英文典獨案内』 東京府士族 萩原孫三郎訳、神戸甲子二郎発兌、明治 19.7
58. 『文法詳解ブラウン氏英文典釈義』 米国ゴールドブラウン原著・日本 澤田重遠義訳、大東館蔵版、明治 19.10 [No. 104 と同内容]

59. 『ブラウン氏英文典直譯』(全) 東京府士族 記音学士 源綱紀訳述、京都府平民 的場文林堂蔵版、明治 19.10
60. 『クワツケンボス氏英文典直譯』東京府平民 栗野忠雄訳、開成堂、明治 19.10
61. 『文法詳解ピネヲ氏英文典^{ひんわ}獨案内』大阪府平民 生駒蕃訳述、積善館、明治 19.11
62. 『英学入門^{ひんがく}獨案内』東京府士族 仁科静太郎編、東京 仙鶴堂版、明治 19.11
63. 『正則英語自在』大阪府平民 青木富士編輯・出版、青木嵩山堂、明治 19.11
64. 『新撰英語自在』(第二版) 東京府平民 永田義原編輯、瀬山佐吉出版、明治 19.11
65. 『英語自由自在』兵庫縣平民 合田常吉編輯、大阪 明昇堂書房 明治 19.12
66. 『改訂増補英和語学獨案内』(第四版) 井上蘇吉・早矢仕民治編輯、丸善商社書店・叢書閣發兌、明治 19.12 [初版: 明治 14.11]
67. 『語学^{ごがく}獨案内』(1,2,3 卷) 英国砲隊士官ブリンクリ氏著、文学社版・翻刻出版人 滋賀縣士族 門野久太郎、明治 19 [No. 24, No. 70 と同内容]
68. 『ブロフン氏英吉利文典講義』(前・後編) 米国グールドブロフン氏原著、日本 織田純一郎先生校閲・長崎縣平民 長野一枝先生講義、日本 大阪府平民 吉岡氏蔵版、明治 19~20

★明治 20~29 (1887~1896)年

69. 『和解纂註 英文規範』(完) 島田奚疑著、篠崎才助・神戸甲子二郎刊、明治 20.3
70. 『語学^{ごがく}獨案内』(上・中・下) 英国砲隊士官ブリンクリ氏著、岩田錠太郎・石川貴和・加藤鎮吉 版、明治 20.3 [No. 24, No. 67 と同内容]
71. 『文典之鍵』兵庫縣士族 塙房次郎著、秀英舎、明治 20.5
72. 『英学三書^{ひんがく}獨案内』大阪府平民 佐藤為三郎編輯、山村藜光堂出版、明治 20.5
73. 『スウキンソン氏英文典直譯』東京府士族 蘆田束雄訳、東京 合書堂刊行、明治 20.5
74. 『正則英語活用全書』富松佶郎纂訳、大阪 西野文栄閣蔵、明治 20.5
75. 『新撰英語通解』網島亀吉編輯兼出版、島鮮堂、明治 20.5
76. 『新撰獨学英语通解』網島亀吉編輯兼出版、島鮮堂、明治 20.5 [No. 75 とは別書]
77. 『容易獨修英文典直譯』米国ブラウン氏著・日本 東京府士族 戸代光大氏訳、東京 大倉書房發兌、明治 20.6
78. 『警官必携英語学』法学士 片山清太郎著・片貝正晋訳解、東京 博聞社蔵版、明治 20.6
79. 『英和对譯懐中英学^{ひんがく}獨案内』英国ノアウエブスタア著・日本 大阪府平民 外川秀次郎訳述、柏原書屋梓、明治 20.7
80. 『ゾンメール氏佛文典直譯』茨城縣平民 平山直道訳、丸善商社書店、明治 20.7
81. 『容易獨修スウキンソン氏英文典直譯』京都府士族 大島国千代訳、東京書林 金刺氏發兌、明治 20.7
81. 『英語学大全』京都府平民 織田順一郎著・大阪府平民 鹿田静七出版、明治 20.7
82. 『ピネヲ氏英文典直譯』東京府平民 栗野忠雄訳述、東京 日新館、明治 20.8
83. 『獨学英语初歩』東京府平民 木内文友編輯、金寿堂、明治 20.9

84. 『スウキントン氏英文典直譯』(全) 東京府平民 栗野忠雄訳述、東京 日新館蔵版、明治 20.9
85. 『ディクソン英文典直譯』群馬県士族 佐野友三郎訳、攻玉社蔵版、明治 20.9
86. 『正則挿譯ピ子ヲ氏英文典^{ひと}獨案内』広島県平民 佐藤雄治訳述、吉岡氏蔵版、明治 20.10
87. 『ソンメル氏佛文典獨学』中村秀穂訳、同盟出版、明治 20.10
88. 『イングリッシ文法主眼』石川縣士族 清水正吾著、第三高等学校教諭 マスターオブアーツ正七位 田村先生 序、大阪 貳書房出版、明治 20.10
89. 『英語入門』西村正三郎著、普及舎蔵版 明治 20.2[初版]；20.9[訂正三版]；20.10 [訂正四版]
90. 『クワツケンボス氏英文典直譯』岡山縣平民 水澤 郁先生訳、大阪 訳書出版書房、明治 20.11
91. 『英語玉手箱』東京府士族 島田 豊編集、東京 玉顔堂発兌、明治 20.11
92. 『正則英語獨学自在』和歌山縣士族 鈴木政男編集、大阪 田中宋栄堂出版、明治 20.11
93. 『明治新撰英語獨学』能勢幸次郎編輯、東京 礪川堂書店、明治 20.11
94. 『新撰英語早学』東京府士族 吉澤富太郎編輯・出版、開文堂、明治 20.11
95. 『クワッケンボス氏英文典直譯』(全) 大阪府平民 山本栄太郎訳述、東京 飯塚栄太郎校閲、大阪 大辻文盛堂出版、明治 20.12
96. 『スウ井ントン氏英文典直譯』東京府平民 斎藤桂堂(八郎)訳、松成堂、明治 20.12
97. 『スウ井ントン氏英文典直譯』日本英文学会々長 清水泰次郎君序、日本 岡山縣平民 太田次郎譯述、京都 文港堂発兌、明治 21.1
98. 『英学獨修指針』島田奚疑先生 序文、群馬縣平民 生方織衛著述、東京 玉顔堂、明治 21.2
99. 『クアッケンボス氏英文典^{ひと}獨案内』(全) 大阪府平民 外川秀次郎訳、大阪 三書房(岡本仙助・岡島幸次郎・北島長吉) 蔵、明治 21.3
100. 『六月卒業英学自在』(全) 独逸国「オルレンドルフ」氏著・日本 紅林員方訳、東京 中近堂蔵版、明治 21.4
101. 『スキントン氏ニューランゲージレッスンズ直譯』[中表紙:『英語学新式直譯』] 愛知縣士族 石川録太郎訳、東京 同盟出版書肆、明治 21.5
102. 『正則活用英語獨学大全』大阪 東條種家著、大阪 吉岡宝文堂、明治 21.6
103. 『正則英語獨学自在』和歌山縣士族 鈴木政男編輯、大阪 田中宋栄堂、明治 21.6
104. 『文法詳解英文典講義』米国ブラウン氏著・日本 別所富貴訳述、大阪 岡本書房、明治 21.6 [No. 58 と同内容]
105. 『スウキントン氏英文典直譯』(全) 伴野乙弥訳、東京 松井氏蔵版、明治 21.8
106. 『クワツケンボス氏小文典^{ひと}獨案内』牛山良助先生校閲、梅木正衛先生直訳、東京 富山堂蔵版、明治 21.8

107. 『スウ井ントン氏英文典^{ひとり}獨案内』 浅野儀三郎訳、東京 小川尚榮堂蔵、明治 21.9
108. 『スウキントン氏英文典直譯』 岡山縣士族 渡辺松茂訳述、大阪 積善館、明治 21.9
109. 『すういんとん小文典獨学自在』 鈴木重陽校閲・秋田縣士族 桜田源治訳述、東京 林平治郎刊 明治 21.9
110. 『須因頓氏大文典解釈』 東京 田中達三郎訳述、東京 同盟書輯、明治 21.10
111. 『英学獨修指針』 島田奚疑先生序文、群馬縣平民 生方織生著述、東京 玉顔堂発行、明治 22.3.
112. 『和譯小英小文典』(完) 長崎 柴田先生校閲、巖原 長崎縣士族 賀島尚太郎訳述、翠柳堂、明治 22.9
113. 『須因頓氏大文典講義』 京都 平井廣五郎訳述、平井金三校閲、西京 文港堂、明治 22.12
114. 『原書全譯スウキントン氏英文典直譯講義』 岡山縣士族 渡辺松茂訳述、大阪書房 積善館、明治 23.1
115. 『スウキントン英文典^{ひとり}獨案内』 奚疑・島田豊訳、東京 大倉書店、明治 23.2
116. 『容易獨修スウ井ントン氏英文典直譯講義』 川田駕洋(泰之助)訳述、西川常盤 閱、京都書肆 文港堂發兌、明治 23.7
117. 『須因頓氏小英文典講義』(3卷) 佐久間 正校閲、福井縣 湯浅藤一郎・関 秀雄合著、大阪 宝文館、卷之一：明治 24.6/卷之二：明治 24.8/卷之三：明治 25.2
118. 『斯因頓大文典講義』(上・下) 福井縣 山形 閑訳補、上卷：京都 田中治兵衛刊、明治 27.7(訂正第3版)[初版：明治 22.7]/下卷：福井 品川太右衛門刊、明治 24.9(初版)
119. 『英文法講義』(完) 斎藤平治著、東京 有明堂、明治 24.12
120. 『簡明英文典』 松田晋齋編纂、ミュージアム会、明治 25.3 [全英文]
121. 『英語教授書』(第一・第二卷) 和歌山縣士族 陸軍教授 寄山元吉編述、寄山蔵梓、明治 26.6
122. 『英文典』 バジル・ホール・チャムブレン著、共益商社書店、明治 26.9
123. 『初等英文典』 菅沼岩蔵著、三省堂、明治 27.2 [訂正再版：明治 27.5/ 三版：明治 28.1]
124. 『教科書獨修用新英語学』 内村達三郎編、警醒社書店蔵版、明治 27.3 [原書はヨット・ルンゲ二氏合著 *Kleine Englische Sprachlehre* (緒言より)]
125. 『英文法学』(上卷) 井上歌郎訳述、第一高等中学校教授 松田為常・篠野乙次郎校訂、松成堂、明治 27.5
126. 『実験英文典教科書』 松木正雄著、金港堂、明治 27.5
127. 『英文法詳解』(スウ井ントン氏) 成^(文字)□ 学校講師 酒卷貞一郎・士官学校教官 金子量太合著、三河屋書店、明治 28.8
128. 『英文法教科書』 共益商社著・蔵版、明治 29.6
129. 『英語初歩教授書』(全) 和歌山縣士族 陸軍教授 寄山元吉編述、寄山蔵梓、明治 29.10 [C-1. No. 31 の独文典有]
130. 『新式英文典教科書』 松嶋 剛・長谷川哲治合著、東京 春陽堂発行、明治 29.11

131. 『英文典問答』(全) 富山房編輯所編纂・蔵版、明治 29

★明治 30～39(1897～1906)年

132. 『英語学捷徑』(バター氏) 清水利忠訳、村上書店、明治 30.1
133. 『スーイントン小文典直譯意解』元木貞雄訳、東京書肆 榊原文盛堂、明治 30.4
134. 『新式英文法規範』中村宗次郎著、東京英語学会、明治 30.6 [C-1. No.39, 45, 72, 73
の独文典有]
135. 『英文法神髓』酒卷貞一郎著、三河屋書店、明治 30.12
136. 『新式実用英文法講義』井上歌郎著、後凋閣、明治 31.4
137. 『英語学大全』(前・後編) 松島 剛・星野久成共編、春陽堂、明治 31.10
138. 『邦語英文典』畔柳都太郎編著、博文館蔵版、明治 31.10
139. 『邦文英文法精義』宮井安吉著、東京 松栄堂、明治 31.10
140. 『邦文英文典』(全) 文学士 嶋 文次郎補訳、富山房、明治 31.11(再版) [初版：明治
31.4]
141. 『通俗英語案内』(通俗百科全書第十編) 石川辰之助編、博文館蔵版、明治 31.12
142. 『中等英文典』井上十吉著、東京 成美堂、明治 31
143. 『新編中等英文典』(前・後編) 中原貞七訳、東京 三河屋書店、明治 31
144. 『英文典教科書』東京帝国大学文科大学名誉教師 英国 王堂シャムブレン著、
大阪 三木書店、明治 32.1
145. 『教科摘要新式英語学獨修』一名 六ヶ月間達成 松島 剛先生校閲、星野久成論、富士
書房、明治 32.6
146. 『正則英語三カ月卒業書』第一高等学校教授 文学士 杉敏之介君閲序、山口縣尋常中
学校教諭 井上歌郎君著、東京英語学会蔵版、明治 32.7
147. 『邦文涅氏英文典』文学士 内海弘蔵訳述、成美堂、明治 32.8
148. 『英学初歩』佐藤由三郎編纂、東京図書出版合資会社蔵版、明治 32.9
149. 『英学者必携』橋本芳蔵編・発行、武蔵屋・四海堂、明治 32.10
150. 『意解挿入ねすふいーると英文典第貳^{ひつ}獨案内』附練習解答 栗野忠雄訳述、東京 青
野文魁堂、明治 33.2
151. 『子スフィールド氏第二英文典講義』鶴田久作講述、鐘美堂・渡辺書店、明治 33.3
152. 『ねすふいーると英文典第三卷講義』(4卷) 文学士 高山栄一 序、喜内芳樹訳述、
金刺氏発兌、上・中巻 欠/下巻：明治 33.3/続篇：明治 34.3
153. 中学校・高等小学校英語教科書用『新案教科書 英語教授初歩』山本良吉編、大阪 積
善館 明治 33.4
154. 『英語全科卒業書』船越守中著述、大阪 矢島誠進堂発行、明治 33.4
155. 『ネスフ井ルド氏英文典卷式直譯註解』高橋五郎校正・福岡市博多 畦田 到訳述、
大阪 積善館、明治 33.8

156. 『英文法初歩』 斎藤秀三郎著、東京 興文社、明治 33.11
157. 『子スフィールド氏第三英文典講義録』(4巻) 東京英語専修学校教師 奈倉次郎訳述、上原書店蔵版、vol. I : 欠/vol. II : 明治 33.8/vol. III : 明治 33.11/vol. IV : 明治 34.12
158. 『文法大意』(全) 松島 剛口述・東京通信学院筆記、学窓餘談社改称東京通信学院発行、明治 34.1
159. 『新編英文典問答』 仁木左右吉編、大阪 又間精華堂、明治 34.3
160. 『子スフィールド氏第二英文典直譯注釈』 奈倉次郎・葛西又次郎共訳、上原書店蔵版、明治 34.6
161. 『英語入門』 河嶋敬蔵著述、大阪 浜本明昇堂、明治 34.9
162. 『英語^{ひょうご}獨案内』 附西洋料理法 和歌山縣平民 筋師千代市著・刊、明治 34.12
163. 『最簡最易英語新法』(2巻) 三原好太郎著述、丸善、明治 34.9
164. 『英文典術語集』 大阪府師範学校教諭 松原秀成著、宝文館、明治 35.4
165. 『英語提要』 バチェラル、オフ、レターズ岡島金彌著、田沼書店、明治 35.8
166. 『英文法講義』(全) 西川 巖先生講述、大日本普通学講習会蔵版、明治 37.5
167. 『英語獨修自在』 酒谷三郎編、大阪 岡本偉業館、明治 37.10
168. 『文法会話作文 英語新編』(前・後篇) 海軍教授 季花山莊著、警醒社書店發兌、明治 37.11
169. 『英語早学』 井上善之介編輯、京都 中村淺吉發刊、明治 38.6
170. 『英語^{ひょうご}獨案内』 綴字発音及文法初歩 渡辺修二郎撰、内外出版協會、明治 39.1[C-1.No. 60, No. 69の独文典有]
171. 『英文典ダイヤグラム』 松浦与三松著、近世社、明治 39.2
172. 『教科書獨修用^{エスペラント}世界語』(文法・会話・読本・字書附) 露国エスペラント協會會員 長谷川二葉亭著、彩雲閣、明治 39.7
173. 『英語文法品詞論』 文学士 高木尚介編纂、東京 參文舎・大阪 積文社、明治 39.10

★明治 40~45(1907~1912)年

174. 『表説英文典』(全) (中等教科研究叢書) 普通学講習会著、大阪 此村欽英堂・精華堂書店、明治 40.4
175. 『英語学捷徑』 山田時之助著、金刺芳流堂、明治 40.5(増訂五版) [初版:明治 36.1]
176. 『新式英語熟達法』 高橋五郎著、実業之日本社、明治 40.6
177. 『中学英文法講義』 農学博士 鈴木重礼監修、ドクトル・ウッドマン補助、生田弘治(文学士)・星野久成(開成英語学校々長)・森田米松(文学士)共著、東華堂書店、明治 41.3
178. 『最新問答全書 英文典』(ネスフィールド) 嶋村東洋編、修学堂書店、明治 41.4
179. 『新英語自修書』 土屋 詮教 発行・編纂、東京、明治 42
180. 『新式初等英語獨修』 長井氏最著・英語世界編集部編、博文館、明治 42.11

- 181.『教科書用参考 中等英文法通解』(全) 英語研究会著(代表者:早稲田大学文学士 川口海三)、深谷書店、明治 44.1
- 182.『初等英語自修新書』(全) 高橋達雄著述、帝国書院蔵版、明治 44.3

B-2. 原 典

主な出典は、以下の 5 種である。

- (1)ENGLISH LINGUISTICS 1500—1800 (A Collection of Facsimili Reprints).
Selected and Edited by R.C.ALSTON. THE SCOLAR PRESS LIMITED MENSTON,
ENGLAND. 1970. [EL と表示]
- (2)渡部昇一『英文法史』研究社 昭和 40(1965) [文法史]
- (3)渡部昇一『英語学史』大修館書店 1975 [語学史]
- (4)国会図書館所蔵「江戸幕府旧蔵洋書」[旧蔵洋書]
- (5)南雲堂英語文献翻刻シリーズ [南雲堂]
- (6)その他 [無表示]

1. Lily, William, and Colet, John. *A short introduction of grammar, generally to be used in the Kynges Maiesties dominions, for the bryngynge up of all those that entende to atteyne the knowlege of the Latine tongue.* 1549.(羅)[EL]
2. Bullokar, William. *Bref Grammar for English.* 1586.[文法史・南雲堂]
3. Salesbury, Henry. *Grammatica Britannica.* Londini, 1593.[EL]
4. P.Gr. *Grammatica Anglicana.* 1594.[文法史]
5. Hume, Alexander. *Of the Orthographie and Congruitie of the Britan Tongue.* 1617.[文法史]
6. Gill, Alexander. *Logonomia Anglica.* 1621.[文法史]
7. Wedderburn, David. *A short introduction to grammar, Compyled for the Instruktion of Youth, By Publique Authoritie.* Aberdene, 1632.(羅)[EL]
8. Butler, Charles. *English Grammar.* 1634.[文法史]
9. Jonson, Ben. *English Grammar.* 1640.[文法史]
10. Wallis, John. *Grammatica Linguae Anglicanae.* 1653.[文法史]
11. Wharton, Jeremiah. *The English grammar : or, The Institution of Letters, Syllables, and Words in the English-Tongue.* London, 1654.[EL]
12. Wilkins, John. *An Essay Towards a Real Character, And a Philosophical Language.* London, 1668.[EL]
13. Miege, Guy. *The English grammar ; or, the Grounds, and Genius of the English Tongue.* London, 1688.[EL]

14. Clare, William. *A Complete System of Grammar English and Latin* : wherein That Most Excellent Art is Plainly, Fully and distinctly Taught, and praktkally Manag'd thro' every Part thereof. London, 1690.[EL]
15. Aickin, Joseph. *The English Grammar : or, The English Tongue Reduced to Grammatical Rules* : Containing The Four Parts of Grammar, viz. Orthography, Etymology, Syntax, Prosody, or Poetry. London, 1693.[EL]
16. Browne, Richard. *The English School Reformed*. London, 1700.[EL]
17. Sewel, Willem. *Beknopt Vertoog wegens de Engelsche Spraakkonst*. 1708 ; 1749 ; 1766. [和蘭語原典 No. 1.及び No. 2 所収] [旧蔵洋書]
18. Gildon, Charles, and Brightland, John. *A Grammar of the English Tongue, With Notes, Giving the Grounds and Reason of Grammar in General. To which is added, A New Prosodia ; or, The Art of English Numbers*. London. 1711.[EL]
19. Greenwood, James. *An Essay Towards a Practical English Grammar, Describing the Genius and Nature of the English Tongue. Giving Likewise, A Rational and Plain Account of Grammar in General, with a familiar Explanation of its Terms*. London, 1711.[南雲堂]
20. Turner, William. *A Short Grammar for the English Tongue*. London.1711.[語学史]
21. Maittaire, Michael. *The English Grammar : Or an Essay on the Art of Grammar, Applied to and Exemplified in the English Tongue*. London, 1712. [南雲堂]
22. Shirley, James. *An Essay towards an Universal and Rational Grammar ; Together with Rules for Learning Latin, in English Verse*. London, 1726.[EL]
23. Duncan, Daniel. *A New English Grammar, Wherein the Grounds and Nature of the Eight Parts of Speech, And their Konstruktion is explain'd*. London, 1731.[EL]
24. Collyer, John. *The General Principles of Grammar ; Especially Adapted to the English Tongue. With a Method of Parsing and Examination. For the Use of Schools*. Nottingham. 1735.[EL]
25. Dilworth, Thomas. *A New Guide To the English Tongue In Five Part*. 13th ed. London,1740.[南雲堂]
26. Harris, James. *Hermes : or, a Philosophical Inquiry Concerning Language and Universal Grammar*. London, 1751.[EL]
27. Kirkby, John. *A New English Grammar : or, Guide to the English Tongue*. London. 1745.[EL]
28. *A General and Rational Grammar, Containing the Fundamental Principles of the Art of Speaking, Explained in a clear and natural mannar. With the reasons of the general agreement, and the particular differences of languages*. London, 1753. [Port Royal grammar (Paris,1660)の英譯版] [EL]

29. Gough, James. *A Praktical Grammar of the English Tongue*. Containing The most material Rules and Observations for understanding the English Language well, and writing it with Propriety. Dublin, 1754.[EL]
30. White, James. *English verb: a grammatical essay, In the Didactive Form*. London, 1761.[EL]
31. Buchanan, James. *The British Grammar* : or, an Essay, In Four Parts, Towards Speaking and Writing the English Language Grammatically, and Inditing Elegantly. For The Use of the Schools of Great Britain and Ireland, and of Private Young Gentlemen and Ladies. London, 1762.[南雲堂]
32. Lowth, Robert. *A Short Introduction to English Grammar* : with Critical Notes. London, 1762.[EL]
33. Priestley, Joseph. *A course of lectures on the theory of language and Universal Grammar*. Warrington, 1762.[EL]
34. Ash, John. *Grammatical Institutes* ; or, An Easy Introduction to Dr.Lowth's English Grammar, Designed for the Use of Schools, And to lead Young Gentlemen and Ladies into the Knowledge of the first Principles of the English Language. London, 1763.[EL]
35. Ward, William. *An Essay on Grammar*, as it may be applied to the English language. London, 1765.[EL]
36. Lowth, Robert. *A Short Introduction to English Grammar* : with Critical Notes. A New Edition, Corrected. Dublin, 1769.[南雲堂]
37. Fenning, Daniel. *A New Grammar of the English Language* ; or An Easy Introduction To the Art of Speaking and Writing English with Propriety and Correctness : The Whole laid down in the most plain and familiar Mannar, and calculated for the Use, not only of Schools, but of Private Gentlemen. London, 1771.[EL]
38. Peyton, V. J. *Les Elemens de la Langue Angloise*. The Elements of the English Language. … A new Edition revised, correkted and enriched with many new Rules and Remarks, very proper to remove those Difficulties that still retard the Progress of Foreigners. 2 .edition. London, 1776. (東京学芸大学図書館所蔵)
39. Harrison, Ralph. *Institutes of English Grammar*. Manchester, 1777.[EL]
40. Fell, John. *An Essay towards an English Grammar*. With a Dissertation on the Nature and peculiar Use of certain Hypothetical Verbs, in the English Language. London, 1784.[EL]
41. Webster, Noah. *A Grammatical Institute, of the English Language*, comprising,

An easy concise, and systematic Method of Education, Designed for the Use of English Schools in America. In Three Parts. Part II. Hartford, 1784.[EL]

42. Ussher, George Neville. *The Elements of English Grammar*, methodically arranged for the Use of those who study English grammatically without a previous Knowledge of the Learned Languages : and illustrated by Rules and Lessons of Parsing adapted to the Capacities of Young Beginners. Gloucester, 1785.[EL]

43. Beattie, James. *Dissertations Moral and Critical*, On Memory and imagination. On dreaming. The theory of language etc. London, 1788.[語学史]

44. Coote, Charles. *Elements of the Grammar of the English Language*. Written in a familiar style : accompanied with notes critical and etymological ; and preceded by an introduction, tending to illustrate the fundamental Principles of Universal Grammar. London, 1788.[南雲堂]

45. Pickbourn, James. *A Dissertation on the English Verb* ; principally intended to ascertain the precise meaning of its tenses...to which is added an appendix on French and Latin participles. London, 1789.[語学史]

46. Fogg, Peter Walkden. *Elementa Anglicana* ; or, the principles of English Grammar displayed and exemplified, in a method entirely new. Vol.1. Stockport, 1792.[語学史]

47. Murray, Lindley. *English Grammar*, adapted to the different classes of Learners. With an Appendix, containing Rules and Observations for promoting perspicuity in Speaking and Writing. York, 1795.[EL]

48. モルレイ氏著『英吉利小文典』(推定翻刻年：慶応2～3) : Murray, Lindley. *Abridgment of Murray's English Grammar*, with an appendix, containing an exemplification of the parts of speech. Designed for the use of the youngest class of learners.(York,1797) の翻刻本 [翻刻版の定本は 79 版, Paris, 1835 と推定] [南雲堂]

49. Sedger, John. *The Structure of the English Language* ; exhibiting an easy and familiar method of acquiring a grammatical knowledge of its constituent parts. London, 1798.[EL]

50. Locke, Willem. *Spiegel der Engelsche Taal, of des Students Wegwyzer* ; Mirror of the English Language ; or, Student's Guide. Rotterdam,1801.[旧蔵洋書]

51. Johnson, Samuel. *A Grammar of the English Tongue...* with notes by the rev. H. J. TODD. London, 1827.[南雲堂]

52. Hamelberg, H. A. *Beknopte Engelsche Spraakkunst*, bevattende de hoofdregeln der Engelsche Taal, opgehelderd door voorbeelden en gevolgd van een aantal opstellen ter toepassing in het Engelsch en Nederduitsch. Te Dordrecht, 1845.[旧蔵洋書]

53. Brown, Goold. *The grammar of English grammar*, with an introduction historical

and critical. 10.edition. New York, 1851.

54. Murray, Lindley. *Engelsche Spraakkunst*. Met toepasselijke opstellen ter vertaling. Ten dienste der scholen en dergenen, die de Engelsche taal, op eene spoedige wijze, grondig willen leeren. Zesde Druk. Nagezien en verbeterd door F. M. COWAN. Zalt-Bommel, 1852.[旧蔵洋書]

55. 『英吉利文典』美作 宇田川氏蔵梓、¹⁸⁵⁷安政四年丁巳新鑄 [Engelsche Spraakkunst, vereenvoudigd en tot een-en-twintig lessen gebragt door VERGANI omgewerkt voor de Hollandsche scholen, door J. Olivier, Joh.(Tweede uitgave. Amsterdam, 1853)の翻刻版。

56. Beek, J.van der. *Handleiding ter Beoefening der Engelsche Taal*, ten Gebruike der Scholen en Zelfoefenaars, ... en voor het Engelsch onder medewerking van F. M. COWAN. Tweede Druk. Utrecht, 1854.[旧蔵洋書]

57. Pijl, van der. ; Schuld, H. L. *VAN DER PIJL'S Gemeenzame Leerwijs*, voor degenen, die de engelsche taal beginnen te leeren. het engelsch haar den geroemden WALKER, en het nederduitsch haar de heeren WEILAND en SIEGENBEEK. Negende en veel verbeterde uitgave, door H. L. Schuld. te Dordrecht, 1854. [旧蔵洋書]

58. Gerdes, E. *Nieuwe Leerwijze der Engelsche Taal*. Amsterdam, 1855.[旧蔵洋書]

59. Lloyd, H. E. *Nieuwe Engelsche Spraakkunst*. Naar den negenden druk voor Nederlanders bewerkt door D. BOMHOFF, Hzn. Herzien door Dr. M. P. LINDO. Leeraar der eerste klasse bij de Koninklijke Akademie voor de Zee- en landmagd. Vijfde Druk. Te Arnhem, 1855.[旧蔵洋書]

60. Murray, Lindley. *English Grammar*, adapted to the different classes of learners ; with An Appendix containing rules and observations, for assisting the more advanced students to write with perspicuity and accuracy BY LINDLEY MURRAY. London, 1861. [旧蔵洋書]

61. Bailey, Rev. R. W. *English Grammar* : a simple concise, and comprehensive Manual of The English Language. Designed for the use of Schools, Academies, and as a book for general reference in the language. 10th ed. Philadelphia, 1866.

62. Quackenbos, G. P. *First Book in English Grammar*. New York, 1867.[旧蔵洋書]

63. 江戸版『英吉利文典』The Elementary Catechisms. English Grammar. 6.edition. At YEDO. 1867

64. ピ子ヲ氏原板『英文典』⁽¹⁸⁸⁸⁾明治二年五月新刻、尚古堂発兌 [Pinneo, *English Grammar*. (出版地と刊年不詳)の翻刻版]

65. Hart. John. S. *A Grammar of the English Language*. Philadelphia, 1874.

66. Brown, Goold. The first lines of English Grammar ; being a brief abstract of the authors larger work, the "Institutes of English Grammar." Designed for young learners. New York, 1875.

67. Swinton, W. *Language lessons : an Introductory Grammar and Composition for Intermediate and Grammar Grades*. New York, 1876.
68. Mätzner, Eduard. *Englische Grammatik*. 3te Auflage. 3 Theile. Berlin, 1885.
69. Sweet, Henry. *A New English Grammar Logical and Historical*. Part 1 : Introduction, Phonology, and Accidence. Oxford, 1891.
70. Davenport, Herbert, and Emerson, Anna M. *The principles of Grammar ; an Introduction to the Study of the Laws of Language by the inductive Method*. New York, 1898.
71. Curme, George O. *Parts of Speech and Accidence*. Boston ; New York ; Chicago ; Atlanta ; San Francisco ; Dallas, 1935.

C. 独逸語

C-1. 著述または翻訳独文典

★明治1～9(1868～1876)年

1. 『獨逸初学必携』(全) 宮口高敬著、東京 文苑閣梓、刊年不明[明治初期と推定]
- *2. 『獨逸捷径七ツ以呂波』 森田靖之著、文苑閣、明治4
3. 『獨逸学入門』(上・下) -----、中外堂、明治4
- **4. 『普語箋』(卷之一・二) 中村雄吉訳、東京 万笈閣、明治4
5. 『獨逸単語篇 註解』 前田利器訳、愛智館、明治4
6. 『獨逸単語篇和解』 中村順一郎、万笈閣、明治4
7. 『獨逸作文階梯』(卷之一) 拳山散人著、誠之堂、明治5年5月
- ***8. 『横文字獨学』 獨逸学之部(初編) 青木輔清訳、東京 中村氏蔵版、明治5
9. 『カドリー氏原著獨逸文典直譯』(上一・二) 中村雄吉訳、誠之堂、明治5年5月
10. 『獨逸語学初歩』(初編) 鈴木孝之助訳述、愛知 田原町・いろは亭、明治5年10月 [カドリー氏?]

なお、この時期は、前時代の和蘭語に倣って英・独・仏語間で同趣の語学書が書かれているので、参考までにここに挙げる。ひとりの筆者が二か国語の文法書を書くのも珍しくない。

- * 『仏学捷径七ツ以呂波』 橋爪貫一著、出版社不明、明治3
- 『英学捷径九体以呂波』 橋爪貫一校訂、青山堂、明治4序
- 『英学捷径七ツ以呂波』 仁科静太郎編、喬木和介刊、明治24,5
- ** 『蛮語箋』 森島中良著、弘化4
- 『英語箋』(卷1,2) 石橋政方著・中山武和校訂、椀屋喜兵衛刊、万延2 [和蘭語 No. 48、英語 No. 6]

- 『仏朗西熟語箋』 渡六之介著、大阪・河内屋源七郎、明治 3
 『英語箋』(改正増補)3冊 ト部訳、戸沢光徳刊、明治 5-6
 ***『横文字獨学』英学之部(初編) 青木東江(輔清)著、紀伊国屋源兵衛、忍藩洋学校蔵版、明治 4
 同 (三編) 青木東江(輔清)著、中外堂、明治 5
 『英吉利語学便覧』(初編) 青木輔清編、埼玉・行田町 青木輔清刊、明治 5,1
 『英文典便覧』 青木輔清編述、忍藩洋学校版、明治 4
 『無類捷徑英学童子解』(初編) 青木輔清編述、明治 18 [英語 No. 35]
 『洋学指針』蘭学部 柳川春三著、柳川氏蔵、慶応 3 [和蘭語 No. 53]
 『洋学指針』英学部(初編) 柳川春三著、柳川氏蔵、慶応 3 [和蘭語 No. 54; 英語 No. 7]
 『洋学指針』英学部(二編) 柴田清熙編、大和屋喜兵衛、明治 4,12 [英語 No. 12]
 『洋学指針』仏学部 戸沢光徳著、戸沢光徳刊、明治 5 [英語 No. 14]
 『洋学楷梯(英学楷梯)』 松岡啓著、京都・小川金助、好問堂蔵版、明治 4,8 [英語 No. 10]

★明治 10～19(1877~1886)年

11. 『セーフエル氏文典直譯』 多賀貫一郎訳、競英堂、明治 13 年
 12. 『獨逸作文要略』(第一之部) 共研学社纂訳・蔵版、明治 15 年 2 月
 13. 『セーフエル氏原著獨逸文典直譯』(文章論全) セーフエル著・小山篤叙訳、出版者不明 明治 16.5
 14. 『獨逸文法楷梯』(前篇) 平塚定二郎編、荒川邦蔵刊、明治 16 [全文ドイツ語]
 15. 『獨逸文法楷梯』(後篇:文章学) 和歌山縣平民 平塚定二郎編輯、山口縣士族 荒川邦蔵出版、明治 17
 16. 『獨逸文法獨稽古』 栗田鐵三郎編集、誠之堂、明治 17.11
 17. 『挿譯訓解 獨逸文典指針』セーフエル氏原著・の場素一挿訳、同志存版(競英堂)、明治 18.3
 18. 『シェーフエル氏獨逸文法獨学』長谷川辰二郎筆記・平塚定二郎口訳、亀井忠一・大平俊章刊、明治 18.8
 19. 『獨逸語学初歩』平塚定二郎編、丸善、明治 18.10 [初版:明治 14.1]
 20. 『挿譯注釈シェーフエル氏獨逸文典 一名 実用獨案内』(前編) 神奈川縣平民 馬島 珪 [奥付きでは珪之介] 挿訳、伊藤誠之堂、明治 19.5 [No. 25 とペア]
 21. 『獨逸文法楷梯説明』(前篇之部) 平塚定二郎講述・刊、明治 19.6
 22. 『邦語獨逸文典』(第一篇) 徳永 富・大村久賀太郎著、同刊、南江堂、明治 19.9

★明治 20～29(1887~1896)年

23. 『獨文組立法』糟谷鍵治郎氏纂訳、尤盛堂蔵版、明治 20.3
 24. 『獨逸学方針』(完) 笠原親文・石川康雄編著、第一高等学校御雇教師ドクトル、ワルツ先生校訂、石川康雄刊、明治 20.9

25. 『挿譯注釈シェーフェル氏獨逸文典 一名 実用独案内』(後編) 馬場 珪挿訳、伊藤誠之堂、明治 21 [No. 20 とペア]
26. 『英獨兩語双学自在』(全) 文学士 辰巳小次郎著、吉岡書籍店、明治 21.7
27. 『改正増補 獨逸小文典』原口隆造 編輯・礼曼先生 閱、春和堂蔵版、明治 22 [全文ドイツ語]
28. 『改正増補 獨逸小文典略』原口隆造編・礼曼閱、京都春和堂、明治 22.9 (第2版)
29. 『英獨仏語獨修誌』「獨語之部」(No.1~9) ウイリヤム・スウキトマン著、欧文出版、明治 22~23 [全文ローマ字表記]
30. 『改正増補 獨逸小文典譯解』田中康二訳述、京都春和堂、明治 23
31. 『獨逸学捷徑』(全) 和歌山縣士族 陸軍教授 寄山元吉著、寄山蔵梓、明治 24.5 [B-1. No. 129 の英文典有]
32. 『シェーフェル文典解釈』(上・下) 嶋約 翰訳、京都 文港堂出版、明治 27.8
33. 『獨逸文法教科書』(全) 大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎合著、独逸学協会出版部蔵版、明治 27.9
34. 『獨逸文典』(詞論) 岡山医学専門学校教授 医学士 高橋金一郎著、独逸語学校蔵版、初版(上・下) : 明治 27 [合本版、明治 36.9]
35. 『獨逸文典』(文論) 高橋金一郎著、岡山 高橋金一郎刊、初版(上・中・下) : 明治 28.12 [詞論と文論の合本版、明治 36.9]
36. 『獨逸作文の枝折』竹仙小史訳、南光堂蔵版、明治 28.10
37. 『獨逸語学階梯』(第一) 第一高等学校独逸文学科教員編、南江堂、明治 29.6
38. 『教科用自修用 獨逸語学階梯』(上卷) 賀来熊次郎編、南江堂、明治 29.6

★明治30~39(1897~1906)年

39. 『新式獨逸語自修法』中村宗次郎著、東山堂 明治 30.3 [B-1 No. 134 の英文典有]
40. 『教科用自修用 獨逸語学階梯案内』第五高等学校教授 賀来熊次郎篇、南江堂、明治 30.5
41. 『新撰獨修 獨逸文法指針』(上・下) 穴戸深蔵・栗原保次郎合著、東京書肆 金刺氏発刊、明治 30.6
42. 『三谷獨逸文典』(詞学・文章学) 第五高等学校教師 三谷金女三著、丸善株式会社、明治 30.9
43. 『獨逸作文錦囊』(完) 山田端夫編纂、南江堂、明治 30.9
44. *『新編獨逸語獨修』マストル、オフ、アーツ・陸軍大学校教授 山口造酒編、東京 増子屋書店、明治 31 [第10版:東京 岡崎屋書店、明治 36.9]
45. 『新式獨逸文法詳解』中村宗次郎著述、東山房書房蔵版、明治 31.10 [No.72 と同内容]
46. 『実用獨逸語学』(全5冊)辻高衡編、独逸語学雑誌社蔵版、明治 32.8~37
47. 『獨逸作文早わかり 一名 獨逸作文自修書』(第壹) 中台重躬編輯、六合館、明治 33.1

48. 『和文獨譯 獨逸作文獨修』 鷺山弥生著、誠之堂、明治 33.1
49. 『邦語獨逸文典』 文学士 青木昌吉編、東京 博文館蔵版、明治 34.1 [No. 54 とペア]
50. 『獨逸文法詳解』 石井賢治著、四海堂、明治 34.1
51. 『簡明獨逸文典』 陸軍教授 國吉直蔵著、南江堂、明治 34.4
52. 『和文獨譯練習』 独逸文学雜誌社編、明治 34.9
53. 『高等獨逸文法析義』 (前篇一) 水野鉄次郎著、独逸学講習所蔵版、明治 34
54. 『邦語獨逸文典』 (文章論) 文学士 青木昌吉編、東京 博文館蔵版、明治 35.3
55. ※※ 『邦語獨逸文章論』 青木昌吉編、博文館、明治 35.4 (帝国百科全書第 82 編)
56. 『受験応用 獨逸作文詳解』 岡倉一郎著、金刺芳流堂、明治 36.2
57. 『獨逸語獨修書』 藤井信吉・進藤 巖著、富山房、明治 36.9
58. 『獨逸作文教科書』 (全) 清水載四郎・三並 良 合著、独逸語学雜誌社、明治 36.9
59. 『獨逸文法屈曲變化一覽表』 東京外国語学校教授 水野繁太郎校閲・田中練太郎編纂、南江堂書店、明治 36.10
60. 『初学自修 獨逸語速成』 渡辺修二郎撰、大修館、明治 36.12 [Nn. 69 と同内容 ; B-1. No. 170 の英文典有]
61. 『日本学生用 实用獨逸文法書』 藤山治一・司馬亨太郎共編、南江堂、明治 37.1
62. 『新撰獨逸文典問答』 文科大学生 藤井 憲 編、東京 博文館蔵版、明治 37.6
63. 『獨逸文法詞学詳論』 三瀧信三著、哲学書院、明治 37.12
64. 『獨逸文章学』 東京外国語学校教授 水野繁太郎・田代光雄共著、丸善 明治 38.6
65. 『獨逸語必携』 (第一輯) 斎藤 基・安田 登 共著、兵林館、明治 38.8
66. 『獨逸語学^{ひょうご} 獨案内』 高浜三吉編、岡崎屋書店・松栄堂書店、明治 38.11
67. 『和文獨譯之基礎』 中村雅次郎編纂、鍾美堂、明治 38.11
- * 『新撰仏蘭西語獨修』 (増子屋、明治 33,5) の著書有。
- ** 『邦語英文典』 畔柳都太郎編、博文館 明治 31.10 (同全書第 15 編)
- 『邦語仏蘭西文典』 (上下) 松井知時編、博文館、明治 35(同全書第 83,84 編)

★明治 40～45 (1907~1912)年

68. 『和文獨譯法』 水島満寿橘著、東華堂書店、明治 40.5
69. ※ 『獨逸語^{ひょうご} 獨案内』 渡辺修二郎著、内外出版協会、明治 40.6 [No. 60 と同内容]
70. 『实用獨逸文典』 (上・下) 青木昌吉著、東京 博文館蔵版、明治 40.8
71. 『獨逸文法講義』 志賀光雄・水島満寿橘共著、東華堂、明治 40.10
72. 『正則獨逸文法講義』 中村宗次郎著、修学堂、明治 41.10 (新撰百科全書第 69 編) [No. 45 と同内容]
73. 『正則獨逸語獨修』 中村宗次郎著、修学堂、明治 41.10 (新撰百科全書第 70 編)
74. 『系統的獨逸語学』 (第一卷) 竹内楠三著、独佛英語会、明治 42
75. 『獨逸文法要綱』 (前編) 雪岡重太郎著・刊 (訂正第 2 版)、明治 42.10

76. 『獨逸文法原理』二宮哲三著、精華書院、明治 43.6
 77. 『獨逸新文典』(上・中・下)早稲田大学教授 法学士 三瀧信三・帝国大学独文科専攻文
 学士 多久安美共著、東京 東海堂、明治 43.10
 78. 『獨文階梯直譯獨^{ひとひ}案内』訳者不明、精華書院、明治 44.12
 * 『英語獨案内』内外出版会(明治 39,1)の著書有り。

★大正(1912)以降

79. 『獨修用教科用 獨逸語入門』高木敏雄編、吐鳳堂書店、大正 2
 80. 『獨逸文法辞典』片山正雄著、博育堂、大正 8
 81. 『獨逸語教科書』第一輯 文学士 上村清延、大正 8
 82. 『粕谷獨逸自修文典』粕谷眞洋著、廣文堂書店、大正 13
 83. 『新式獨逸語變化及不規則動詞表』古賀新泉編、大阪 昭参社、昭和 3.4
 84. 『自修新ドイツ文典』山田幸三郎著、太陽堂、昭和 6
 85. 『新ドイツ語文法教程』関口存男著、三省堂、初版 1932 ; 第 4 版 1980
 86. 『ドイツ廣文典』桜井和市著、第三書房、昭和 25 ; 45

C-2. 原 典

Nr.1.~8.および 10.はバイエルン州立図書館 (Bayerische Staatsbibliothek) 所蔵。
 Nr.11.~14., 16.~22.は国会図書館所蔵。 Nr.9, 12, 15.は筑波大学中央図書館所蔵。

1. Oelinger, Albert. *Vnderricht der Hoch Teutschen Sprach* : GRAMMATICA Sev
 Institutvto Verae Germanicae linguae, in qua Etymologia, Syntaxis & reliquae partes
 omnes suo ordine breuiter tractantur. Straßburg, 1574. [本文は全部ラテン語]

2. Kromayer, Johannes. *Deutzsche Grammatica zum newen Methode der Jugend
 zum besten zugerichtet*. Weymar, 1618 ; rpt. Hildesheim, 1985.

3. Gueintz, Christian. *Deutscher Sprachlehre Entwurf*. Gedruckt zu Cöthen im
 Fürstenthume Anhalt. 1641 ; rpt. Hildesheim, 1978.

4. Pudor, Christian. *Der Teutschen Sprache Grundrichtigkeit/ und Zierlichkeit.
 Oder Kurtzte Tabellen/ Darinnen gewiesen wird/ wie man nicht allein grundrichtig
 Teutsch reden/und schreiben: Sondern auch wie man eine einfältige Teutsche Rede/
 durch zierliche Versetzung/ Verwechselung / Erweiterung / Zusammenziehung / und
 rechtmäßige Verschmähung/ ausschmücken könne : Aus vielen Teutschen Rednern/
 und Poeten zusammen getragen/...Cölle an der Spree/...Im Jahre 1672. ; rpt. Hildes-
 heim, 1975.*

5. Aichinger, Karl Friedrich. *Versuch einer Teutschen Sprachlehre*, anfänglich nur
 zu eignem Gebrauche unternommen, endlich aber, um den Gelehrten zu fernerer

Untersuchung Anlaß zu geben, ans Licht gestellt. Frankfurt und Leipzig, 1754.

6. Gottsched, Johann Christopf. *Vollständigere und Neuerläuterte Deutsche Sprachkunst*. Leipzig, 1762.

7. Adelung, Johann Christopf. *Umständliches Lehrgebäude der Deutschen Sprache zur Erläuterung der Deutschen Sprachlehre für Schulen*. 2 Bände. Leipzig, 1782.

8. Schmitthenner, Friedrich. *Ausführliche Teutsche Sprachlehre*, nach neuer wissenschaftlicher Begründung, als Handbuch für Gelehrte und Geschäftsleute und als Commentar der seine kleinern Lehrbücher. Frankfurt a.M., 1828.

9. Bauer, Heinrich. *Vollständige Grammatik der neuhochdeutschen Sprache*. 3 Bände. Berlin, 1830.

10. Heyse, K.W. L. *Dr. J. C. A. Heyse's ausführliches Lehrbuch der deutschen Sprache*. 4 Bände. 5. Ausg. Hannover, 1838.

11. Bomhoff, D., und Zoon, H. *Vollständiges deutsch-holländisches Taschenwörterbuch*, nach den besten Quellen. Leyden, 欠年 [序文の日付は 1846]

12. Becker, Theodor. *Leitfaden für den ersten Unterricht in der deutschen Sprachlehre*. 8. Aufl. Frankfurt am Main, 1864. [初版は 1833 ; 表紙に < 明治九年納付 > の朱印と < 議官従四位中島信行 > の墨書有]

13. Gurke, Gottfried. *Deutsche Schulgrammatik*. 5. Aufl. Hamburg, 1870.

14. Adler, J. G. *Ollendorff's New Method of learning to Read, Write, and Speak the German Language*, to which is added a systematic outline of German grammar. New York, 1871.

15. Kaderly, Jakob. *Lehrbuch der deutschen Sprache für die höhern Classen der kaiserlich-japanischen Akademie DAI GAK-NANKO Tokio in Japan*. Mit Berücksichtigung der meisten Neuerungen.... 2. Aufl. 1878. 明治十一年四月、翻刻出版人 中川忠明

16. Heyse, K.W. L. *Dr. J. C. A. Heyse's deutsche Schulgrammatik oder kurzgefasstes Lehrbuch der deutschen Sprache*, mit Beispielen und Übungsaufgaben. 23. verbesserte Auflage. Hannover, 1878. [第 8 版 : Magdeburg, 1828.]

17. Schäfer, Edmund. *Leitfaden beim Unterrichte in der deutschen Sprache für die unteren Klassen höherer Lehranstalten*. Tokio, 1882.

18. Lehmann, Josef. *Leitfaden für den Unterricht in der deutschen Grammatik für Bürgerschulen*. 5. revidierte Auflage. Prag, 1883.

19. Engelen, August. *Leitfaden für den deutschen Sprachunterricht*. 3 Bände. Berlin. I. Teil: Für die Unterklassen. 1885. (第 73 版) [第 3 版: 1877]; II. Teil: Für die Mittelklassen. 1886. (第 36 版); III. Teil: Für die Oberklassen. 1884. (第 5 版) [< 明治廿年十二

月九日文部省交付>の朱印有]

20. Wilmanns, Wilhelm. *Deutsche Schulgrammatik nebst Regeln und Wörterverzeichnis für die deutsche Rechtschreibung nach der amtlichen Festsetzung*. Hrsg. von H. Poppelreuter und W. Wilmanns. 2 Teile. 6. umgearbeitete Auflage. Berlin, 1885.

21. Lyon, Otto, und Polack, Paul. *Handbuch der deutschen Sprache für Präparandenanstalten und Seminare*. Mit Übungsaufgaben. 2. Aufl. in der neuen Rechtschreibung. Leipzig und Berlin, 1903.

なお、以下のものは国内にてもバイエルン州立図書館にてもその所在を確認・閲覧できなかったものである。参考までに書名を列挙する。[以下、アルファベット順]

(22) Bernhardt, F. K. *Elementarbuch der deutschen Sprache, oder Anleitung und methodisch geordneter Stoff zu deutschen Sprech= Lese=, und Recitir=Uebungen*. Koblenz : Holscher, 1828.

(23) -----, *Deutsche Grammatik für den höhern Schulunterricht*. Frankfurt a.M. : Hermann, 1825.

(24) Hahn, Karl Fr. *Populäre deutsche Sprachlehre*. Mit einer Vorrede von K. H. L. Pölit. Dresden : Hilscher, 1801.

(25) Hartung, Aug. *Anleitung zum richtigen Gebrauch der deutschen Sprache in erläuternden Beispielen*. Nicolai, 1813.

(26) -----, *Versuch einer kleinen deutschen Sprachlehre für den ersten Anfänger*. 1806 ; 2. Aufl. 1816 ; 3. Aufl. 1823. Reimer,

(27) -----, *Deutsche Sprachlehre für höhere Schulen*. 1790 ; 5. Ausg. Lange, 1806 ; 7. Aufl. Dümmler, 1821.

(28) Heidelberg, H. *Elementargrammatik der deutschen Sprache für die unteren Gymnasial= und Realklassen, für Bürger= und höhere Töchterschulen*. Celle : Capaun= Karlow'sche Buchhandlung, 1858 ; 2. verbesserte Aufl. 1864 ; 3, 4, 5. verb. Aufl. Celle(Koburg) : Karlowa, 1870-75 ; 6. verb. Aufl. Koburg : Karlowa Verlag, 1878 ; 7. Aufl. Mit Berücksichtigung der neuen Orthographie sehr verbesserte und vermehrte Auflage. Koburg : Karlowa, 1881 ; 8. verb. Aufl. Koburg : Karlowa und Berlin : Weidmann, 1888 ; 9. sehr vermehrte Aufl. Berlin : Weidmann, 1898 ; 10. verb. Aufl. Besorgt von Carl Wagener. Berlin : Weidmann, 1903.

(29) Heinsius, T. *Neue deutsche Sprachlehre, besonders zum Gebrauch in Schulen*. 3 Theile. 1801-2 ; 2. Aufl. 1814 ; 4. Ausg. in 3 Theilen. Leipzig : Er. Fleischer. 1821. (2. u. 3. Theil. Auch unter dem Titel : Prak. Lehrbuch der theoret.= prakt. Anleitung zur Bildung des mündlichen Vortrags.)

- (30) ----- . *Kleine theoret.= prakt.deutsche Sprachlehre für Schulen und Gymnasien*. 1804. ; 2. Aufl. 1810 ; 10. Aufl. 1824 ; 12. Aufl. 1829. Duncker und H.
- (31) ----- . *Teut. oder theoret.= prakt. Lehrbuch des gesamten deutschen Sprachunterrichts*. 4 Theile. 1807 ; 2. Aufl. 1814 ; 3. Aufl. 1817 ; 4. Aufl. 1825.
- (32) ----- . *Der Tochterschule, ein Lese= und Unterrichtsbuch für weibliche Lehranstalten*. Leipzig : Er.Fleischer. 1816 ; 2. Aufl. 1825.
- (33) Heinze, Jh. Mch. *Schreiben über die kurzische Vertheidigung der Gottschedischen Sprachlehre*. Helmst, 1760.
- (34) Hemmer, Jak. *Abhandlungen über die deutsche Sprache*. Zum Nutzen der Pfalz. Mannheim : Löffler (Franz in Münch.), 1769.
- (35) ----- . *Vertheidigung der Abhandlung über die deutsche Sprache*. Mannheim : Löffler (Franz in Münch.), 1771.
- (36) ----- . *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauch dem Kurpfälz. Lande*. Mannheim : Löffler (Franz in Münch.), 1775.
- (37) Hempel, Chr. Fr. *Erleuchtete hochdeutsche Sprachlehre*. Frankfurt a.M. : Hermann (a. Brönner), 1754.
- (38) Hünerkoch, Th. Nikl. Ldw. *Praktische deutsche Sprachlehre*. Leipzig : Göschen, 1801 ; 2.verb. Aufl. Unter dem Titel : *Theoretische und praktische Anleitung zur Erlernung der deutschen Sprache* ; mit einer kleinen Wörterbuche. Bremen : Kaiser, 1805.
- (39) Köl, Mich. Ant. *Handbuch zum Studium der deutschen Sprache und Literatur*. 1. Bd. 1.Theil. Würzburg, 1791.
- (40) ----- . *Deutsche Sprachlehre nebst einem Wörterbuche*. Würzburg : Stahel, 1791.
- (41) Kunze, Geo. Cph. (Schwabe, J. J.) *Beleuchtung einiger Anmerkungen über Gottscheds Sprachlehre*, von J. M. Heinze. Brandenburg : Halle, 1760.
- (42) Link, Ant. *Neue deutsche Sprachlehre nach Adelung*. 2 Bände. Linz : Haslinger, 1813.
- (43) Michaelis, Chr. Fr. *Lehrbuch der deutschen Sprache*. 1.Theil. Auch unter dem Titel : *Theoret. prakt. deutsche Grammatik*, oder Anleitung zur Kenntniß der Aussprache, Rechtschreibung und Wortbildung, und der Redetheile des Deutschen ; nebst erläuterten Beispielen. 2.Theil. Die Syntaxis enthaltend. Leipzig : Lehnhold, 1825-26.
- (44) Müller, Jos. *Grundzüge zur deutschen Sprachlehre für die 60 Gymnasialklassen und hnl. Bildungsstufen*, nebst einem Grundsiebel (mit besond.Anweis.f.d.Lehrer) als Einleitung, und Leseübungen als Anhang. Hirschwald, 1825.

(45) ----- . *Lehre der deutschen Sprache gründl. und neu. gefaßt, samt ausübender Ton.= und Silbenmaßelehre.* Hirschwald, 1827.

(46) Reinbeck, Geo. *Deutsche Sprachlehre zum Gebrauch deutscher Schulen.* Lübeck, 1802 ; 2.Aufl. Hamburg : Campe, 1809 ; 3.verb. Aufl. Jena : Voigt und Stuttgart : Löflund, 1812 ; 4.(eigentl. die 5te) rechtmäß. und verb. Aufl. Stuttgart : Löflund, 1821.

(47) ----- . *Kurze deutsche Sprachlehre zum Gebrauch deutscher Schulen.* Hamburg : Campe, 1805.

(48) Rosenberg, K. *Vorschule der deutschen Grammatik für Studierende und obere Gymnasialklassen.* Ein Versuch zu einer philosoph.= krit. Einleitung in dem Sprachstudium. Duncker und H., 1823.

(49) Schade, K. Benj. *Vollständige deutsche Sprachlehre, zum Gebrauch der Schulen, und aller derer, welche die deutsche Sprache zum Gegenstand eines Studiums machen.* Leipzig : Hinrichs, 1822.

(50) ----- . *A new Grammar of the German language for the Englishmen containing a compl. syntax of all the parts of speech.* Leipzig : Hinrichs, 1805 ; Edition II, 1816 ; Edition III, 1822 ; Edition IV, 1828.

(51) Schenkel, Jh. Sal. *Vertheidigung der Gottsched'schen Sprachlehre.* Leipzig, 1760.

(52) ----- . *Sendschreiben an Gottsched, von dem Verfasser des Versuchs über die Seele.* Frankfurt.a.M. : Eßlinger, 1754.

(53) Seidenstücker, Jh. Hnr. Ph. *Nachlaß, die deutsche Sprache betreff.* (hrsg.von A. Mallinkrodt.) Dortmund : Schulz in Hamm. 1818.

(54) ----- . *Bemerkungen über die deutsche Sprache ; eine Vorarbeit zu einer krit. Grammatik der hochdeutschen Sprache.* Helmst. : Fleckeisen, 1804.

(55) Simon, Jh. Fr. *Erster Versuch einer deutschen Sprachlehre mit lauter deutschen Kunstwörtern.* Salzburg : Duyle, 1787.

(56) ----- . *Deutsche Sprachlehre für Damen.* Hamburg : Herold jun., 1803.(Auch unter dem Titel : *Erste Anfangsgründe der deutschen Sprachlehre, mit Vermeidung aller fremden Kunstwörter.* 1817.)

(57) Snell, Jh. Pt. *Neuer Versuch einer deutschen Sprachlehre.* Offenbach, 1790. N. A. verbessert von J. V. Meidinger. Brede, 1797.

(58) Steinheil, Fr.Chr. Ph. von. *Deutsche Sprachlehre für höhere Schulen, wie auch zur eigenen Belehrung.* Stuttgart : Steinkopf, 1815.

(59) Wismayr, Ritter Jos. *Grundsätze der deutschen Sprache, zum Gebrauch bei dem Schul= sowohl als Selbstunterrichte.* 1.Theil : Sprachlehre. 2ter Theil : Rechtschreiblehre. Salzburg, 1796 ; 2. Aufl. 1803 ; 3. Aufl. 1805. München (Thomann

im Landshut).

(60) ----- . *Grundsätze der hochdeutschen Sprache*. 2 Theile. München (Landshut : Krüll), 1813.

(61) ----- . *Kleine deutsche Sprachlehre*. Salzburg, 1797 ; 2. Aufl. Mayr., 1800 ; 5. Aufl. unter dem Titel: *Lehrbuch der hochdeutschen Sprache*. Landshut, 1813 ; 6. Aufl. 1814 ; 7. Aufl. 1817 ; 9. Aufl. Krüll, 1824 : dieselbe. Prag : G. Haase Söhne, 1806 : dieselbe im Auszuge. Breslau, 1814.

II. 参考文献 (50音順)

論 文

1. 朝倉治彦・石山 洋「蕃書調書旧蔵蘭書割記」『上野図書館紀要』第一冊、上野図書館、昭和29(1954)
2. 阿倍礼子「我国における英文法の変遷」『學苑』第175号、昭和女子大、昭和36
3. 安藤貞男「Subjunctive は<接続法>か」『英語青年』第145巻第6号、平成11
4. 池田哲郎「オランダ語研究史序説」『福島大学学芸学部論集』第12集の2、1961-3
5. 池田哲郎「本邦におけるドイツ学の創始——蘭系ドイツ書志」蘭学資料研究会刊『蘭学資料研究』124号、龍溪書房、1963
6. 石田幹之助「王堂チャムバレン著作並論文目録」『国語と国文学』Vol.20-N0.4、昭和10
7. イーストレーキロ授・無声学人筆記「高等英文典講義——時制(The Tenses)の説明」明治26~27(『日本英学新誌』復刻版第二巻第二十号~第三十号、第三巻第三十一号~第四十三号所収)。
8. 市川三喜「Prof. Chamberlain の著書其他」『英語青年』(チェンバレン記念号) Vol.73-No.2、昭和10
9. 市川慎一「『佛郎察辞範』に見るフランス語と日本語」月刊『言語』Vol.23-No.1、1994
10. 井上好治「文化年間における長崎の西洋(蘭・仏・英)文法論」『九州文化史研究所紀要』九州大学九州文化史研究施設第12号、昭和43
11. 岩崎克己「徳川時代舶載の和蘭語学書(語法書篇)」『学燈』46-6、昭和17
12. 岩淵悦太郎「明治初期における文法書編纂について」『國語・國文』第十一巻第二号、昭和16
13. 及川 賢「英文法用語<完了>の変遷」(『英語教授法の視点——若林俊輔教授還暦記念論文集』所収)三省堂、1991
14. 大槻文彦「和蘭字典文典の譯述起原」『史学雑誌』第九編第三・五・六号、明治31
15. 大槻文彦「日本文明の先駆者」(『文明源流叢書』第一巻 所収)国書刊行会、大正2
16. 大鳥蘭三郎「高野長英の蘭学への貢献」蘭学資料研究会『研究報告』第153号、龍溪書房、1963
17. 岡倉由三郎「恩師チャムブレン先生を偲ぶ」『英語青年』(チェンバレン記念号) Vol.73-No.2、昭和10
18. 岡倉由三郎「チャムブレン先生を憶ふ」『国語と国文学』Vol.20-N0.4、昭和10
19. 岡澤鉦次郎「日本文典に於いての試論」『言語学雑誌』第一巻第10号~第三巻第一号、明治33~35
20. 岡澤鉦次郎「文典の時の論」『國学院雑誌』第七巻、明治34

21. 岡田和子「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅰ：原形と不定法」『外国語教育論集』17、筑波大学外国語センター、1995（「英語学論説資料」第29号収録）
22. 岡田和子「明治時代の洋語文典における日本語——蘭訳英文典『和蘭語法解』と洋語文典の系譜」『文学研究論集』13、筑波大学比較理論文学会、1996（「英語学論説資料」第30号収録）
23. 「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅱ：仮定法と接続法」『外国語教育論集』18、筑波大学外国語センター、1996
24. 岡田和子「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅲ：Perfect と Imperfect①<過去>から<現在>になった Perfect（蘭・英の場合）」『外国語教育論集』19、筑波大学外国語センター、1997
25. 岡田和子「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅳ：Perfect と Imperfect②<過去>から<現在>になった Perfect（英・獨の場合）」『外国語教育論集』20、筑波大学外国語センター、1998
26. 岡田和子「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅴ：助動詞の和訳法と教授法」『外国語教育論集』22、筑波大学外国語センター、2000（「英語学論説資料」第34号収録）
27. 岡田和子「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅶ：現代文法から見た誤解」『外国語教育論集』26、筑波大学外国語センター、2004（「英語学論説資料」第38号採録予定）
28. 尾形裕康「明治の翻訳教育書——前半期を中心として」『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』5、1959
29. 小澤敏夫訳「シーボルトの長崎滞在、自安政六年至文久元年——シーボルトの長男 Alexander von Siebold 著 Fr.von Siebold's letzte Reise nach Japan.1903」『長崎談叢』第6輯、昭和5
30. 春日和男「明治以後の文法論」（口座「日本語の文法」第一巻『文法論の展開』所収）明治書院、1968
31. 片桐一男「和蘭点画例考補と西文訳例」『青山学院大学文学部紀要』第19号、1977
32. 勝俣銓吉郎「英文法事始め」（上・中・下）『英語青年』Vol.XLIX. No.2-4.
33. 楠家重敏「来日以前の B. H. チェンバレン」『研究紀要』第25号、日本大学人文科学研究所、昭和56
34. 黒田源次「シイボルト先生とその門人(一)」『長崎談叢』第16輯、昭和1063.
35. 黒田源次「シイボルト先生とその門人(下)」『長崎談叢』第17輯、昭和10
36. 斎藤 信「文法領域の開拓とその発達——『日本におけるオランダ語発達史』の或る章」『人文社会研究』名古屋市立大学教養部紀要第5巻、1959
37. 斎藤 信「『柳圃中野先生文法』について」『人文社会研究』名古屋市立大学教養部紀要第14巻、1970
38. 斎藤 信「中野柳圃の『四法諸時対訳』について」『人文社会研究』名古屋市立大学教養部紀要第17巻、1973
39. 斎藤 信「江馬家所蔵のオランダ語文法書について——特に中野柳圃の『三種諸格』

と著者不明の『助字要訣』について』『人文社会研究』名古屋市立大学教養部紀要第 18 卷、1974

40. 斎藤 信「天保時代におけるオランダ語教授の一例について」『人文社会研究』名古屋市立大学教養部紀要第 9 卷、1964

41. 斎藤 信「Sewel の『オランダ語文典』が柳圃の『四法諸時対訳』に与えた影響について」『蘭学資料研究会研究報告』第 311 号、1979

42. 斎藤 信「“F. HALMA, NEDERDUITS WOORDENBOEK," いわゆる『ハルマ和解』の本について」『金沢大学法文学部論集』文学篇 2、1954

43. 斎藤 信「再び『波留麻和解』の異本について」『金沢大学法文学部論集』文学篇 3、1955

44. 斎藤 信「稲村三伯（^{うながみ}海上随鷗）——彼の生涯と『波留麻和解』研究」『人文社会研究』名古屋市立大学教養部紀要第 8 卷、1962

45. 斎藤 信「前野良沢の『蘭訳筌』について」『人文社会研究』名古屋市立大学教養部紀要第 16 卷、1972

46. 佐々政一「動詞の<とき>に就て」『帝国文学』第七卷第四、明治 34

47. 佐々木信綱「人としてのチェンバレン先生」『国語と国文学』Vol.20—No.4、昭和 10

48. 佐藤良雄「動詞過去の用語に関する研究」日本大学創立七十周年記念論文集第一卷・人文科学編、1960

49. 佐藤良雄「文典用語の相互影響——特に動詞過去の用語について」日本大学人文科学研究所『研究紀要』、昭和 37

50. 佐藤良雄「動詞の<過去未来>について」『武蔵野女子大学紀要』Vol.5. 1970

51. 佐藤良雄「英文典と国文典」（『日本の英学 100 年』明治編 所収）研究社、1968

52. 佐藤良雄「明治百年の国文典における西洋文典の影響」（『国語学口座』第一卷 所収）白帝社、昭和 44

53. 佐藤良雄「和歌山藩における独逸語学の系譜について」蘭学資料研究会刊『蘭学資料研究』124 号、龍溪書房、1963

54. 佐藤良雄「蕃書調書と外国語学校」蘭学資料研究会刊『蘭学資料研究』169 号、龍溪書房、1965

55. 沢田瑞穂「漢文法における詞性の虚実」『解釈』第 2 卷第 5 号、昭和 31

56. 重久篤太郎「和歌山藩におけるドイツ人」蘭学資料研究会刊『蘭学資料研究』166 号、龍溪書房、1965

57. 重久篤太郎「王堂 Chamberlain 略伝」『英語青年』（チェンバレン記念号）Vol.73-No.2、昭和 10

58. 縦横生（杉村楚人冠）「英和時制の異同」（一～四）（『日本英学新誌』第 44～46 および 50 号所収）明治 27

59. 杉本つとむ「ホフマンの日本語考察——動詞・形容詞について」『文学・語学』4、

昭和 32

60. 杉本つとむ「国語史ノート」『国文学研究』第 20 集、早稲田大学国文学会、昭和 34
61. 杉本つとむ「近世における外国語の摂取とその影響——近代日本語史の一断面」『国語と国文学』第 180 号、東京大学国語国文学会、昭和 34
62. 杉本つとむ「和蘭属文錦囊抄その他（一）——蘭語研究書についての二三の覚え書き」『解釈』第 7 巻第 1 号、昭和 36
63. 杉本つとむ「蘭語訳撰その他——蘭語研究書についての二三の覚え書き」『解釈』第 7 巻第 8 号、昭和 36
64. 杉本つとむ「属文錦囊の研究——如淵吉雄権之助の蘭語学」『武蔵野女子大学紀要』第 5 巻、昭和 48
65. 杉本つとむ「文法用語の翻訳と成立——中野柳圃の言語研究を中心に」『文学』第 48 巻第 8 号、昭和 56
66. 杉本つとむ「宇田川晋撰『蘭学秘蔵』の考察——志筑忠次郎、助辞考」『武蔵野女子大学紀要』Vol.9.1974
67. 鈴木一彦「明治初期の国文法」『立教大学日本文学』第 21 号、昭和 43
68. 住谷申一「馬場辰猪年譜について——主として日本修学時代を中心に」『人文学』第 30 号、同志社大学人文学会、1957
69. 竹村 覚「徳川時代の英語研究」『英語青年』Vol.66, No.7~10, 12, 13 ; Vol.67, No.2, 4, 6.
70. 竹村 覚「徳川時代の英語研究——特にその解釈力について」『英語英文学論叢』第 2 巻第 1 号、広島大学英语英文学研究室、昭和 7
71. 外山敏男「英語教育史の時代区分——日本英語教育史序説」札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』Vol.9-No.2. 1976
72. 富田 仁・西堀 昭『佛語明要』解説（復刻版『佛語明要』付録）カルチャー出版社、昭和 50(1975)
73. 中村不二夫「助動詞 Do の発達：伝統的史的研究の本流」（『助動詞 Do 起源・発達・機能』所収）英潮社、1994
74. 中村正直「漢学不可廃論」『太陽』臨時増刊第 13 巻第 19 号、博文館、明治 40
75. 永山 勇「西洋文典と国文法」（『日本文法口座』2 所収）明治書院、昭和 32
76. 新村 出「王堂先生の功績と感化」『英語青年』（チェンバレン記念号）Vol.73-No.2、昭和 10
77. 仁田義雄「西洋人の書いた日本文法」『言語』10-1、昭和 56
78. 沼田次郎「文化文政期の蘭学について——志筑忠雄と馬場貞由」『史艸』日本女子大学史学研究会第 7 号、昭和 41
79. 服部 隆「明治前期における国文典の問題——西洋文典からの影響を中心に」『国文学論集』19、上智大学国文学会、1986

80. フォス美弥子「幕末期のオランダ語・日本語事情 I」(有坂隆道・浅井允晶編『論集日本の洋学』所収) 清文堂、1997
81. 福鎌達夫「洋学者西 周序説」(『明治初期百科全書の研究』所収)風間書房、昭和 43
82. 『富山房五十年史』富山房、昭和 12、130 号、龍溪書房、1963
83. 古田恵美子「文法術語『ROOT』の指すもの——ロドリゲスからチェンバレンまで」東京大学国語研究室創設百周年記念『国語研究論集』汲古書院、平成 10
84. 古田東朔「品詞分類概念の移入とその受容過程」蘭学資料研究会刊『蘭学資料研究』130 号、龍溪書房、1963
85. 古田東朔「アストンの日本文法研究」『国語と国文学』55-8、昭和 53
86. 古田東朔「幕末期の翻譯草稿二つ」『文学・語学』第 33 号、三省堂、昭和 39
87. 古田東朔「田中義廉」(一～三)『実践国語』第 14-16 号、昭和 30
88. 古田東朔「明治前期の国語教科書について」『文芸と思想』第 10 号、福岡女子大学文学部、昭和 30
89. 古田東朔「大庭雪斎」蘭学資料研究会『研究報告』第 142 号、1963
90. 古田東朔「洋文典における品詞訳語の変遷と固定」『香椎瀉』第 3 号、福岡女子大学国文学会、昭和 36
91. 古田東朔「西周『百学連環』『知説』中の文法説について——明治初期洋風文典原典考 1」『解釈』第 4 卷第 9-10 号、昭和 33
92. 古田東朔「中根 淑『日本文典』の拠ったもの——明治初期洋風文典原典考 2」『解釈』第 5 卷第 1 号、昭和 34
93. 古田東朔「田中義廉『日本小学文典』の拠ったもの——明治初期洋風文典原典考 3」『解釈』第 5 卷第 3 号、昭和 34
94. 古田東朔「物集高見博士『日本文語』の拠ったもの——明治初期洋風文典原典考 4」『解釈』第 6 卷第 1 号、昭和 35
95. 古田東朔「明治以後最初に公刊された洋風日本文典——古川正雄『絵入智慧の環』について」『香椎瀉』第 4 号、福岡女子大学国文学会、昭和 33
96. 古田東朔「日本文典に及ぼした洋文典の影響——特に明治前期における」『文芸と思想』第 16 号、福岡女子大学文学部、昭和 33
97. 古田東朔「大槻文彦伝」(一～十五)『月刊文法』、明治書院、昭和 44.5～46.1
98. 梶井迪夫『SHALL と WILL』(英文法シリーズ第 14 卷)研究社、昭和 29
99. 松平圓次郎「動詞の法につきて」『帝国文学』第七卷第四、明治 34
100. 松波 有「学校文法と科学文法」(現代英語教育口座 6『英語の文法』所収) 研究社、昭和 40
101. 松波 有「助動詞 Do の起源」(『英語史研究』所収)松柏社、昭和 49
102. 村松 明「洋文典と品詞論」(『品詞別日本文法口座』第 10 卷所収)、明治書院、昭和 48

103. 松村 明「丹波修造旧蔵『和蘭文典』の譯語」 蘭学資料研究会刊『蘭学資料研究』114号、龍溪書房、1962
104. 松村 明「蘭語学習とその訳読法」(『洋学資料と近代日本語の研究』所収) 東京堂出版、昭和45
105. 松村幹男「明治20年代前半における英語教授・学習史」『広島大学教育学部紀要』第2部 第29号、1981
106. 松村幹男「明治20年代後半における英語教授・学習史」『広島大学教育学部紀要』第2部 第30号、1982
107. 松村幹男「明治10年代初期における英語教授・学習史」『広島大学教育学部紀要』第2部 第31号、1983
108. 松村幹男「明治10年代中期における英語教授・学習史」『広島大学教育学部紀要』第2部 第32号、1984
109. 松村幹男「明治10年代後期における英語教授・学習史」『広島大学教育学部紀要』第2部 第33号、1985
110. 松村幹男「明治30年代前期における英語教授・学習史」『広島大学教育学部紀要』第2部 第34号、1986
111. 松村幹男「明治初期(明治1-9年)における英語教授・学習史」『広島大学教育学部紀要』第2部 第41号、1992
112. 松村幹男「明治40年代における英語教授・学習史」『広島大学教育学部紀要』第2部 第42号、1993
113. 馬淵一男「<まし>の心理的風景」『解釈』第3巻第6巻、昭和32
114. 丸山國雄「我が国に於ける獨逸学の勃興」(『日獨交通資料』第三輯) 日獨文化協会、昭和11
115. 三沢光博「<訳文筌蹄>における語の分類意識」『語文』第十五輯、日本大学国文学会、昭和38
116. 宮田和一郎「反実仮想ということ」『解釈』第11巻第6号、昭和40
117. 茂住實男「明治初期の英語学習帳<英吉利文典訳>について」『拓殖大学論集』第147号、昭和59
118. 茂住實男「英語教育形成期の研究」『教育史学会紀要』第12集(日本の教育史学) 講談社、1969
119. 物集高見「国文叢話」『國学院雑誌』第一巻、明治28
120. 森岡健二「欧文訓読小史」東京大学国語研究室創設百周年記念『国語研究論集』汲古書院、平成10
121. 山岸光宣「日本に於ける獨逸語研究の沿革」『獨逸文学』第三年第三輯、東京帝国大学獨逸文学会編、昭和14(1939)
122. 山本四郎「海上隨鷗とその一門——京都蘭学史研究」『文化史学』第14号、文化

史学会、昭和 33

123. 山本四郎「藤林普山研究」(『日本洋学史の研究』所収) 創元社、昭和 49
124. 吉岡秋義「『仏郎察辞範』源流考」『長崎大学教養部紀要』人文科学第 4 巻、1964
125. 吉岡秋義「『仏郎察辞範』と『和仏蘭対訳語林』に就いて」『長崎大学教養部紀要』人文科学第 5 巻、1965

研究書

126. 有坂隆道『日本英学史の研究』創元社、1972
127. 朝倉純孝『オランダ語文典』大学書林、昭和 58
128. 荒木伊兵衛『日本英学書誌』創文社、昭和 6
129. 池田哲郎『日本英学風土記』篠崎書林、1979
130. 石井研堂『改訂増補 明治事物起源』(明治文化全集別巻)春陽堂、昭和 44
131. 稲富栄次郎『明治初期教育思想の研究』(第 2 版) 福村書店、1963
132. 井上哲次郎『日本に於ける獨逸語研究の起源及び其の発展』日独文化協会、1934 (昭和 9)
133. 井村道元・若林俊輔『英語教育の歩み』中教出版、昭和 55
134. 『英語教育問題の変遷』(現代の英語教育 I) 研究社、昭和 54
135. 『英学事始』日本英学史学会編、エンサイクロペディア・ブリタニカ 1976
136. 『英語事始』日本英学史学会編、TBS ブリタニカ、1976
137. 英語文献翻刻シリーズ: 第 9, 13 巻(1968)、第 10 巻(1970)、第 14, 19 巻(1871) 南雲堂
138. 『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』大阪女子大学、1962
139. 太田雄三『英語と日本人』講談社学術文庫、1995
140. 太田雄三『B. H. チェンバレン: 日欧間の往復運動に生きた世界人』リポポート、1990
141. 太田 朗『完了形・進行形』(英文法シリーズ第 12 巻)研究社、1954
142. 落合直文・小中村義象合著『中等教育日本文典』(全) 日本堂/博文館、明治 23
143. 大塚虎男『英語動詞の体の研究』大塚虎男刊、昭和 31
144. 大槻如電『新撰洋学史年表』柏林社、昭和 2
145. 大槻文彦『広日本文典別記』(第三版) 大槻家蔵版、昭和 3
146. 大槻文彦『復軒雜纂』廣文堂書店、昭和 35
147. 大槻文彦『語法指南』(第 3 版) 小林新兵衛、明治 26
148. 大槻文彦『広日本文典』吉川半七、明治 30
149. 大村喜吉『斎藤秀三郎伝——その生涯と業績』(第 6 版) 吾妻書房、1977
150. 岡田正美『解説批評日本文典』博文館、明治 35
151. 小川三郎「不定詞」(英文法シリーズ第 16 巻) 研究社、1954

152. 大久保恵子編・訳『チェンバレン日本語口語入門 第二版』笠間書院、平成 11
153. 海軍兵学校編『海軍兵学校沿革』原書房、1968-1978(明治百年史叢書:第 74 卷 ; 第 279 卷)
154. 片桐一男『未刊蘭学資料の書誌的研究』ゆまに書房、1997
155. 片桐一男『蘭学事始とその時代』(NHK文化セミナー「歴史に学ぶ」)NHK出版、1997
156. 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』吉川弘文館、昭和 60
157. 勝俣銓吉郎『日本英学小史』研究社、1936
158. 金井 圓『近世日本とオランダ』放送大学教育振興会、1993
159. 金沢庄三郎『日本文法論』金港堂、明治 36
160. 倉沢 剛『幕末教育史の研究』吉川弘文館、1983
161. 川本茂雄『言語の構造——フランス語そのほか』白水社、1985
162. 『慶応義塾百年史』(上) 昭和 35
163. 『研究資料 日本文法』[品詞論・体言編] 明治書院、昭和 59(1984)
164. 『研究資料 日本文法』[用言編(一)動詞] 明治書院、昭和 59(1984)
165. 高津春繁『基礎ギリシャ語文法』(第 12 版) 北星堂書店、昭和 59
166. 古賀十二郎『徳川時代に於ける長崎の英語研究』九州書房、1947
167. 古賀十二郎『長崎洋学史』(上) 長崎学会編、昭和 41
168. 『国語学体系』語法総記 1・2、厚生閣、昭和 13
169. 『国語学口座』白帝社、昭和 44
170. 後藤正次『日本英語教育史研究序説——英学物語資料』山口書店、1992
171. J.ゴンダ著/ 辻 直四郎校閲、鎧 淳訳『サンスクリット語初等文法』練習題、選文、語彙付 春秋社、1979.
172. 斎藤 信『日本におけるオランダ語研究の歴史』大学書林、昭和 60
173. 桜井 役『日本英語教育史稿』文化評論出版、1970
174. 佐々木満子『英学黎明』近代文化研究所、1975
175. 佐野正巳『国学と蘭学』有山閣、1973
176. 定宗数松『日本英学物語』(復刻版) 文化評論出版、昭和 54
177. 佐藤昌介『洋学史の研究』中央公論社、1980
178. 佐波亘編『植村正久と其の時代』第 5 巻 教文社、昭和 51 (復刻再販)
179. 重久篤太郎『江戸英学史の片影』林 純蔵編輯・発行、昭和 7
180. 重久篤太郎『日本近世英学史』教育図書、1941
181. 重久篤太郎『明治文化と西洋人:重久篤太郎著作集』思文閣出版、1981
182. 書誌書目シリーズ 39「近代日本英語・英米文学書誌」第二巻:『雑誌』ゆまに書房、1995
183. 『資料 日本英学史』(全 3 巻: I. 英学ことはじめ; II. 英語教育論争史; III. 日本英学書解題) 大修館書店、1978

184. 杉浦茂夫『品詞分類の歴史と原理』こびあん書房、昭和 51
185. 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』I～V、早稲田大学出版部、昭和 51～57
186. 杉本つとむ『英文鑑^{かがみ}——資料と研究』ひつじ書房、1993
187. 杉本つとむ『蘭学に命をかけ申し候』白告星社、1999
188. 杉本つとむ『日本翻訳語史の研究』八坂書房、1983
189. 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』八坂書房、1985
190. 杉本つとむ編『日本英語文化史資料』八坂書房、1985
191. 杉本つとむ『国語学と蘭語学』武蔵野書院、平成 3
192. 杉本つとむ『蘭語学とその周辺』(日本語口座 5) 桜楓社、昭和 56
193. 杉本つとむ『外国語と日本語』(日本語口座 6) 桜楓社、昭和 56
194. 杉本つとむ『長崎通詞物語』創拓社、1990
195. 杉本つとむ『江戸の文苑と文章学』早稲田大学出版部、1996
196. 杉本つとむ『江戸の翻訳家たち』早稲田大学出版部、1996
197. 杉本つとむ『江戸の言語学者たち』雄山閣、昭和 62
198. 杉本つとむ『西洋文化受容の諸相』八坂書房、1999
199. 杉本つとむ『西洋人の日本語発見——外国人の日本語研究史 1549～1868』創拓社、1989
200. 杉本つとむ『人物でつづる近代日本語の歴史』(雄山閣 BOOKS 18) 雄山閣、昭和 60
201. 杉本つとむ編著『日本洋学少誌』(洋学資料文庫 3) 皓星社、2001
202. 鈴木重貞『ドイツ語の伝来——日本独逸学史研究』教育出版センター、昭和 51
203. 鈴木常光『飯泉讓介——和蘭文典を著した蘭学者』筑波書林、1982
204. 関根正直『国語学』弦巻書店、明治 24
205. 惣郷正明『日本英学のあけぼの——幕末・明治の英語学』創拓社、1990
206. 惣郷正明『サムライと横文字』ブリタニカ出版、1977
207. 高梨健吉『日本英学史考』東京法令出版、平成 8
208. 高梨健吉・大村喜吉『日本の英語教育史』(第 6 版)大修館、1991
209. 高梨健吉他著『英語教育問題の変遷』(現代の英語教育 1)研究社、昭和 54
210. 高梨健吉『英学ことはじめ』角川書店、1965
211. 高梨健吉・大村喜吉『日本の英語教育史』大修館書店、1975
212. 高梨健吉『文明開化の英語』藤森書房、1978
213. 高梨健吉『日本英学史概説』高梨健吉、1981
214. 高橋邦太郎『日仏の交流 友好三百八十年』三修社、1982
215. 高橋邦太郎・富田 仁・西堀 昭『ふらんす語事始——仏学始祖村上英俊の人と思想』校倉書房、1975

216. 高野長運編『高野長英全集』昭和6
217. 竹内 寛『日本英学発達史』研究社、昭和8
218. 武内 博編著『日本洋学人名辞典』柏書房、1994
219. 田中梅吉『日独言語文化交流史大年表：総合詳説』三修社、1968
220. チェンバレン著/高梨健吉訳『日本事物誌』平凡社、1976(東洋文庫:131)
221. 出来成訓『日本英語教育史考』東京法令出版、平成5
222. 手塚達磨『英学史の周辺』吾妻書房、1968
223. 『ドイツ言語学辞典』紀伊国屋書店、1994.
224. 『ドイツ語文法用語』日本独文学会編、1955
225. 『ドイツ語教育の基本的諸問題』日本独文学会ドイツ語学委員会編、南光堂、昭和46
226. 『東京大学五十年史』(上冊)東京帝国大学、昭和7
227. B.C.ドナルドソン著/石川光庸・川崎 靖訳『オランダ語誌——小さな国の大きな言語への旅』現代書館、1999.
228. 富田 仁『仏蘭西学のあけぼの——仏学事始とその背景』カルチャー出版社、1975
229. 豊田 実『日本英学史の研究』千城書房、昭和38
230. 中尾俊夫『英語史Ⅱ』(英語学体系第9巻)大修館書店、1979.
231. 『長崎原本<諳厄利亜興学小筈><諳厄利亜語林大成>研究と解説』日本英学資料研究会、大修館、1982
232. 中野 操『大阪蘭学史話』思文閣、昭和54
233. 中山 茂『幕末の英学』ミネルプア書房、1984
234. 中山直次『初級スペイン語』白水社、1992
235. 『日本の英学百年』(明治・大正・昭和編)研究社、1968-9
236. 沼田次郎『幕末洋学史』刀江書院、1951
237. 沼田次郎『洋学伝来の歴史』至文館、1968
238. 日蘭学会編『洋学関係研究文献要覧1962-1982』日蘭学会学術著書、日外アソシエーツ、1984
239. 日蘭学会編『洋学史辞典』雄松堂、昭和59
240. 沼田次郎『洋学』吉川弘文堂、1989
241. 芳賀矢一遺著『日本文献学』富山房、昭和3
242. 馬場辰猪『小学日本文典』(*Elementary Grammar of the Japanese language*. London, 1873 ; 『国語学体系』語法総記2 所収) 厚生閣、昭和13
243. 林 哲郎『英語学史論考』こびあん書房、1978
244. 福井久蔵『日本文法史』大日本図書株式会社、明治40
245. 福原麟太郎『日本の英学史』(日本文化研究3)新潮社、昭和37
246. 福原麟太郎『日本の英学史』新潮社、1959
247. 福原麟太郎他監修『英語の文法』(現代英語教育口座6)研究社、昭和40

248. 福原麟太郎『日本の英語』恒文社、1997
249. 福村虎治郎『時制と態』(英文法シリーズ第11巻)研究社、昭和29
250. 古川正雄『絵入智慧の環』初編上・下 詞の巻(『日本教科書体系』近代編第四巻 国語 所収)講談社、昭和39
251. 『文明源流叢書』(一～三巻) 国書刊行会、大正2
252. 細江逸記『動詞時制の研究』 泰文社、1932
253. 細江逸記『動詞叙法の研究』(第17版) 泰文社、昭和17
254. 松下大三郎『増補校訂 標準日本口語文法』 勉誠社、昭和5
255. 松田 清『洋学の書誌的研究』 臨川書店、平成10
256. 松村 明『洋学資料と近代日本語の研究』 東京堂出版、昭和45
257. 松村幹男『明治期英語教育研究』 辞游社、1997
258. 水野 賢『文法研究史と文法研究』 明治書院、1991
259. 三土忠造『再訂中等国文典』(第26版) 富山房、明治36
260. 宮田秀雄『法・助動詞』(英文法シリーズ13) 研究社、昭和30
261. 宮永 孝『日独文化人物交流史——ドイツ語事始め』 三修社、1993
262. 宮永 孝『幕府オランダ留学生』 東京書籍、1982
263. 宮永 孝『慶応二年幕府イギリス留学生』 新人物往来社、1994
264. 宮永 孝『阿蘭陀商館物語』 筑摩書房、1986
265. 茂住實男『洋語教授法史研究——文法=訳読法の成立と展開を通して』 学文社、1989
266. 『物集高見全集』 物集高見全集編纂会、昭和10
267. 森 納『因伯洋学史話』 富士書店、1993
268. 森川 潤『明治初年のドイツ留学生』 広島修道大学総合研究所、1994
269. 安井 稔『英語学研究』 研究社、1960
270. 山田孝雄『国語学史要』(第三版) 岩波書店、昭和12
271. 山田孝雄『日本文法論』(復刻版) 寶文館蔵版、昭和45
272. 『洋学』(上・下)(日本思想体系64・65) 岩波書店、1976[上巻]、1972[下巻]
273. 米山梅吉『幕末西洋文化と沼津兵学校』 米山梅吉発行、昭和9
274. 蘭学資料叢書5 藤林普山『譯鍵 附蘭学逕』 青土社、1981
275. Lehmann 著/ 松浪 有訳『歴史言語学序説』 研究社、1972
276. ロウビンズ著/中村 完・後藤 斉訳『言語学史』 研究社、1992
277. 渡部昇一『英文法史』 研究社、昭和40
278. 渡部昇一『英語学史』 大修館書店、1975
279. 渡部昇一スタンダード英語講座3『英語の歴史』 大修館 1984
280. Arens, H. *Sprachwissenschaft. Der Gang ihrer Entwicklung von der Antike bis zur Gegenwart.* Zweite, durchgesehene und stark erweiterte Auflage. München, 1969.
281. Blatz, F. *Neuhochdeutsche Grammatik mit Berücksichtigung der historischen*

Entwicklung der deutschen Sprache. 2 Bände. Dritte völlig neubearbeitete Auflage. Karlsruhe : J.Lang, 1896.

282. Becker, K. F. *Ausführliche deutsche Grammatik als Kommentar der Schulgrammatik*. I - II. Zweite neubearbeitete Ausgabe. Prag : Verlag von Friedrich Tempsky, 1870 ; rpt. : Documenta Linguistica. Quellen zur Geschichte der deutschen Sprache des 15. bis 20. Jahrhunderts. Reihe IV. : Grammatiken des 19. Jahrhunderts. Hrsg. von Ludwig Erich Schmitt. Georg Olms Verlag : Hildesheim • New York, 1969.

283. Bopp, F. *Über das Conjugationssystem der Sanskritsprache in Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen und germanischen Sprache*. Nebst Episoden des Ramajan und Mahabbarat in genauen metrischen Uebersetzungen aus dem Originaltexte und einigen Abschnitten aus den Veda's. Frankfurt am Main, 1816 ; rpt. : FOUNDATIONS OF INDO-EUROPEAN COMPARATIVE PHILOLOGY, 1800-1850. Vol.1. Edited by Roy Harris. Routledge, London and New York, 1999.

284. Bopp, F. *Vergleichende Grammatik des Sanskrit, Zend, Griechischen, Lateinischen, Litthauischen, Altslawischen, Gothischen und Deutschen*. Berlin, 1842 ; rpt. : FOUNDATIONS OF INDO-EUROPEAN COMPARATIVE PHILOLOGY, 1800-1850. Vol.10-11.

285. Benfey, T. *Geschichte der Sprachwissenschaft und orientalischen Philologie in Deutschland seit dem Anfange 19. Jahrhunderts mit einem Rückblick auf die früheren Zeiten*. München, 1869.

286. Benfey, T. *Kurze Sanskrit-Grammatik zum Gebrauch für Anfänger*. Leipzig : F. A. Brockhaus, 1855.

287. Brugmann, K.. *Kurze vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen*. Auf Grund des fünfbändigen 'Grundrisses der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen von K. Brugmann und B. Delbrück verfaßt von Karl Brugmann. Anastatischer Neudruck. Berlin und Leipzig, 1922.

288. Chamberlain, B. H. *Things Japanese*. Being Note on various subjects connected with Japan. For the use of travellers and others. Sixth Edition Revised. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd. Japan: J. L. Thompson & Co. (Retail), Ltd., Kobe. 1939.

289. Delbrück, B. *Einleitung in das Studium der indogermanischen Sprachen*. Ein Beitrag zur Geschichte und Methodik der vergleichenden Sprachforschung. Sechste, durchgesehene Auflage. Leipzig : Druck und Verlag von Breitkopf & Härtel, 1919.

290. Delbrück, B. *Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen*. Zweiter Theil. Strassburg : Karl J. Trübner, 1897.

291. Englien, August. *Grammatik der neuhochdeutschen Sprache*. 5.Auflage. Berlin:

Wilh. Schultze's Verlag. 1903.

292. Funke, O. *Englische Sprachlehre*. Ein Überblick AB 1935. Wissenschaftliche Forschungsberichte. Geisteswissenschaftliche Reihe. Hrsg. von Prof. DR. Karl Nönn. Band 10. Bern: A. Francke AG. Verlag, 1930.

293. Funke, O. *Die Frühzeit der englischen Grammatik*. Die humanistisch=antike Sprachlehre und der nationalsprachliche Gedanke im Spiegel der frühneuenglischen Grammatiker von Bullokar(1586) bis Wallis(1653). Die grammatische Systematik und die Klassifikation der Redeteile. Schriften der Literarischen Gesellschaft Bern. Bd.IV. Bern: Herbert Lang & Cie, 1941.

294. Grimm, J. *Deutsche Grammatik*. Erster Theil : Göttingen, 1819 ; Zweiter Theil : Göttingen, 1826 ; rpt.: FOUNDATIONS OF INDO-EUROPEAN COMPARATIVE PHILOLOGY, 1800-1850. Vol.3. (1st edition) , Vol.6

295. Grimm, J. *Deutsche Grammatik*. 1.Theil : 2.Ausgabe. Neuer vermehrter Abdruck. Berlin, 1870 ; 4.Theil : Neuer vermehrter Abdruck. Gütersloh, 1898 ; rpt. : Hildesheim · Zürich · New York: Olms-Weidmann, 1989.

296. Heyse, K. W. L. *System der Sprachwissenschaft. Nach dessen Tode herausgegeben von Dr. H. Steinthal*. Berlin, 1856.

297. Hirt, H. *Doppelung Zusammensetzung Verbum*. (Indogermanische Grammatik Teil IV) Heidelberg, 1928.

298. Hirt, H. *Geschichte der deutschen Sprache*. München : C.H.Beck'sche Verlagbuchhandlung, 1968. (Unveränderter Nachdruck der 1925 erschienenen zweiten, neubearbeiteten Auflage.)

299. Hoffmann, J, J. *Japanische Sprachlehre*. (Nach der holländischen Ausgabe von 1868 ins deutsche Übertragen.) Leiden: E. J. Brill, 1877.

300. Jellinek, M. H. *Geschichte der Neuhochdeutschen Grammatik von den Anfängen bis auf Adelung*. Heidelberg: Carl Winter, 1914.

301. King, J.E. and Cookson, C. An introduction to the comparative grammar of Greek and Latin. Oxford, MDCCCXC(1890)

302. Kühner, R., *Ausführliche Grammatik der Griechischen Sprache*. Erster Teil : Elementar- und Formenlehre. Erster Band. Hannover und Leipzig, 1890 ; rpt. : Hannover : Verlag Hahnsche Buchhandlung, 1978.

303. Kühner, R. *Ausführliche Grammatik der griechischen Sprache*. Zweiter Teil : Satzlehre. Dritte Auflage in zwei Bänden in neuer Bearbeitung, besorgt von DR. Bernhard Gerth. Erster Band. Hannover und Leipzig : Hahnsche Buchhandlung, 1898.

304. Leitner, G. English traditional grammars. An international perspective. Amsterdam/Philadelphia, 1991.

305. *Linguistics and Evolutionary theory*. Three essays by August Schleicher, Ernst Haeckel, and Wilhelm Bleek. Edited by Konrad Koerner. Amsterdam/ Philadelphia : John Benjamins publishing company, 1983. (Amsterdam Studies in the theory and history of linguistic science ; Series I - Amsterdam classics in linguistics, 1800-1925. Vol.6)
306. Müller, F. Max. *Die Wissenschaft der Sprache*. 2 Bände. Leipzig : Verlag von Wilhelm Engelmann, 1892.
307. Osthoff, H. Zur reduplikationslehre (*Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*. Hrsg. von Hermann Paul und Wilhelm Braune. VIII. Band. 3. Heft. Halle A/S : Max Niemeyer, 1882. s.540-567.)
308. Robuns, R.H. *Ancient and Mediaeval Grammatical Theory in Europe with particular reference to modern linguistic doctrine*. London. G. Bell and Sons LTD, 1951.
309. Schleicher, A. *Die Darwinische Theorie und die Sprachwissenschaft*. Zweite Auflage. Weimar : Hermann Böhlau, 1873.
310. *Sprachgeschichte*. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung. 2. Halbband. hrsg. von Werner Besch · Odkar Reichmann · Stefan Sonderregger. Berlin · New York : Walter de Gruyter, 1985.
311. Steinthal, H. *Geschichte der Sprachwissenschaft bei den Griechen und Römern mit besonderer Rücksicht auf die Logik*. Berlin: Fried. Dimmler, 1863.
312. Vesper, W. *Deutsche Schulgrammatik im 19. Jahrhundert*. Zur Begründung einer historisch-kritischen Sprachdidaktik. Tübingen : Max Niemeyer Verlag, 1980.
313. Thomsen, V. *Geschichte der Sprachwissenschaft bis zum Ausgang des 19. Jahrhunderts*. Übersetzt von Hans Pollak. Halle(Saals) : Max Niemeyer Verlag, 1927.
314. Williams, M. *Practical grammar of the Sanskrit language, arranged with reference to the classical languages of Europe, for the use of English Students*. Fourth edition. Enlarged and Improved. Oxford, M.DCCC.LXXVII(1877).
315. Wilmanns, W. *Deutsche Grammatik. Gotisch, Alt-, Mittel-, und Neuhochdeutsch*. 3. Abteilung : Flexion. 1. Hälfte : Verbum. 1. und 2. Auslage. Strassburg, 1906.

○初出一覧

- 序 章…「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷」Ⅶ：現代文法から見た誤解
『外国語教育論集』26 筑波大学外国語センター 2004（「英語学論説資料」第38号採録予定〔平成17年12月現在〕）の一部をもとに、大幅に加筆訂正。
- 第一章…「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅰ：原形と不定法」『外国語教育論集』17 筑波大学外国語センター 1995（「英語学論説資料」第29号収録）をもとに、大幅に加筆訂正
- 第二章…以下の4論文をもとに大幅に加筆訂正。
「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅲ：Perfect と Imperfect①<過去>から<現在>になった Perfect（蘭・英の場合）」『外国語教育論集』19 筑波大学外国語センター 1997
「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅳ：Perfect と Imperfect②<過去>から<現在>になった Perfect（英・獨の場合）」『外国語教育論集』20 筑波大学外国語センター 1998
「明治時代の洋語文典における日本語——蘭訳英文典『和蘭語法解』と洋語文典の系譜」第3節 『文学研究論集』13 筑波大学比較理論文学会 1996（「英語学論説資料」第30号収録）
「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅶ：現代文法から見た誤解」『外国語教育論集』26 筑波大学外国語センター 2004（「英語学論説資料」第38号採録予定〔平成17年12月現在〕）
- 第三章…以下の3論文をもとに大幅に加筆訂正。
「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅱ：仮定法と接続法」『外国語教育論集』18 筑波大学外国語センター 1996
「明治時代の洋語文典における日本語——蘭訳英文典『和蘭語法解』と洋語文典の系譜」『文学研究論集』13 筑波大学比較理論文学会 1996（「英語学論説資料」第30号収録）
「蘭・英・獨語学における文法用語の成立と変遷Ⅴ：助動詞の和訳法と教授法」『外国語教育論集』22 筑波大学外国語センター 2000（「英語学論説資料」第34号収録）
- 終 章…書き下ろし
- 付 録…「明治時代の洋語文典における日本語——蘭訳英文典『和蘭語法解』と洋語文典の系譜」第4節 『文学研究論集』13 筑波大学比較理論文学会 1996（「英語学論説資料」第30号収録）をもとに大幅に加筆訂正。